

博士学位論文

保育活動における子どもの歌唱行為に
影響を与える要因に関する研究

令和3年度

筑波大学

湊 田 陽 子

はじめに

幼稚園や認定こども園、保育所で過ごす子どもたちは、朝の会、昼食時、降園前の集まりなどの集団活動で、友達や保育者と一緒に頻繁に歌を歌っている。

歌に関する研究において、荒金、川出（2009）は、歌唱前後の身体的変化と心理的变化を調査した結果、歌唱行為は、心を落ち着かせる作用をもつとともに、生き生きとした心に活性させる作用をもつことを明らかにしている。また、斎藤（2015）は、成人男女に対する歌唱前後の唾液検査と感情の変化についてのヒアリング調査を行い、歌唱前より歌唱後は唾液量が増えストレスが軽減し、前向きな気分になることを確認している。これらの研究から、歌を歌う活動は、心身の健康によい影響をもたらす活動であることが示されている。

幼稚園や認定こども園、保育所といった保育の場での子どもたちの歌唱活動の様子をみると、大きく口をあけて、大きな声で歌っている子ども、口の開き方が小さく声を出しているのかどうかわかりにくい子どもなど、いろいろな歌い方の子どもがいる。また、歌を歌う活動に対して、積極的に取り組む子どもや歌う活動を得意とする子どもが見受けられる一方、消極的に取り組む子どもや歌う活動を苦手とする子どもも見受けられる。

保育者が保育の場で活用できる様々な楽譜が販売され、保育者たちはバラエティに富んだ教材をそろえているが、実際の歌唱指導を見学すると、子どもたちの歌唱指導が適切になされていない現状がある。また、先行研究をみても、楽しそうに歌う子どもがいる一方で、歌うことを嫌がる子どもがいることに関する要因が明らかにされていない。

そこで、本研究では、子どもたちがどのような環境のもとで、どのように歌唱体験をしているのかを子どもと関わる保育者と子どもを養育する保護者に調査したうえで、子どもがどのように歌を歌っているのかを測定し、それらが子どもたちの歌唱行動にどのように影響を与えているのかを明らかにしていきたいと考えた。

筆者は、幼稚園、保育所で保育者として、あるいは音楽教室の講師として、子どもたちと、音楽を通して関わってきた。子どもから「今日は、何を歌うの？楽しみ」、「昨日、歌った歌を、今日も歌いたい」と歌唱活動を楽しみにしている言葉を受けとる一方、歌唱活動中によそみをしたり、ふざけたりしている子どももいた。後者の子どもは、参観日や行事、発表会

で保護者の前で歌を歌うと、会を終えてから、保護者から「どうして、歌わないの?」、「○○ちゃんみたいに、元気に歌いなさい」と言われていた。また、保護者が苦虫をかみつぶした表情で子どもをみるため、笑顔が満開だった子どもの表情が一気に曇る場面を、目の当たりにすることがあった。さらに、翌日の連絡帳に、保護者が「歌いたくないことが、はた目からわかるような様子で歌うわが子の姿を見て、ショックでした」と感想を記していることもあった。

このような現状を含め、子どもたちが歌を歌う要因にはどのようなことが関係するのかを明らかにしていく必要があることを痛感した。筆者は、前述したように保育者として、あるいは音楽教室の講師として、子どもたちと音楽活動を進める中で、自分にできることは幼児期の音楽活動の研究であることを認識し、音楽活動の中でも子どもの歌唱活動に焦点を置き、研究を続けてきた。そしてその研究の過程において、博士論文を作成した。子どもの歌唱活動をはじめとする音楽活動に関わる研究課題はまだ数多くある。それらについて、今後も、真摯に取り組んでいくつもりである。

目次

第1章 問題の所在と目的	4
第1節. 音の要素・音楽の要素	4
第2節. 子どもの歌唱に関する発達	5
第3節. 歌唱を構成する要素	8
第4節. 歌唱能力と家庭環境の関連	10
第5節. 保育における歌唱指導の現状と課題	11
第6節. 保育者養成校における歌唱指導の現状と課題	13
第7節. 本論文の目的と論文の構成	14
第2章 子どもの歌い方に関する要因分析研究	16
第1節 家庭での子どもの歌唱に関わる環境	16
(1) . 目的	16
(2) . 方法	16
(3) . 分析方法	17
(4) . 結果	17
(5) . 考察	35
第2節 保育の場での子どもの歌唱に関わる環境	37
(1) . 目的	37
(2) . 方法	38
(3) . 分析方法	39
(4) . 結果	39
(5) . 考察	64
第3節 子どもに表れる歌い方の違い	67
(1) . 目的	67
(2) . 方法	68
(3) . 分析方法	72

(4) . 結果.....	78
(5) . 考察.....	81
第4節 子どもに表れる特性.....	82
(1) . 目的.....	82
(2) . 調査方法.....	82
(3) . 分析方法.....	84
(4) . 結果.....	84
(5) . 考察.....	90
第5節. 子どもの歌い方に関する要因分析.....	91
(1) . 目的.....	91
(2) . 分析方法.....	91
(3) . 結果.....	92
(4) . 考察.....	96
① 音高.....	96
保育の場に関する要因.....	96
家庭に関する要因.....	99
子どもの特性に関する要因.....	100
② 歌詞.....	101
保育の場に関する要因.....	101
子どもの特性に関する要因.....	102
家庭に関する要因.....	103
第3章 総合考察.....	104
第1節 本研究のまとめ.....	104
(1) . 子どもの音楽に関わる家庭環境調査.....	104
(2) . 子どもの音楽に関わる保育環境調査.....	104
(3) . 子どもに表れる歌い方調査.....	105
(4) . 子どもの特性調査.....	105
(5) . 子どもの歌い方に関する要因分析.....	106

第2節 総合考察.....	107
第3節 研究の限界と今後の課題.....	110
(1) . 研究の限界.....	110
(2) . 今後の課題.....	110
引用文献.....	113
謝 辞.....	122

資料

第1章 問題の所在と目的

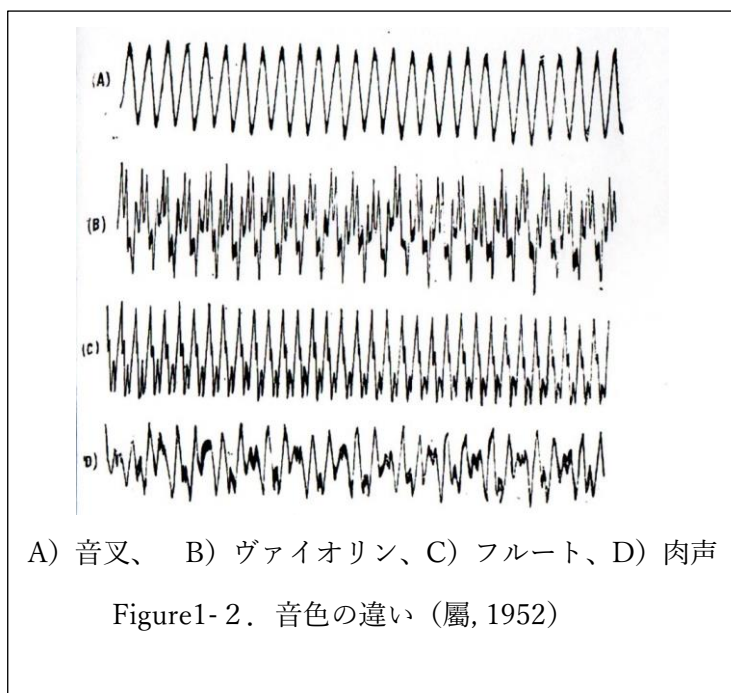
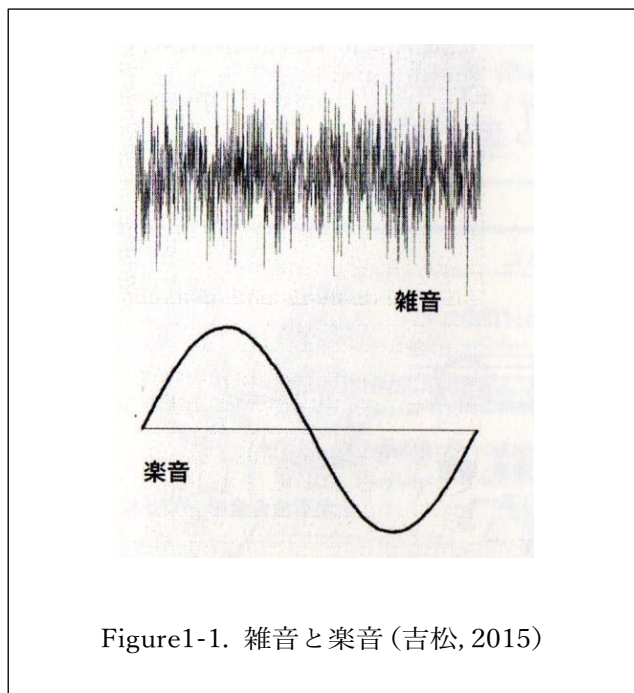
第1節. 音の要素・音楽の要素

山根（1950）は、音には、「高さ」、「大きさ」、「音色」の3つの要素が存在し、この3要素が音楽の基本になると明示している。

音の高さは、波形の長さで示すことができる。1秒間に振動する回数が多いと高い音、振動する回数が少ないと低い音（吉松, 2015）となる。音の大きさは波の幅で決まり、振動する幅が広いと大きい音となり、振動する幅が狭いと小さい音となる。なお、音の大きさや高さが同じであっても、音色が異なれば波形が異なる（屬, 1952）。明確な振動数の中で美しい波形を有する持続的な音波になっているのが音楽の音、「楽音」である（Figure1-1）（栗原, 1952；吉松, 2015）。

音色は波形の形によって表すことができる。Figure1-2に示した（A）は音叉の波形である。音叉は楽器や発声の音高（Pitch）を確認する際にも使用され、単純な振動体から出る音波によって生じる音を発する（栗原, 1952）器具である。屬（1952）によれば、Figure1-2に掲載したように、音叉の波形は最も単純で規則正しい。さらに屬（1952）は、（B）（C）の楽器音は波形が複雑ながらも規則的であるのに対し、（D）の肉声は一つ一つの波形のカーブ部分が m、n、w、v のような異なる波形を示し、それは声が生きている人体の一部から発せられたためであろうと述べている。

音楽は一つの音だけでは成り立ちにくい。そのため、音楽をつくりあげる3つの要素として、旋律（メロディ）や、律動（リズム）、和声（ハーモニー）があげられる（桂, 1953）。旋律（メロディ）とは、構成された音を横に並べたもの（屬, 1952；桂, 1953）、律動（リズム）とは、音から次の音につなげるには音が鳴っている時間の長さの中で、音の線あるいは音の流れを形成する時間的な長さの関係（山根, 1950）、和声（ハーモニー）とは、一本の音の線に、もう一つの音の線をくわえたもの（桂, 1953）である。



第2節. 子どもの歌唱に関する発達

伊藤 (1978) は、一人の子どもが生まれてから歌うようになるまでの音声を抽出し、生後6ヵ月頃からは抑揚のある声を出すようになることや、歌を歌えるようになるには、乳児においても、十分な呼吸や記憶力など、心身諸機能の発達が必要であること、1歳3ヵ月以後からは、既成の歌を歌う際に、リズムと旋律がかなり明確になる結果を示している。

梶川・正高 (2000) は、24名の平均生後8ヵ月の健常乳児に童謡を聞かせた反応の観察を行い、1歳未満でも、歌から流れる歌詞の単語を抽出して記憶していることを明らかにしている。

細田 (2001) は、1歳児クラスに在籍する4名の子どもの参与観察を行った。その結果、言葉を発し始めた後で歌を歌うようになる子どもと、歌を歌うようになってから言葉を発するようになる子どもと、二つのタイプが存在することを明らかにした。

4名の子どもの声を誕生の瞬間から5年間継続して録音し、人の声と言葉の成長をたどった切替・沢島 (1968) の研究では、1歳を過ぎると、誰かと一緒に歌ったり模倣したりしながら徐々に音高感が育ち、2歳前後から3歳までの間に歌らしいメロディを表現できることを確認している。ただし、子どもは呼吸が浅く、発声のための呼吸の調節も大人ほど上手に

はできない。そのため、言葉が途中で途切れたり、息を吸いながら発音したりするという。くわえて、切替・沢島 (1969) は、幼児の音域調査をするために、幼児 152 名にピアノの音階に合わせて発声を行ったところ、5 歳児の音域は大人に比べて半分以下 (Figure 1-3) に過ぎないことも明らかにしている。

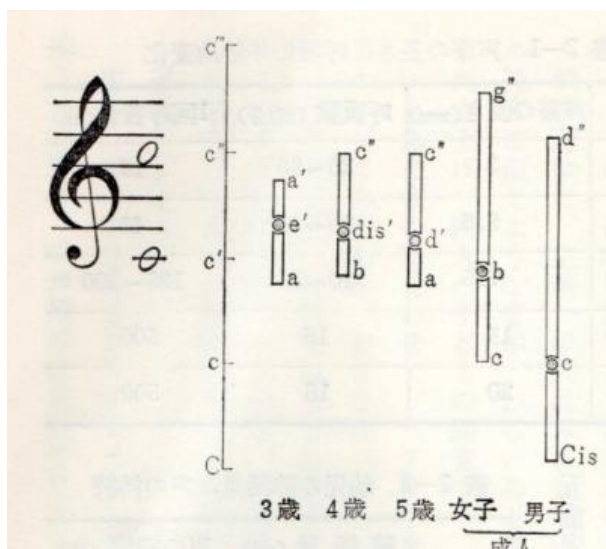


Figure 1-3. 音域について (切替・沢島, 1969)

武田・加藤 (2004; 2005; 2007) は、1 歳児から 5 歳児までの歌声の分析から、2 歳児になると 1 歳児よりも声域が

格段に拡大し、とぎれながら曲全体を歌うようになり、3 歳児では、歌っている途中で息を吸い込んでしまい、声として発声しない歌い方をする子どもが多くみられ、4 歳児では、リズム・音程が比較的正確に歌える子どもが増えてきているものの、どなり声や話し声に近い声、安定した声など個人差があり、5 歳児では、年中児と比較して、音域の幅が広がっていることを明らかにしている。

淵田 (2009; 2014; 2015) および Fuchida (2017) は、保育所で過ごす言語獲得期の健常児 3 名を 1 歳 6 ヶ月から 3 歳までの期間、参与観察を行った結果、3 名共に、他者が見つけた既成の歌は、曲の最後の歌詞である「りんご」なら「ごお」、「遊ぼうよ」なら「よお」を歌うことから始まり、徐々に語頭から歌うようになること、ただし、自分が見つけた自発歌は、曲の語頭から歌い始める (Figure 1-4) ことを明らかにした。このことから、既成の歌を歌い始めるようになるまでには、声を出す経験をしている、声を出すことが楽しい、あるいは、おもしろいと感じている、その歌をすでに聴いている経験をしている、歌を復唱できるだけの記憶力が備わっていることを示唆している。

歌詞つきの歌を歌う時期の歌唱発達経過

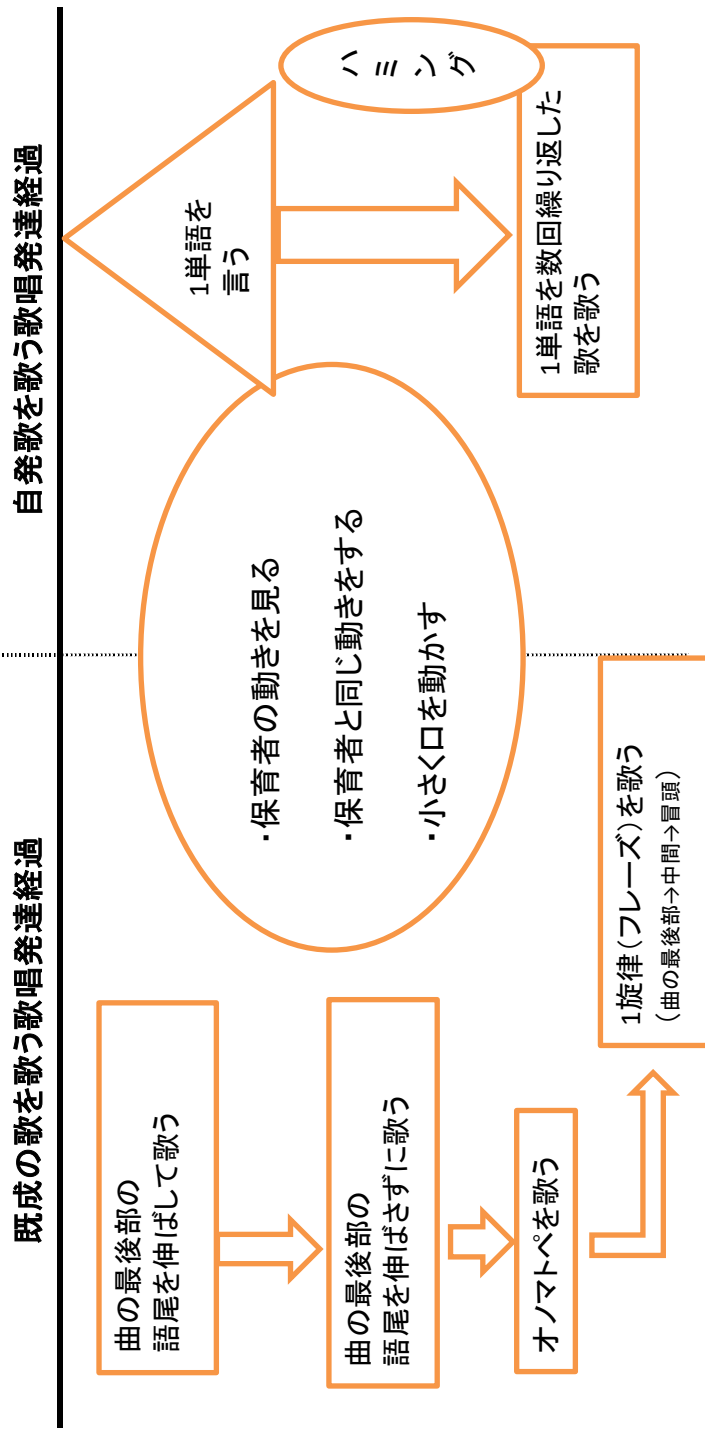


Figure 1-4. 歌を歌う時期の歌唱発達経過 (澁田, 2014)

自分が即興でつくった歌は、即興歌、つぶやき歌、自発歌、創作歌と呼ばれている。古賀・武藤・伊集院（1998）は、年中クラスの3学期から年長クラスの2学期途中まで、限定した1クラスの園生活で子どもが歌う行動の録画調査を行い、自分の思いや考えを歌で表現する根源的な音楽活動として、即興歌、つぶやき歌、自発歌、創作歌を生活の中で歌っていることを述べている。また、南・梅澤（1991）は、生後16ヵ月から20ヵ月までの一人の子どもが家庭での日常生活の中で歌った即興歌を収録し、分析した結果、うれしい楽しい気持ちになった時や、一人で何かをしている時に歌い、歌は遊びや活動状況と深く結びついて、生活の中に織り込まれているものであることを説明し、子どもは、ただ与えられた歌を模倣することによって音楽的に成長していくものではないと述べている。

細田（1988）も、2歳児の2名の子どもが歌ったつぶやき歌の分析と、5歳児クラスに在籍する38名の子どもが一斉に歌唱する際の様子録画分析を通して、自発的に歌い始めたつぶやき歌は、自然で柔らかく無理のない声で歌い、歌いだす状況は、子どもの環境や心の状態、気持ちの高まりなどが複合的に作り出していることを確認した。さらに、既成の歌を大人の要求に応じて歌う時は、歌う気持ちが十分に高まっていなかったり、イメージが膨らむ前に歌いだしたりするため、歌詞を思い出しながら一つずつしっかりと区切るような歌い方になることを明らかにした。

第3節. 歌唱を構成する要素

既成の歌を歌う際に、子どもたちがどのようにして歌っているのかを明らかにした研究では、7歳から9歳の120名の子どもたちの、動き（ジェスチャー）をつけて歌う録画と動きをつけずに歌う録画の二種類の録画を分析し、動き（ジェスチャー）をくわえて、歌えば音程がより正確になる（Mei-Ying, L., 2008）ことや、年少児、年中児、年長児の25名が歌唱した音声の分析から、幼児は楽曲の旋律を比較的まとまった単位で切り出し、旋律の相対的な音程感をもとに歌唱している（山根, 2009）ことが、明らかになっている。

保育中において既成の歌を歌う際、子どもは、小学生以上のように教科書（楽譜）を見ながら歌うのではなく聞き覚えて歌っている。つまり、聴取・記憶・再生の3つのプロセスを経て歌唱が成立している。歌の記憶の研究では、水戸・岩口・内山（2006）が、年中児と年長児の62名の子どもたちに個別に2種類の歌を歌う調査によって、リズム、歌詞、旋律の

記憶について研究を行っている。この研究は、子どもが、歌詞と旋律を共通にして、単純なリズムだけで構成された歌と、音を繋げて奏するタイや変則的なリズム（例：シンコペーション）を多用した複雑なリズムで構成された歌を歌っている様子を、一人ずつ録画し分析した研究である。その結果から、歌詞と旋律が同じであれば、複雑なリズム構造であっても単純なリズム構造であっても、歌を歌う子どもに混乱や困惑が生じることがないことが示された。さらに、年長児 5 名に対して、既成の歌の歌唱録音を分析した結果から、聴取には聴覚が関わり、記憶には大脳が関わり、再生には発声器官のほか、心理的、文化的な影響を様々なに受けている（岡林, 1995）ことが示唆されている。

小学生が行う音楽診断検査と保護者が記入する児童性格診断検査とを併用した音楽能力と特性の研究調査によって、音楽能力と性格特性は密接な相互作用の中で形成され、発達する（林・森, 1984）ことが確認された。また、7 歳から 9 歳の 120 名の子ども個々に歌唱録音を行い、年齢、性別などが歌唱に影響するのかどうかを分析した結果、男児と女児の歌唱能力に違いがあり、その原因として、見知らぬ人の前で歌う行為が関与している（Mang, 2006）ことが指摘されている。

人前で歌うことにおいては、12 名の子どもの日常生活において、いつ、どのように歌を歌うのかを子どもに録音機を装着して調査した結果、家で歌う状況と家以外の人前で歌う状況では歌い方が違う（Dean, 2015）ことや、3 歳の子どもが友達の前で歌を歌う調査では、目まで隠せる帽子をかぶって自分のお気に入りの歌を歌うと、音程や音高のずれがない（Gudmundsdottir, 2020）ことを明らかにしている。

細田（2001）は、1 歳児クラスに在籍する 4 名の子どもの保育所生活の観察を通して、子どもの音楽的発達には、母親の影響やそれぞれの子どもの発達の個人差、育った環境、集団保育の開始時期の違いなど、様々な要因が相互に関係していることを指摘している。

これらの研究から、歌唱行為の要因には、歌唱能力のほか、子どもが過ごす家庭環境や保育環境、くわえて特性など、様々な要因が関与していることが推測できる（figure1-5）。

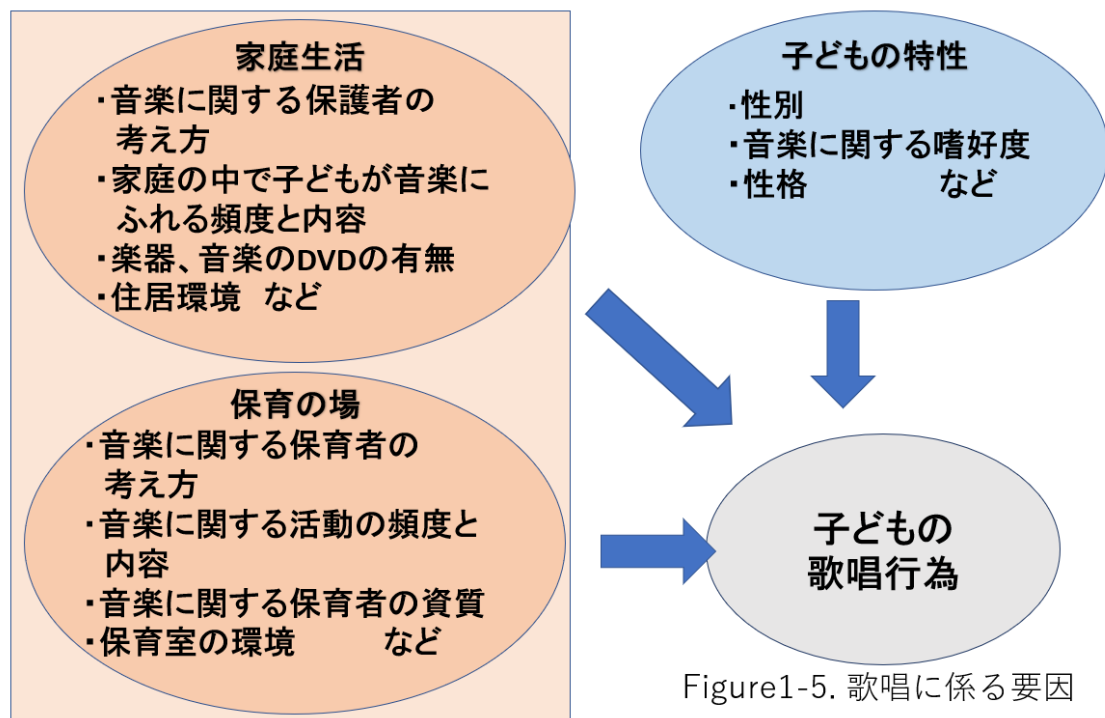


Figure1-5. 歌唱に係る要因

第4節. 歌唱能力と家庭環境の関連

母親が歌う歌に対する乳児の反応を調査した研究では、母親が自分の乳児に歌う歌と、自分の子どもではない乳児に歌う歌とでは歌い方に違いがあり、自分の乳児に歌う場合は、ピッチが高く、テンポが遅くなる傾向がある (Bergson・Trehub, 1999) ことや、乳児は母親の会話より母親の歌唱のほうを凝視する (Nakata・Trehub, 2004) ことが示されている。同様に、志村 (1991) は、3名の乳児と母親の音声録音を行い、母親が何気なく童謡の1フレーズを歌いかけたり、乳児の発声にピッチを合わせるように大きなイントネーションで話しかけたりする母親の音声は、乳児にとって最も大きな音響環境になっているという。

家庭生活での子どもの歌唱行動を保護者に問う質問紙調査から、家庭生活の中で保護者が子どもに歌を歌ってあげることと、子どもが、歌を歌うことが好きであったり、よく歌を歌ったりすることには有意な相関がみられ、家庭における音楽環境が子どもの歌に影響する (羽根田, 2003) ことや、保護者が子どもと音楽活動に関わる量によって、子どもの音楽関連 (歌う、演奏する、踊る) に対する反応が異なる (Valerio, W. H., Reynolds, M. A., Grego, R. J., Yap, C. C., & McNair, A., 2011) ことや、幼児期の子どもに歌を歌いながら子育てをすることが、子どもの社会的情緒スキルや心身の発達に良い影響を与える (Yamaoka, 2018)

ことが示唆されている。

子どもの家庭環境と子どもの音楽能力の研究においては、黒瀬（1993）が、幼児 157 名に強弱の弁別・リズムの理解・高低の弁別・音色・和音・鑑賞能力の 6 項目に関する計 35 の質問と、回答者の音楽的家庭環境に関する質問紙を組み合わせた調査を行い、その結果から、有意な差は見いだせなかったという。しかし、Persellin（2006）、水崎（2008）、小椋（2018）はそれぞれ、子どもの歌を録音したデータと保護者に対する家庭での音楽環境に関する質問紙調査との関連を調べた。その結果、家庭での音楽環境が良いと、子どもが正確な音程で歌う傾向があることを明らかにしている。ただし、その研究は、分析対象数が少ないため、一般化するのには慎重にするべきという議論がある。

家庭生活での子どもの音楽体験に関する質問紙調査では、年長児は童謡やテレビの歌を好むのと同時に、歌謡曲やカラオケに魅かれる傾向がある（渡辺, 2001）ことが示されている。

第 5 節. 保育における歌唱指導の現状と課題

戦後 1956 年に、健康、社会、自然、言語、音楽リズム、絵画制作の 6 領域に編成した幼稚園教育要領が施行された。音楽リズムの内容構成は、1.歌を歌う、2.歌曲を聞く、3.楽器を弾く、4.動きであり、これは、大人の理想型を幼児に教え込む実践の傾向が否めないものであった。1989 年に幼稚園教育要領が改訂され、6 領域から健康、人間関係、環境、言葉、表現の 5 領域に代わり、この改訂では、音楽作品の指導に主眼を置く音楽教育から、音楽づくりの過程に視点を移行させている。

保育中の子どもが歌う活動の観察調査から、クラスの皆と一緒に歌うことは、集団生活における社会性の発達に寄与する側面がある（伊藤・小林・木村, 2002）と述べられている。歌唱行為と社会性を研究する Welch（2001）や、子どもの園生活を長期にわたり観察した 湊田（2016）による調査の結果からも、仲間と一緒に歌を歌う行為は、一様に快い気持ちになったり、絆が強化されたり、社会性を発達させるものであり、子どもに社会的感覚を高めることができると述べている。くわえて、湊田（2016）は、歌唱技術の観点から、一人で歌う時と集団で歌う時には違いが生じていることを明らかにしている。その背景には、保育者や友達と一緒に歌う時には、自分の呼吸や息継ぎ、肺活量とは関係なく歌が進行していくが、

一人で歌う時には、自分の呼吸や息継ぎのペースにあわせながら歌うことがある。そのため、保育者や友達と一緒に歌う行為は、音楽にとって必要なテンポやリズム感を保持して歌う経験ができるのである。このことから、幼児が一人で歌う「歌」と集団での「歌」は教育目的の方向性が異なり、援助指導のあり方も異なってくると思われる。

歌唱行為と社会性を研究する Welch (2001) は、子どもの「調子外れ」な歌唱は不適切な音楽を子どもに歌わせることの産物であり、子どもに歌わせる歌の選曲においては、子どもの声域の発達を考慮することが重要であると述べている。保育活動中の選曲については、保育者への質問紙調査からは、「行事（ひなまつり、たなばたなど）に関連している」こと、「季節感がある」ことを重視して歌を取り入れている (Mizuno, 2017) ことや、保育現場への質問紙調査からは、長く愛されてきた音楽に加え、多様かつ新しい音楽が取り入れられている (立本, 2008) こと、楽曲構造が小さく歌いやすい「チューリップ」のような優しい歌は年齢が高くなるにつれて選択される頻度が下がるが、高度な歌詞内容や構造をもつ曲が選曲として上位に登場している (秋山, 2012) ことが明らかになっている。

指導方法に関しては、保育者への質問紙調査から、保育者は歌を通して「季節、行事」「楽しむ」ことをねらいにしている (加藤・古川・角藤, 2015)、子どもに歌唱指導を行い、子どもに歌わせたい曲なら歌詞をしっかりと覚えさせる (伊藤・小林・木村, 2002) ことを確認している。滝口・迫田 (2012) による保育現場での歌唱指導の観察調査では、新たな曲を開始した初日、2日目においては、保育者からの働きかけを契機とする子どものやり取りが多く認められ、歌に対する興味関心を喚起し、歌唱することの必然性を認識させるような働きかけがなされるが、3日目以後は減少に転じ、歌唱後のやりとりでは、3日目以後から、評価や発声、歌詞に注意を向けさせる保育者の発言が起こっていることが示唆されている。

保育者への質問紙調査やヒアリング調査から、保育者は人的環境として、話し方や声の大きさ、言葉かけや歌いかけのテンポ、楽しそうに歌ったり演奏をしたりする姿を子どもたちに見せる配慮をしている (岡林・丹羽・村田, 2010) こと、子どもは保育者の歌い方を真似て歌うため、保育者の存在や雰囲気づくりが大切である (多保田, 2005) ことと、子どもたちの歌唱調査を通して、保育の場での CD といった機器機材の使用は、子どもの音程の正確さを促進する (Persellin, 2006) ことが、示されている。そのほかに、一方的な保育者からの指導や無理な教え込みは、子どもが、ふざける、騒ぐ、歩き回る、あるいは無表情になる、

歌っているふりだけの表現をする場面が表れてくる（荒木, 1991）ことが示されている。

第6節. 保育者養成校における歌唱指導の現状と課題

久保田（2017）は、保育者に対するヒアリング調査から、保育者が子どもへの歌唱指導時に「幼児の感性を養う」ことに対して意識が向かない原因は、保育者養成校（以下、養成校）での学修において、学生が子どもの感性を養うための方法論などを十分に身につけていないことからだと述べている。

養成校に在籍する学生への歌唱指導に関する質問紙調査から、学生は子どもたちに対して無理な声の出し方をまねきやすい言葉かけはしないよう注意することや、発声に関するアドバイスもできなければならないこと、表情豊かな歌唱を引き出すことが大切（三小田, 2014）ということ、歌う際には、歌詞が大切であり、保育者ははっきりした発音で歌唱すべきであるなどの理解がある（藤田, 2013）ことが明らかになっている。

原・西出（2019）は、学生への質問紙調査から、子どもが歌唱教材を表現豊かに歌うための手段としてピアノ伴奏の指導が行われているが、ピアノに苦手意識をもっている学生が多いことを指摘している。さらに、養成校の授業において、子どもが歌を歌う時の導入として、歌を紹介し、曲のイメージを引き出す、視覚的な教材や身体活動を行う必要があることも指摘している。それと同時に、「音楽（ピアノ）」と「音楽表現」を連動して授業を進めることが重要であることを論じている。

ピアノ伴奏について、歌唱の意義を日本の音楽教育の側面から論じた高橋（1987）が、園生活で使用する曲が西洋音楽がモデルになっている場合は、伴奏としてピアノを必要とすると述べている。学生への質問紙調査を通して、保育現場では、平易な楽曲をたくさんマスターし、場に応じて臨機応変に演奏できることが重要（中野・河野, 2012）であることも示されている。

養成校での授業の現状は、学生への質問紙調査から、子どもがピアノ教室で数年がかりで学ぶことをわずか1～2年間に詰め込まれて（中野・河野, 2012）いること、1名の教員が6名から9名の学生を週に一度、90分で指導をする養成校が多いこと、過去5年間の調査では、大学入学後からピアノ学習を開始した学生が40%、ピアノ学習歴5年未満の学生が40%であること、初心者の学生の多くはピアノを所有していない（白川・白川, 2017）ことが明

らかになっている。

上記の調査から、初心者の学生に1～2年間でピアノ技術を指導するカリキュラムにより、多くの学生がピアノに苦手意識をもつことが推察された。また、養成校においての未就学児の音楽に関する研究は、ピアノと歌唱技術指導に関するものが多く、子どもの歌唱を含む音楽的発達や音楽活動全般の取り扱いについての指導に関する研究が確認できなかった。

第7節. 本論文の目的と論文の構成

(1) . 本研究の目的

子どもが歌を歌う要因について、家庭生活や養育者の音楽活動がどのように子どもが歌を歌う行為に関連するのかが具体的かつ総合的に明らかにされていない。さらに、保育の場での音楽環境についての研究では、保育者からの調査は存在しているが、子どもが実際にどのような様子で歌っているのかが実証されていない。

これまでに家庭環境の影響、保育現場での環境などについてそれぞれの研究が行われていても、子どもたち一人ひとりについて、どのような特性が歌唱活動の要因になっているのかといった、家庭と保育現場の双方を総合的に検討した研究もなされていない。

子どもが安心して歌唱活動を体験できるようになるためには、保護者や保育者が子どもたちの歌唱活動の背景に存在する要因を知見したうえで歌唱活動指導をすることが重要である。

そこで、本博士論文は、保育現場での子どもの歌唱活動に関する調査を行うと共に、保護者と保育者への質問紙調査を行い、保育活動の中での子どもの歌唱活動にそれぞれがどのように影響を与えているのかについて明らかにすることを目的とする。

(2) . 本論文の構成

第1章 問題の所在と目的

第2章 子どもの歌い方に関する要因分析研究

2-1. 家庭での子どもの歌唱に関わる環境調査

2-2. 保育の場での子どもの歌唱に関わる環境調査

2-3. 子どもに表れる歌い方調査（音高と歌詞の正当数調査）

2-4. 子どもの特性調査

2-5. 子どもの歌い方に関する要因分析

第3章 総合考察

第2章 子どもの歌い方に関する要因分析研究

第1節 家庭での子どもの歌唱に関わる環境

(1) . 目的

音楽に関する子どもの家庭環境について、質問紙による調査には、曾我部（1985;1987）、羽根田（2003）、水崎（2008）、小椋（2018）などがある。それらの質問項目は、音楽を介した家族と子どもとの関わり、音楽に関する子どもの習い事、子どもの好きな遊び、子どもの音楽嗜好、保護者の音楽嗜好、子どものテレビ視聴時間、子どもの食生活などである。しかし、音楽に関わる家庭環境を網羅的に調べた調査はない。そのうえ、質問紙の質問項目数が7項目から17項目と少ない。

子どもたちがどのような音楽環境のもとで生活しているのかを把握することは、子どもの音楽能力や歌唱能力を育てるためには重要な課題であると思われる。

そこで、本調査では、音楽に関する子どもの家庭環境についての質問項目を作成し、それらを明らかにすることにした。

(2) . 方法

①. 調査対象者

東京都（1園）、京都府（1園）、兵庫県（3園）の5つの幼稚園に子どもを通わせている保護者474人を対象とし、268名（57%）から回答を得た。回答者の属性をTable2-1-1.に示した。

②. 調査時期

2018年6月～10月に実施した。

③. 調査内容

調査は、自記式による質問紙を実施した。質問紙の内容は、黒瀬（1993）、水崎（2008）、Valerio et al.（2011）の文献を参考に、①回答者の属性、②家庭での子どもの音楽行為、③

家庭で子どもが音楽を視聴する機会、④家庭での音楽に関する物的環境、⑤家庭での音楽に関する人的環境の計5分野、42項目で構成した。

④. 調査手続き

質問紙は、調査対象者の子どもが通う幼稚園あるいは認定こども園の担任から、連絡帳を用いて、回答者に一斉配布をした。回答は留置法によって回収した。

⑤. 倫理的配慮

調査に際しては、実施する園に調査内容を説明し、園長より実施の承諾を得た。

回答者には、質問紙と一緒に「調査へのご協力とお願い」を配布し、実施方法や倫理的配慮について説明を行った。説明の内容は、①本調査は、家庭で子どもがどのように音楽に親しんでいるのかを尋ねる内容であること、②回答に正誤はないこと、③思った通りに回答すること、④調査への協力は自由意志であり、協力しないことによる不利益は一切ないこと、⑤調査開始後でも、回答したくない項目に対する回答拒否や調査協力の中断は可能であることを記載した。

なお、調査は、筑波大学医学医療系医の倫理委員会の承認を得て行った(承認番号 1245)。

(3) . 分析方法

子どもを取り巻く家庭の音楽環境状況を明らかにするため、各項目の割合を算出した。

(4) . 結果

①. 回答者の属性

回答者の続柄は、母親 95% (255 名)、父親 5% (13 名)、年代は、20 代 3% (7 名)、30 代 69% (185 名)、40 代 28% (76 名)、回答した子どもの性別と所属クラスは、年中男児 21% (57 名)、年中女児 20% (54 名)、年長男児 28% (76 名)、年長女児 30% (81 名)、回答者の子どもにきょうだいがいるのは 87% (233 名) であった。

Table2-1-1. 回答者の属性 (N=268)

子どもから見た属性		
母親	95%	(255名)
父親	5%	(13名)
年代		
20代	3%	(7名)
30代	69%	(185名)
40代	28%	(76名)
子どもの性別と所属クラス		
年中男児	21%	(57名)
年中女児	20%	(54名)
年長男児	28%	(76名)
年長女児	30%	(81名)
回答者の子どもにきょうだい		
いる	87%	(233名)

②. 家庭での子どもの音楽行為

子どもが音楽関連の習い事に通ったことがあるかどうかを尋ねた結果 (Table2-1-2) は、「通ったことがない」65% (173名)、「現在、通っている」30% (81名)、「以前、通っていた」3% (8名) で、音楽関連の習い事に通ったことがない子どもが半数以上であることが示された。

Table2-1-2. 音楽関連の習い事 (N=268)

通ったことがない	65% (173名)
現在、通っている	30% (81名)
以前、通っていた	3% (8名)
その他	2% (6名)

家庭で過ごす中で、子どもが音楽に対してどのような行為をしているかを「よくする」から「まったくやらない」までの4件法で尋ねた結果を Figure2-1-1 に示した。

「よくする」および「時々する」と回答した人を合わせると、「歌や音楽が聞こえてくると、歌や音楽に合わせて歌う」96% (257名)、「歌や音楽が流れていなくても自分から歌を歌う」93% (250名)、「指や手を動かす手遊びのある歌や音楽が流れると、音楽に合わせて、指や手を動かす」86% (229名)、「振り付けのある歌や音楽が流れると、身体を動かしたり踊ったりする」80% (215名)「聞こえてきた音や音楽を声でまねる」79% (211名)、「振り付けのない歌や音楽が流れた時、音楽にあわせて身体を動かしたり踊ったりする」が70%弱、「即興で歌をつかって歌を歌う」、「替え歌を歌う」、がそれぞれ60%程度であった。

つまり、家庭では、歌や音楽が聞こえても、聞こえなくても歌を歌う子どもが9割、手遊びや振り付けのある歌が流れれば指や手を動かしたり身体を動かしたり踊ったりするが8割以上、聞こえてきた音や音楽を声でまねる子どもが8割以上であった。くわえて、即興で歌をつくったり替え歌をつくったりする子どもは6割程度いることが示された。

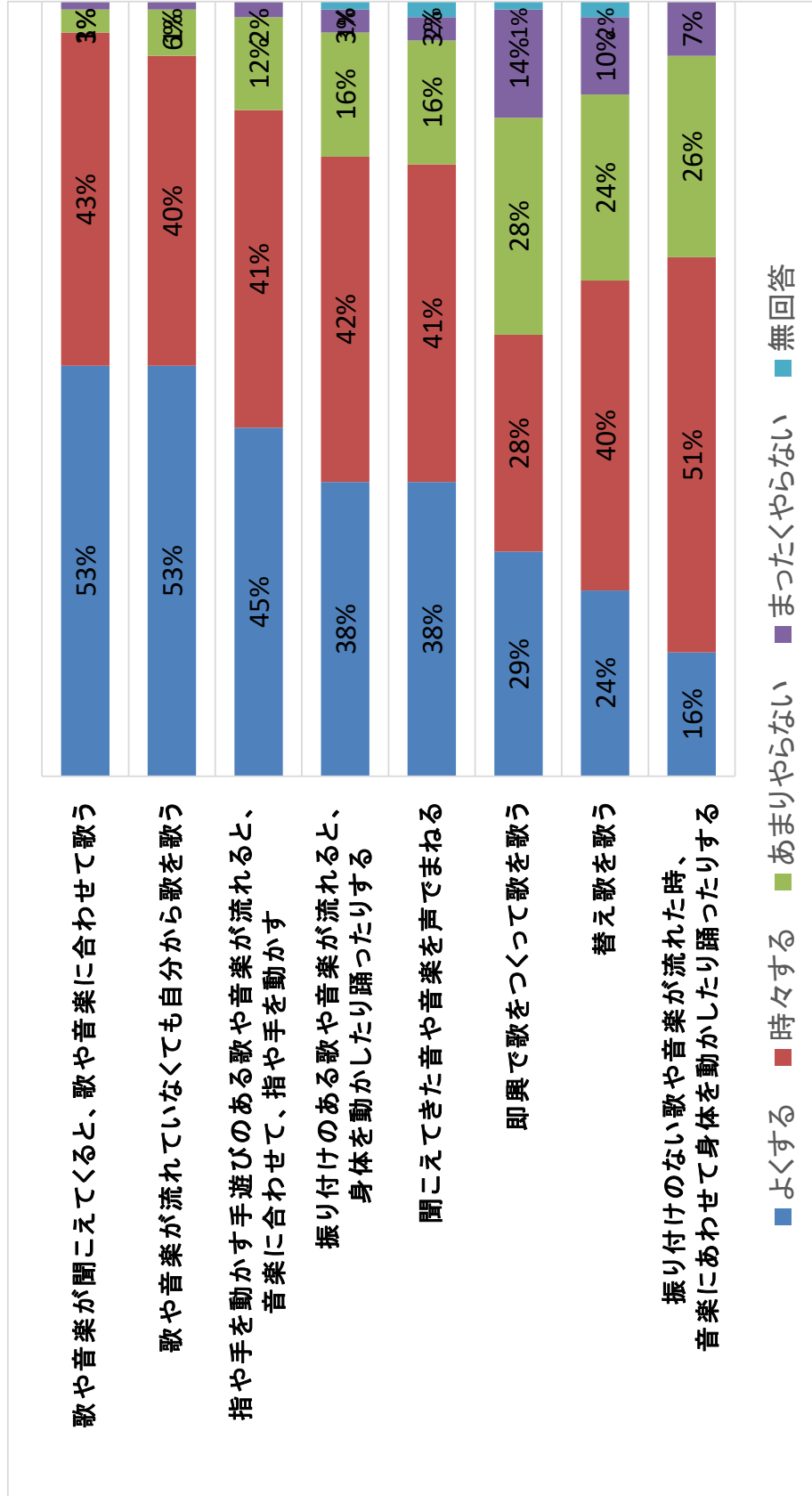


Figure 2-1-1. 家庭生活での音楽に関連する子どもの行動 (N=268)

Figure2-1-1 に示した「替え歌を歌う」について、歌詞の内容を尋ねた結果を Table2-1-3 に示した。「子どもが考えたり、発想したりしてできた替え歌」や「実際の歌詞がわからずに、おもいつきで歌っている替え歌」を歌う子どもが約 5 割程度であるのに対し、「幼稚園や保育所などではやっている替え歌」を歌う子どもが 3 割程度であった。

これらのことから、子どもが替え歌を歌う際、独自の歌詞をつけて歌っている子どもが半数程度いることを確認した。

Table2-1-3. 歌っている替え歌の歌詞 (N=268)

子どもが考えたり、発想したりしてできた替え歌	50%(135名)
実際の歌詞がわからずに、おもいつきで歌っている替え歌	46%(122名)
幼稚園や保育所などではやっている替え歌	27% (73名)

(複数回答)

③. 家庭で子どもが音楽を視聴する機会

家庭生活において、子どもがテレビや DVD で音楽を視聴する機会があるかどうかを尋ねたところ、「ある」と答えた人は 97% (260 名) であった。視聴する頻度を尋ねた結果を Table2-1-4 に示した。その結果から、「毎日」と「週に 4~5 回」を合わせると 7 割であること示された。

家庭生活において、子どもがテレビや DVD で音楽を視聴する番組について尋ねた結果を Table2-1-5 に示した。「一般アニメ (ドラえもんやアンパンマンなど) の挿入曲」、「一般アニメのオープニング曲」、「一般アニメのエンディング曲」の音楽を視聴する子どもが 7 割以上、「E テレアニメのオープニング曲」、「E テレアニメのエンディング曲」、「E テレアニメの挿入曲」と「NHK おかあさんと一緒」が 6 割台、「ディズニーアニメのオープニング曲」、「ディズニーアニメの挿入曲」、「ディズニーアニメのエンディング曲」と「みんなの歌」が 4 割台、「一般歌番組」は約 1 割で、「一般アニメのオープニング曲、挿入曲、エンディング曲」を視聴する機会が多い結果となった

つまり、子どもの 9 割以上はテレビや DVD で音楽を視聴し、7 割の子どもはテレビや

DVD で週に 4～5 回以上、音楽を視聴していた。くわえて、7 割の子どもが一般アニメから流れる音楽を視聴していることを確認した。

Table2-1-4. テレビや DVD で音楽を視聴する頻度 (N=268)

毎日	45% (120名)
週に4～5回	25% (68名)
週に2～3回	18% (47名)
週に1回	3% (7名)
月に2～3回	2% (6名)
月に1回	1% (1名)
無回答	4% (11名)

Table2-1-5. テレビやDVDで視聴する番組内の音楽 (N=268)

一般アニメ (ドラえもんやアンパンマンなど)の挿入曲	80% (213名)
一般アニメのオープニング曲	75% (201名)
一般アニメのエンディング曲	73% (195名)
Eテレ アニメのオープニング曲	69% (185名)
Eテレ アニメのエンディング曲	67% (180名)
Eテレ アニメの挿入曲	61% (164名)
NHK おかあさんと一緒	60% (160名)
ディズニーアニメのオープニング曲	48% (128名)
ディズニーアニメの挿入曲	47% (126名)
ディズニーアニメのエンディング曲	46% (123名)
みんなの歌	41% (109名)
一般歌番組	13% (35名)

(複数回答)

テレビやDVDを除いた聴覚機材などを使って音楽を聴く活動や、音楽に関する活動の機会について尋ねた結果を Table2-1-6 に示した。「CD、ラジオなどを聴く」が8割弱、「カラオケに行く」、「幼児向けコンサートに行く」が5割弱、「家の中で、きょうだいの楽器演奏をみる」、「家の中で、大人(父親、母親、祖父母など)の楽器演奏をみる」、「きょうだいが通っている学校の行事でみる」が3割程度、「ストリートライブで、楽器演奏をみる」、「幼児向けのミュージカルに行く」が2割程度、「きょうだいが通っている音楽教室でみる」、「訪問した家で、楽器演奏をみる」が1割程度であった。

CD、ラジオなどで音楽を聴く頻度を Table2-1-7 に示した。「ほぼ毎日」が3割弱、「週2~3回」、「週1回位」、がそれぞれ、2割程度であった。

Table2-1-6. 音楽視聴する機会 (N=268)

CD、ラジオなどを聴く	76% (204名)
カラオケに行く	46% (124名)
幼児向けのコンサートに行く	46% (123名)
家の中で、きょうだいの楽器演奏をみる	35% (93名)
家の中で、大人(父親、母親、祖父母など)の楽器演奏をみる	34% (92名)
きょうだいが通っている学校の行事でみる	28% (74名)
ストリートライブで、楽器演奏をみる	19% (52名)
幼児向けのミュージカルに行く	19% (51名)
きょうだいが通っている音楽教室でみる	12% (33名)
訪問した家で、楽器演奏をみる	11% (29名)
その他	9% (25名)

Table2-1-7. CD・ラジオなどで音楽を聴く頻度 (N=268)

ほぼ毎日	26% (70名)
週に2~3回	23% (61名)
週に1回位	17% (45名)
月に3回位	3% (9名)
月に2回位	3% (9名)
月に1回位	2% (5名)
0	21% (57名)
その他	1% (3名)
無回答	3% (9名)

子どもが、音楽を BGM として流しながら活動することがあるかを、「よくする」から「まったくやらない」までの 4 件法で尋ねた結果を Table2-1-8 に示した。BGM を流しながら活動を「よくする」、「時々する」のは合わせて 38%であった。

Table2-1-9 に、BGM を流しながらいつ活動するのかを尋ねた結果を示した。「遊び中」35%、「食事中」19%、「起きた時」や「入浴中」が 1 割近くであった。

Table2-1-8. BGM を流しながらの活動 (N=268)

	よくする	時々する	ほとんどやらない	まったくやらない	無回答
BGMを流しながら活動する	15%(39名)	23%(62名)	24%(63名)	37%(99名)	2%(5名)

Table2-1-9. BGM を流しながら活動する時 (N=268)

遊び中	35% (95名)
食事中	19% (52名)
起きた時	6% (17名)
入浴中	4% (11名)
その他	15% (39名)
無回答	1% (3名)
まったくなし	39% (104名)

(複数回答)

④. 家庭での音楽に関する物的環境

歌が掲載された子ども向けの本の有無

歌が掲載された本の有無を尋ねた結果を Table2-1-10 に示した。「自宅に、歌が載っている子ども向けの本がある」は 73% (196 名) であった。歌が掲載された本の数を探った結果を Table2-1-11 に示した。「1~5 冊位」57% (154 名)、「6 冊~10 冊位」8% (21 名)、「10 冊~30 冊位」7% (19 名)、「0 冊」が 26% (69 名) であった。

図書館での貸与経験を尋ねた結果を Table2-1-12 に示した。「歌が載っている本を借りることがない」83% (223 名)、「自宅に歌が載っている蔵書があるが、歌が載っている子

ども向けの本や紙芝居を借りることがある」と「自宅に歌が載っている蔵書はないが、歌が載っている子ども向けの本や紙芝居を借りることがある」を合わせると 17% (45 名) であった。

これらの結果から、歌を掲載している子ども向けの本がある家庭が約 7 割、家庭に歌を掲載している子ども向けの本はないが図書館での貸与経験のある者がわずかではあるが存在した。一方で、歌を掲載している子ども向けの絵本を家庭に所有せず図書館での貸与の経験もない回答者が約 3 割いることを確認した。

Table2-1-10. 歌を掲載した本の有無 (N=268)

自宅に、歌が載っている子ども向けの本がある	73%	(196名)
自宅に、歌が載っている子ども向けの本がない	26%	(69名)
無回答	1%	(3名)

Table2-1-11. 自宅に歌を掲載した子ども向けむけ本の数 (N=268)

1冊～5冊位	57%	(154名)
6冊～10冊位	8%	(21名)
10冊～30冊位	7%	(19名)
0冊	26%	(69名)
無回答	2%	(5名)

Table2-1-12. 歌を掲載した子ども向け本の貸与経験 (N=268)

歌が載っている本を借りることがない	83%	(223名)
自宅に歌が載っている蔵書があるが、歌が載っている子ども向けの本や紙芝居を借りることがある	15%	(40名)
自宅に歌が載っている蔵書はないが、歌が載っている子ども向けの本や紙芝居を借りることがある	2%	(5名)

楽器

自宅で所有している楽器について尋ねた結果を Table2-1-13 に示した。ピアノが 64% (172 名)、鍵盤ハーモニカが 55% (148 名)、笛が約 30%、太鼓、鈴が約 20%、木琴、鉄琴、電子オルガン、オルガン、ハンドベルは 10%以下であった。

Table2-1-13.自宅で所有している楽器 (N=268)

楽器名	割合(人数)
ピアノ	64% (172名)
鍵盤ハーモニカ	55% (148名)
笛	29% (78名)
太鼓	24% (63名)
鈴	19% (50名)
木琴	9% (24名)
鉄琴	6% (15名)
電子オルガン	4% (14名)
オルガン	5% (12名)
ハンドベル	1% (4名)
その他	24% (64名)

(複数回答)

住居の音漏れ対策

隣人や近所への音漏れが気になるかどうかを「とても気になる」から「全く気にならない」の 5 件法にて回答を求めた結果を Table2-1-14 に示した。「とても気になる」および「やや気になる」と回答した者を合わせると「子どもが、楽器にふれる時」57% (152 名)、「子どもが、音楽にあわせて身体を動かす時」21% (57 名)、「子どもが、歌を歌う時」28% (74 名) であった。

どのような時に音漏れ対策をしているのかについて回答を求めた結果を Table2-1-15 に示した。「子どもが、楽器にふれる時」と答えた人が 78% (210 名)、「子どもが、歌を歌う時」や「子どもが、音楽にあわせて身体を動かす時」が 35% (95 名) であった。

音漏れ対策をどのようにしているのかについての回答を求めた結果を、楽器について Table2-1-16、身体を動かすに際について Table2-1-17、歌について Table2-1-18 に、それぞれに示した。

楽器については、「夜遅くに楽器音を出さない」69% (185 名)、「朝早くに楽器音を出さない」49% (131 名)、「窓を閉めている」37% (100 名)、「大きな楽器音を出さないように子どもに声をかける」29% (78 名)、「室内で楽器音を出すことを禁止している」1% (2 名)、「防音部屋を設置している」1% (1 名) であった。

身体を動かす際については、「夜遅くに音楽をかけない」15% (40 名)、「音楽をかける時には窓を閉める」11% (30 名)、「とびはねたりしても響かないように、マットを敷く」11% (30 名)、「早朝には音楽をかけない」8% (21 名)、「早朝には音量を下げている」8% (20 名)、「家の中では静かに歩くようにしている」8% (20 名)、「踊ったりジャンプしたりすることを禁止している」4% (10 名) であった。

歌については、「大きな声で歌わないように子どもに声をかける」19% (52 名)、「夜遅くに歌を歌わないようにしている」16% (42 名)、「窓を閉めている」13% (36 名)、「朝早くに歌を歌わないようにしている」10% (26 名) であった。

Table2-1-14. 隣人、近所への音漏れを気にする (N=268)

	とても 気になる	やや気になる	どちらとも いえない	あまり 気にならない	全く 気にならない	無回答
子どもが、楽器に ふれる時	13% (34名)	44% (118名)	6% (16名)	28% (74名)	7% (18名)	3% (8名)
子どもが、音楽に あわせて身体を 動かす時	5% (13名)	16% (44名)	4% (11名)	46% (122名)	27% (73名)	2% (5名)
子どもが、歌を歌う時	3% (7名)	25% (67名)	7% (18名)	47% (125名)	19% (50名)	1% (1名)

Table2-1-15. 音漏れ対策をする時 (N=268)

子どもが、楽器にふれる時	78% (210名)
子どもが、歌を歌う時	35% (95名)
子どもが、音楽にあわせて身体を動かす時	35% (93名)

Table2-1-16. 楽器に関する音漏れ対策 (N=268)

夜遅くに楽器音を出さない	69% (185名)
朝早くに楽器音を出さない	49% (131名)
窓を閉めている	37% (100名)
大きな楽器音を出さないように子どもに声をかける	29% (78名)
室内で楽器音を出すことを禁止している	1% (2名)
防音部屋を設置している	1% (1名)

(複数回答)

Table2-1-17. 身体を動かす際の音漏れ対策 (N=268)

夜遅くに音楽をかけない	15% (40名)
音楽をかける時には窓を閉める	11% (30名)
とびはねたりしても響かないように、マットを敷く	11% (30名)
早朝には音楽をかけない	8% (21名)
早朝には音量を下げています	8% (20名)
家の中では静かに歩くようにしている	8% (20名)
踊ったりジャンプしたりすることを禁止している	4% (10名)

(複数回答)

Table2-1-18. 歌に関する音漏れ対策 (N=268)

大きな声で歌わないように子どもに声をかける	19% (52名)
夜遅くに歌を歌わないようにしている	16% (42名)
窓を閉めている	13% (36名)
朝早くに歌を歌わないようにしている	10% (26名)

(複数回答)

⑤. 家庭での音楽に関する人的環境

家庭生活の中で音楽活動を子どもと一緒にする家族の有無を尋ねた結果を Table2-1-19 に、音楽関連で子どもと関わる続柄について尋ねた結果を Table2-1-20 に示した。

「子どもと一緒に歌う、あるいは、子どもに歌いかける人がいる」と答えた割合が 93% (250 名)、「音楽が流れていると、子どもと一緒に踊ったり、身体を動かしたりする人がいる」と答えた割合が 87% (234 名)、「子どもが寝るとき (昼寝を含む)、子守歌を歌う人がいる」と答えた割合は 15% (39 名) だった。それぞれの活動について、子どもは誰と一緒にするかを尋ねたところ、一緒にする人は、3 項目全てにおいて母親が多かった。ついで、子守歌をのぞく項目では、きょうだいが続いた。

すなわち、子どもの家庭生活の中では、9 割前後の家庭には子どもと一緒に歌ったり、踊ったりする人が存在し、その順位は母親に次いで、きょうだい、父親であることが示された。

Table2-1-19.音楽活動を子どもと一緒にする家族の有無 (N=268)

子どもと歌を一緒に歌う、あるいは、子どもに歌いかける人がいる	93% (250名)
音楽が流れていると、子どもと一緒に踊ったり、 身体を動かしたりする人がいる	87% (234名)
子どもが寝るとき (昼寝を含む)、子守歌を歌う人がいる	15% (39名)

Table2-1-20. 音楽関連で子どもと関わる家族 (N=268)

	歌いかける	身体を動かす	子守歌
母	85% (228名)	64% (171名)	12% (33名)
きょうだい	51% (135名)	53% (140名)	1% (1名)
父	44% (118名)	27% (72名)	3% (8名)
祖母	34% (91名)	13% (34名)	3% (9名)
いとこ	10% (27名)	8% (22名)	0
祖父	7% (18名)	3% (9名)	1% (1名)
その他	10% (26名)	8% (20名)	1% (1名)

(複数回答)

回答者自身の音楽に関する関心および音楽技術に関して尋ねた結果を Table2-1-21 に示した。「音楽を聴くことが好き」86% (230名)、「歌を歌うことが好き」66% (178名)、「子どもが歌を歌っているときに「その歌を教えて」と頼むことがある」46% (124名)、「歌の楽譜を見れば、初めて見る歌でもある程度、歌える」が、21% (56名)、「コンテストやのどじまんなど歌に関係あるショーやコンクールに出演したことがある」3% (8名)であった。

Table2-1-21.回答者自身の音楽および歌唱に関わる嗜好と技術 (N=268)

音楽を聴くことが好き	86% (230名)
歌を歌うことが好き	66% (178名)
子どもが歌を歌っているときに「その歌を教えて」と頼むことがある	46% (124名)
歌の楽譜を見れば、初めて見る歌でもある程度、歌える	21% (56名)
コンテストやのどじまんなど歌に関係あるショーやコンクールに出演したことがある	3% (8名)

(複数回答)

回答者が子どもと歌を歌う活動の有無を Table2-1-22 に示した。「回答者が子どもと歌を歌う」が93% (243名) であった。

子どもと一緒に歌を歌う頻度について尋ねた結果を Table2-1-23 に記した。歌を歌う頻度が、「ほぼ毎日」30% (80名)、「週に2~3回位」が33% (89名)、「週に1度位」が16% (43名)、「月に2~3回位」が9% (25名)、「月に1回位」が2% (6名)、「歌わない」が7% (18名) であった。

結果として、子どもと一緒に歌を歌う回答者が9割を超えていても、一緒に歌う頻度にはばらつきがあることが示された。

Table2-1-22. 回答者が子どもと歌を歌う活動の有無 (N=261)

回答者が子どもと歌を歌う	93% (243名)
回答者が子どもと歌を歌わない	7% (18名)

Table2-1-23. 回答者が子どもと歌を歌う頻度 (N=268)

ほぼ毎日	30% (80名)
週に2~3回位	33% (89名)
週に1度位	16% (43名)
月に2~3回位	9% (25名)
月に1回位	2% (6名)
歌わない	7% (18名)
その他	1% (2名)
無回答	2% (5名)

回答者が子どもに対して、「その場に合わせた既成の歌を、子どもに歌うことがある」、「歌いながら子どもと一緒に踊ったり、身体を動かしたりすることがある」、「子どもから、

「歌を歌って」と求められることがある」、「その場に合わせた即興歌をつくって、子どもに歌うことがある」、「歌が載っていない本の文章に、旋律（メロディ）をつけて子どもに歌うことがある」、「歌が載っている本をみながら子どもと一緒に歌う、あるいは、子どもにみせながら歌うことがある」について、「よくある」から「まったくない」までの4件法で尋ねた結果を Figure2-1-2 に示した。

「よくある」、「時々ある」を合わせると、「その場に合わせた既成の歌を、子どもに歌うことがある」が約7割、「その場にあわせた即興歌をつくって、子どもに歌うことがある」、「歌が載っていない本の文章に、旋律（メロディ）をつけて子どもに歌うことがある」が約3割、「歌が載っている本をみながら子どもと一緒に歌う、あるいは、子どもにみせながら歌うことがある」が約1割であった。

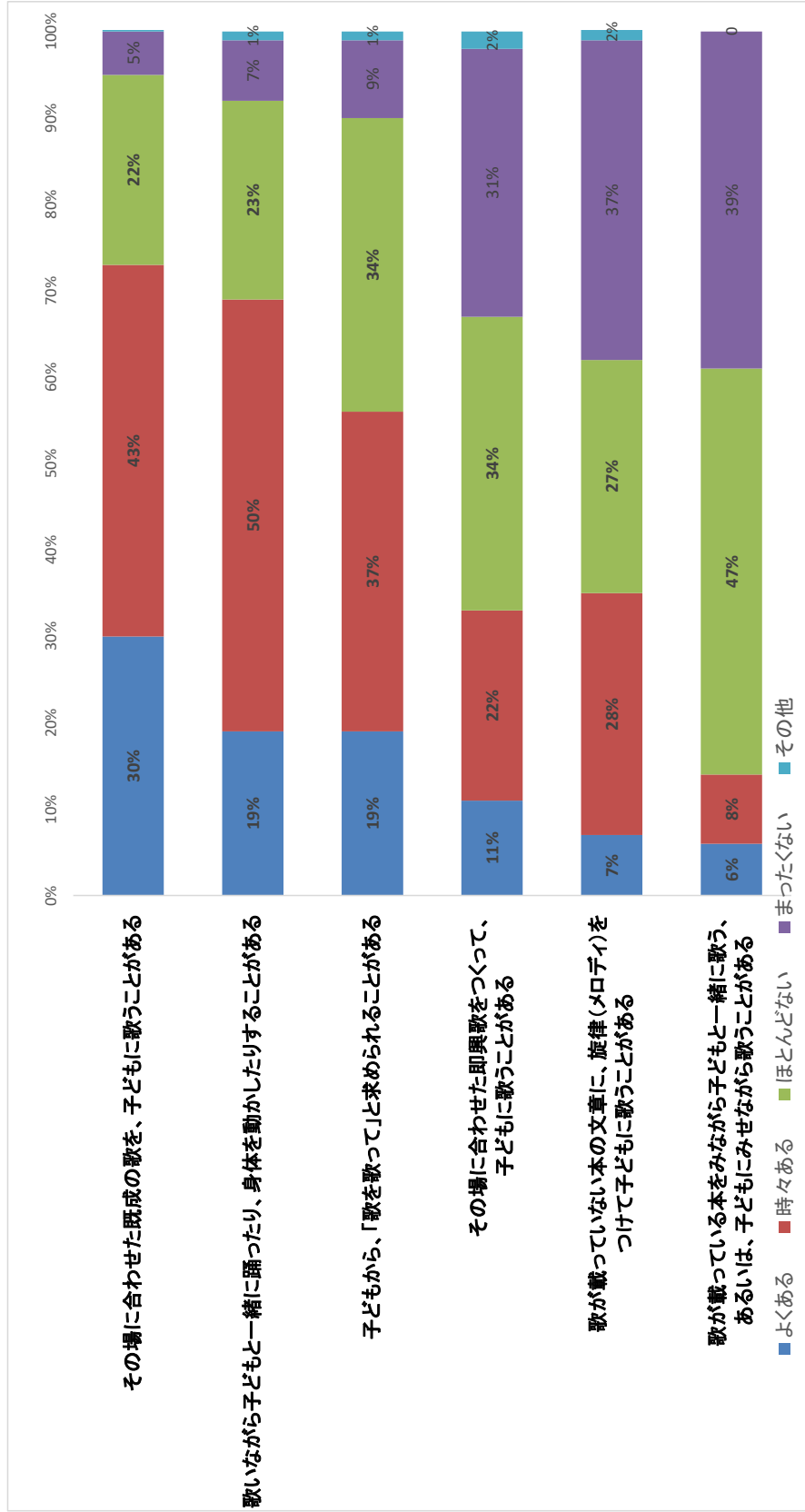


Figure2-1-2. 回答者が、子どもに歌を歌う内容 (N=268)

回答者が、子どもに「運動」、「音楽」、「読書」、「語学」、「美術」、「科学」を好きになってほしいと望むかどうかについて尋ねた結果を Table2-24 に示した。「運動を好きになってほしい」は 86% (230 名)、「音楽を好きになってほしい」は 79% (211 名)、「読書を好きになってほしい」は 75% (200 名) であり、「語学を好きになってほしい」、「美術を好きになってほしい」、「科学を好きになってほしい」は 50%以下の結果であった。

したがって、運動、音楽、読書を好きになることを望む回答者が 7 割以上であったことを確認した。

Table2- 1-24. 回答者が子どもに好きになってほしいと望むこと (N=268)

運動を好きになってほしい	86% (230名)
音楽を好きになってほしい	79% (211名)
読書を好きになってほしい	75% (200名)
語学を好きになってほしい	44% (118名)
美術を好きになってほしい	41% (111名)
科学を好きになってほしい	35% (93名)

(複数回答)

(5) . 考察

家庭生活において、9 割以上の子どもが音楽が流れていても流れていなくても歌を歌うこと、8 割以上の子どもが手遊びや振り付けのある歌が流れれば指や手を動かしたり身体を動かしたり踊ったりすること、聴こえてきた音や音楽を声で真似ていることが示された。これらの結果は、家庭で、子どもたちが歌を歌うという音楽的活動を活発に行っているという先行研究 (羽田, 2003) の結果と類似していた。

子どもの 9 割以上が、テレビや DVD で番組のオープニング曲、挿入曲、エンディング曲を視聴しており、BGM を聴きながら活動する子どもも 4 割弱よりも高い割合であった。前述したように、8 割以上の子どもが手遊びや振り付けのある歌が流れれば指や手を動かした

り身体を動かしたり踊ったりすることを含めて鑑みると、多くの子どもはテレビやDVDを視聴したりBGMを聴きながら、身体を動かしたり踊ったりしていると思われる。

子どもと一緒に歌を歌ったり、音楽に合わせて身体を動かしたりする行為をする家族が9割以上、音楽を好きになってほしいと願う回答者が8割近く存在し、子どもが音楽を好きになるように、回答者自身が子どもと一緒に歌を歌ったり、踊ったりしていると思われる。

既成の歌を子どもに歌う回答者が7割近く存在し、即興歌をつくって歌う回答者が3割程度であった。一方、「子どもが考えたり発想したりしてできた替え歌」や「実際の歌詞がわからずに、おもいつきで歌っている替え歌」を歌う子どもが約6割程度で、回答者より子どものほうが即興歌を歌っていることが示された。

住居の音漏れ対策については、子どもが楽器にふれる時に隣人や近所への音漏れを気にする回答者が6割近くあり、さらに、音漏れ対策を行っている回答者が8割であった。また、子どもが音楽に合わせて身体を動かす時や歌を歌う時に音漏れを気にする回答者と、音漏れ対策を行っている回答者が3割程度であり、楽器ほどの割合ではないものの、1割が歌を歌う時や音楽に合わせて身体を動かす時に、夜遅くに音楽をかけない、歌を歌わない、窓を閉める、マットを敷く、朝早く歌を歌わないように対策をしたり、数は少ないが、踊ったりジャンプしたりすることを禁止しながら、子どもに音楽活動を提供していることが示された。

第2節 保育の場での子どもの歌唱に関わる環境

(1) . 目的

歌唱指導に対する質問紙による研究には、多保田（2005）、加藤（2013；2014）、加藤・古川・角藤（2015）、岡崎・近江（2017）などがある。それらの質問項目は、保育中に使用する曲、選曲理由、伴奏に使用する楽器の種類、歌唱活動時における子どもの歌い方、指導方法によって構成されている。多保田（2005）は、子どもたちの歌い方について保育者がどのように感じているのか（例として「子どもは伴奏をよく聴いて歌う」、「子どもは簡単な振りを加えると楽しんで歌う」など）を設問し、得た結果から、子どもの歌唱活動には、保育者の歌唱指導に対する認識や態度が大きな影響を与えることを示唆している。これは、保育者が子どもたちの歌を歌う様子について回答した調査からの示唆であり、保育者自身が歌唱指導についてどのように認識しているのかは調査されていない。保育者が、歌唱指導についてどのような認識をもっているのかを把握することは重要な課題である。

そこで本調査では、保育者を対象とし、歌唱指導が具体的にどのように行われているのか、保育者が歌唱指導についてどのように認識しているのか、歌唱指導のほかに、子どもたちにどのような音楽環境を用意しているのかを明らかにした。

歌唱発達の研究によれば、2歳半で歌の一部分を自分から歌い、3歳になると1曲を歌えるようになる（Shuter, 1968；Hargreaves, 1986；Fuchida, 2009）。また、3歳以後の子どもたちは、様々な歌や歌の断片を組み合わせてメドレーのようにして歌を歌う

（Heiner, 2002）ことが示され、3歳までと3歳以後では、子どもの歌い方に違いがあることが明らかになっている。くわえて、McDonald & Simons（1989）は、子どもたちの歌唱指導方法について、2歳位までは、親や保育者との1対1対応の歌いかけや歌遊びを通しての音楽体験をすること、2歳半から3歳までは、親や保育者は子どもと一緒に、歌う、動く時間をつくること、社会性が育まれる3歳以後は、子ども同士での歌を介しての音楽遊びを通して音楽経験を積むことが望ましいと述べ、3歳までと3歳以後での指導方法に違いをもたせることを提案している。

また、保育所保育指針（2017）に記載されている「指導計画の作成上、特に留意すべき

事項」でも、3歳未満児と3歳以上児の指導の計画作成は分けて示されている。絵本に関する指導においても、3歳までと3歳以上で留意すべきことが異なることを示す文献がある。坂田（2017）は、3歳未満児クラスの子どもたちは読み聞かせを主にして絵本に関わるため、保育者には読み聞かせに対する技量が求められる。一方、3歳以上児クラスの子どもたちは絵本を自ら手に取って読むようになるため、保育者には子どもが自分の興味のある本を選べるなどの環境設定の配慮が要求されることを述べている。

これらから、歌唱指導においても、3歳未満児の担任と3歳以上児の担任との間で、歌唱指導に対する認識や方法に違いがあることが想定される。そのため、3歳未満児（以下、未満児）の担任と3歳以上児（以下、以上児）の担任に分けてそれらに関する分析を行った。

(2) . 方法

①調査対象者

兵庫県（9園）、茨城県（9園）、大阪府（5園）、東京都（2園）、埼玉県（2園）、栃木県（2園）、愛知県（1園）、奈良県（1園）、京都府（1園）の32の幼稚園、認定こども園、保育所で担任をしている保育者300名を対象とし、267名（89%）から回答を得た。

②調査時期

2018年6月～10月、2019年10月～12月に実施した。

③調査内容

自記式による質問紙を作成した。質問紙の内容は、兎塚（2000）、立本（2008）、Valerio et al.（2011）の文献を参考に、①回答者（保育者）の属性、②回答者（保育者）の音楽嗜好と演奏技術、③歌唱活動状況（保育中に歌を歌う頻度、曲数など）、④歌唱指導（選曲方法、曲紹介の方法、保育室の壁面活用、音楽専門家による歌唱指導など）、⑤視聴覚機器と視聴覚教材の活用、⑥担任が歌唱指導において重視すること、⑦保育中の歌唱行為に関する担任の認識、計7分野40項目で構成した。

④調査手続き

質問紙は、回答者が勤務する幼稚園、認定こども園、保育所の園長（所長）から、回答者に一斉配布をした。回答は留置法によって回収した。また、回答者には、保育活動中の歌唱

指導については、調査時点で担任をしているクラスで実践している状況を答えてもらうように依頼した。なお、1クラスを複数で担当している場合は、1クラス1名のみ回答を依頼した。

⑤倫理的配慮

調査に際し、実施する園に調査内容を説明し、園長（所長）より実施の承諾を得た。

回答者には、質問紙と一緒に「調査へのご協力とお願い」を配布し、実施方法や倫理的配慮について説明を行った。説明の内容は、①本調査は、保育で子どもがどのように音楽に親しんでいるのかを尋ねる内容であること、②回答に正誤はないこと、③思った通りに回答すること、④調査への協力は自由意志であり、協力しないことによる不利益は一切ないこと、⑤調査開始後も、回答したくない項目に対する回答拒否や調査協力の中断は可能であることを記載した。

なお、調査は、筑波大学医学医療系医の倫理委員会の承認を得て行った(承認番号 1245)。

(3) . 分析方法

保育中の子どもたちへの歌唱指導に関する状況や、保育者の歌唱指導に対する認識を明らかにするため、各項目の割合を未満児の担任群と以上児の担任群とに分け、算出をした。なお、未満児の担任群と以上児の担任群との比較には χ^2 検定を用いたが、セルに5以下の数値があった場合には Fisher の直接確立検定を用いた。くわえて、5段階のリッカート尺度を用いた質問項目の比較には t 検定を使用した。

(4) . 結果

①回答者の属性

回答者の属性を Table2-2-1 に示した。回答者の性別は、女性 98% (263 名)、男性 2% (4 名)であった。年代は、20代 51% (137 名)、30代 26% (69 名)、40代 15% (41 名)、50代 7% (19 名)であった。勤務園(所)は、幼稚園 30% (81 名)、認定こども園 41% (109 名)、保育所 29% (77 名)であった。担当クラスは、5歳児クラス(年長) 20% (53 名)、4歳児クラス(年中) 22% (58 名)、3歳児クラス(年少) 24% (64 名)、0歳児～2歳児(乳児)クラス 33% (88 名)。保育歴の平均は 9.3 年 (SD=7.20)であり、鍵盤(ピアノ、オル

ガン、エレクトーンなど) を学び始めてからの鍵盤演奏の経験平均年数は 14.11 年 (SD=11.07) であった。

Table2-2-1. 回答者の属性 (N=267)

性別	
女性	98%(263名)
男性	2% (4名)
年代	
20代	51%(137名)
30代	26% (69名)
40代	15% (41名)
50代	7% (19名)
無回答	1% (1名)
勤務園(所)	
幼稚園	30% (81名)
認定こども園	41% (109名)
保育所	29% (77名)
担当クラス	
5歳児クラス(年長)	20% (53名)
4歳児クラス(年中)	22% (58名)
3歳児クラス(年少)	24% (64名)
0歳児～2歳児(乳児)クラス	33% (88名)
無回答	2% (4名)
保育歴平均	9.30年 (SD=7.20)
鍵盤演奏歴平均	14.11年 (SD=11.07)

②回答者の音楽嗜好と演奏技術

回答者の音楽嗜好と演奏技術について、あてはまる項目を選択式（複数回答）で尋ねた（Table2-2-2）。「音楽を聴くことが好き」は91%（243名）、「歌を歌うことが好き」は70%（186名）、「弾き歌いは苦手」は55%（145名）、「歌の楽譜をみれば、初めてみる歌でもある程度、歌える」は38%（100名）、「歌の楽譜をみれば、人に教えてもらわなくても歌える」は36%（96名）、「弾き歌いは得意」は22%（59名）、「歌の楽譜をみても人に教えてもらえないと、歌えない」は18%（48名）、「歌に関係あるショーやコンクールに出演したことがある」は5%（13名）であった。

「歌を歌うことが好き」は7割であるが、「歌の楽譜をみれば、人に教えてもらわなくても歌える」が約4割弱であること、弾き歌いに苦手認識をもつ回答者が半数以上であることが示された。

Table2-2-2. 回答者の音楽嗜好と演奏技術（選択式）（N=266）

音楽を聴くことが好き	91%	（243名）
歌を歌うことが好き	70%	（186名）
弾き歌いは苦手	55%	（145名）
歌の楽譜をみれば、初めてみる歌でもある程度、歌える	38%	（100名）
歌の楽譜をみれば、人に教えてもらわなくても歌える	36%	（96名）
弾き歌いは得意	22%	（59名）
歌の楽譜をみても人に教えてもらわないと、歌えない	18%	（48名）
歌に関係あるショーやコンクールに出演したことがある	5%	（13名）

（複数回答）

③歌唱活動状況

1週間に歌を歌う頻度

保育活動中に、担任が子どもたちに向けて歌を歌う、あるいは、子どもたちと一緒に歌を歌う頻度について、「毎日」、「週に4、5日」、「週に2、3日」のいずれにあてはまるかを尋ねた (Table2-2-3)。その結果、最も割合が高かったのは「毎日」で、未満児担任 89% (74名)、以上児担任 75% (131名) であった。未満児担任と以上児担任に差があるのかどうかを確認するために χ^2 検定を行ったところ有意であった ($\chi^2(2)=7.17, p < 0.5$)。この結果に対して、調整済み残差を計算した結果を Table2-2-4 に示した。Table から、「毎日」については未満児担任のほうが有意に多い。つまり、以上児担任に比べ、未満児担任のほうが「毎日」歌うことが多いことが確認された。

Table2-2-3. 1週間に歌を歌う頻度

	未満児 (n=83)	以上児 (n=174)	Pearson の χ^2 値
毎日	89% (74名)	75% (131名)	7.17*
週に4、5日	3% (3名)	12% (21名)	
週に2、3日	7% (6名)	13% (22名)	

*:p<0.05

Table2-2-4. Table2-2-3 に対する調整済み残差

	未満児	以上児
毎日	2.6	-2.6
週に4、5日	-2.2	2.2
週に2、3日	-1.3	1.3

1 週間に歌を歌う曲数

保育活動の中で、1 週間に担任が子どもたちに向けて歌う、あるいは、子どもたちと一緒に歌を歌う曲数について、「おおよそ 1 曲」、「おおよそ 2～3 曲」、「おおよそ 4～5 曲」、「おおよそ 6 曲以上」のいずれにあてはまるかを尋ねた (Table2-2-5)。その結果、未満児担任も以上児担任も「おおよそ 2～3 曲」の割合が高く、未満児担任 43% (37 名)、以上児担任 44% (75 名) であった。次いで、おおよそ「4～5 曲」が、それぞれ 3 割程度程度であった。

未満児担任と以上児担任に差があるのかどうかを確認するために χ^2 検定を行ったところ、統計的に有意な差は認められなかった。

Table2-2-5. 1 週間に歌う曲数

	未満児 (n=87)	以上児 (n=172)	Fisher の直接確立 p 値(df=3)
おおよそ 1 曲	2% (2 名)	5% (9 名)	n.s.
おおよそ 2～3 曲	43% (37 名)	44% (75 名)	
おおよそ 4～5 曲	31% (27 名)	32% (55 名)	
おおよそ 6 曲以上	24% (21 名)	19% (33 名)	

④歌唱指導

選曲

「選曲時に心がけていること」について、あてはまる項目を選択式 (複数回答) で尋ねた (Table2-2-6)。その結果、「季節にあわせる」は未満児担任 96% (84 名)、以上児担任 95% (167 名)、「行事にあわせる」は未満児担任 88% (77 名)、以上児担任 85% (148 名) であった。

未満児担任と以上児担任に差があるのかどうかを確認するために χ^2 検定を行ったところ、「手遊びや身体遊びを含んだ曲」、「歌詞が単純」、「曲の長さが長い歌は選曲しない」、「低音が多く含まれている曲は選曲しない」、「高音が多く含まれている曲は選曲しない」に有意差が認められ、未満児担任のほうが「手遊びや身体遊びを含んだ曲」、「歌詞が単

純)、「曲が長い歌は選曲しない」というものが多く、以上児担任のほうが「低音が多く含まれている曲は選曲しない」、「高音が多く含まれている曲は選曲しない」というものが多いことが確認された (前から、 $\chi^2(1)=49.19, p<0.01$ 、 $\chi^2(1)=14.85, p<0.01$ 、 $\chi^2(1)=8.40, p<0.05$ 、 $\chi^2(1)=6.82, p<0.05$ 、 $\chi^2(1)=3.84, p<0.05$)。

Table2-2-6. 選曲時に心がけていること (選択式)

	3歳児未満(n=88)		3歳児以上(n=175)		Pearsonの χ^2 値 あるいはp値※ (df=1)
季節にあわせる	96%	(84名)	95%	(167名)	n.s.
行事にあわせる	88%	(77名)	85%	(148名)	n.s.
担当しているクラスの子どもたちの発達段階にあわせる	66%	(58名)	63%	(110名)	n.s.
子どもがリズムをとりやすそうな曲	61%	(54名)	57%	(99名)	n.s.
手遊びや身体遊びを含んだ曲	81%	(71名)	35%	(61名)	49.19**
歌詞が単純	58%	(51名)	33%	(58名)	14.85**
長調の曲あるいは明るい曲調	43%	(38名)	35%	(61名)	n.s.
自分にとって伴奏の難易度が高い曲は簡易伴奏に替える	32%	(28名)	37%	(64名)	n.s.
旋律が単純	19%	(17名)	21%	(36名)	n.s.
曲の長さが長い歌は選曲しない	26%	(23名)	12%	(21名)	8.4*
低音が多く含まれている曲は選曲しない	8%	(7名)	21%	(36名)	6.82*
高音が多く含まれている曲は選曲しない	9%	(8名)	18%	(32名)	3.84*
短調の曲あるいは暗い曲調の歌は選曲しない	14%	(12名)	21%	(12名)	n.s.
自分にとって伴奏の難易度が高い曲は選曲しない	16%	(14名)	9%	(16名)	n.s.
曲の長さが短い曲は選曲しない	5%	(4名)	3%	(6名)	n.s.※
保育では歌わないようにしている歌がある	6%	(5名)	2%	(4名)	n.s.※
繰り返しが多い曲は選曲しない	2%	(2名)	2%	(3名)	n.s.※
繰り返しが少ない曲は選曲しない	0		2%	(4名)	-

*:p<0.05、**:p<0.01 ※:Fisher's Exact Test

(複数回答)

曲紹介の工夫

「はじめての歌を子どもに紹介する時に工夫をしていること」について、あてはまる項目を選択式（複数回答）で尋ねた（Table2-2-7）。その結果、「歌詞に関係する話題を子どもたちと話す」のは未満児担任 51%（45名）、以上児担任 66%（115名）であった。

未満児担任と以上児担任に差があるのかどうかを確認するために χ^2 検定を行ったところ、「歌詞に関係する話題を子どもたちと話す」、「楽器を使って歌詞と旋律（メロディ）を弾き歌う」、「言葉だけを使って歌詞について説明をする」、「楽器を使って旋律（メロディ）だけを弾き歌う」に有意差が認められた（前から、 $\chi^2(1)=5.22, p<0.05$ 、 $\chi^2(1)=8.03, p<0.05$ 、 $\chi^2(1)=13.38, p<0.01$ 、 $\chi^2(1)=9.55, p<0.05$ ）。

「歌詞に関係する話題を子どもたちと話す」、「楽器を使って歌詞と旋律（メロディ）を弾き歌う」、「言葉だけを使って歌詞について説明をする」、「楽器を使って旋律（メロディ）だけを弾き歌う」のこれら全てについて、以上児担任のほうが有意に多いことがわかった。つまり、未満児担任に比べ、以上児担任のほうが、「歌詞に関係する話題を子どもたちと話す」、「楽器を使って歌詞と旋律（メロディ）を弾き歌う」、「言葉だけを使って歌詞について説明をする」、「楽器を使って旋律（メロディ）だけを弾き歌う」ことが多いことが確認された。

Table2-2-7. 初めての歌を子どもたちに紹介する時に工夫をしていること（選択式）

	未満児(n=88)	以上児(n=175)	Pearsonの χ^2 値 あるいはp値※ (df=1)
歌詞に関係する話題を子どもたちと話す	51% (45名)	66% (115名)	5.22*
楽器を使って歌詞と旋律（メロディ）を弾き歌う	35% (31名)	54% (94名)	8.03*
絵などの視覚物と言葉を使って歌詞について説明をする	40% (35名)	44% (77名)	n.s.
言葉だけを使って歌詞について説明をする	26% (23名)	50% (87名)	13.38**
楽器を使用せず歌詞と旋律（メロディ）を歌う	34% (30名)	30% (52名)	n.s.
楽器を使って旋律（メロディ）だけを弾き歌う	9% (8名)	25% (44名)	9.55*
楽器を使用せずハミングや旋律（メロディ）だけを歌う	5% (4名)	4% (7名)	n.s.※

*:p<0.05、**:p<0.01 ※:Fisher's Exact Test (複数回答)

発声

歌を歌う前に発声練習をしているのかを尋ねたところ (Table2-2-8)、「発声練習をする」は未満児 20% (17 名)、以上児 40% (68 名) であった。未満児と以上児に差があるのかどうかを確認するために、 χ^2 検定を行ったところ有意が認められ、以上児が「発声練習をする」ことが多いことが示された ($\chi^2(1) = 10.54, p < 0.01$)。

Table2-2-8. 発声練習の有無

	未満児(n=86)	以上児(n=170)	Pearson の χ^2 値 (df=1)
発声練習をする	20% (17 名)	40% (68 名)	10.54*

*:p<0.05

保育室の壁面活用

保育室の壁面に歌詞や楽譜を貼っているかについて、「いつも貼る」、「時々貼る」、「ほとんど貼らない」、「全く貼らない」のいずれかを尋ねた (Table2-2-9)。その結果、未満児担任の 94% (82 名) が「全く貼らない」、あるいは「ほとんど貼らない」と答えたのに対して、以上児担任は 55% (95 名) であった。「いつも貼る」、「時々貼る」を合わせた群と「全く貼らない」、「ほとんど貼らない」を合わせた群との 2 群での未満児担任と以上児担任に差があるのかどうかを確認するために χ^2 検定を行ったところ有意であった ($\chi^2(1)=41.79, p < 0.01$)。

この結果に対して、調整済み残差を計算した結果を Table2-2-10 に示した。Table から、「いつも貼る/時々貼る」については以上児担任のほうが有意に高い。つまり、未満児担任に比べ、以上児担任のほうが「いつも貼る/時々貼る」ことが多いことが確認された。

壁面に貼る際に「歌詞のみ貼る」、「旋律 (メロディ) のみ貼る」、「歌詞と旋律 (メロディ) を貼る」の項目のなかでいずれかを尋ねたところ (Table2-2-11)、未満児担任も以上児担任も「歌詞のみ貼る」と答える者が多かった。

Table2-2-9. 保育室の壁面に楽譜を貼る頻度

	3歳未満児 (n=87)	3歳以上児 (n=174)	Fisherの直接確立 p値(df=1)
ほとんど貼らない/全く貼らない	94% (82名)	55% (95名)	41.79**
いつも貼る/時々貼る	6% (5名)	45% (79名)	

**:p<0.01

Table2-2-10. Table2-2-9に対する調整済み残差

	未満児	以上児
あまり貼らない/全く貼らない	6.5	-6.5
いつも貼る/時々貼る	-6.5	6.5

Table2-2-11. 保育室壁面に貼る内容（選択式）

	未満児(n=88)	以上児(n=175)	Pearsonの χ^2 値 (df=1)
歌詞のみ貼る	7% (6名)	55% (97名)	58.07**
旋律（メロディ）のみ貼る	0	2% (4名)	
歌詞と旋律（メロディ）を貼る	0	1% (2名)	—

**:p<0.01

(複数回答)

音楽の専門家による指導

音楽の専門家による指導があるのかどうかを尋ねた (Table2-2-12) ところ、「ある」と回答したのは未満児担任 5% (4名)、以上児担任 25% (44名)であった。未満児担任と以上児担任に差があるのかどうかを確認するために χ^2 検定を行ったところ、有意であることが確認された ($\chi^2(1)=16.80, p<0.01$)。

Table2-2-12. 音楽の専門家による指導の有無

	未満児(n=88)	以上児(n=174)	Pearson の χ^2 値 (df=1)
ある	5% (4 名)	25% (44 名)	16.80**

** : $p < 0.01$

⑤視聴覚機器と視聴覚教材の活用

ラジオや CD などの聴覚機器を聴く機会

園内で、ラジオや CD などの聴覚機器を活用して、子どもたちが音楽を聴く機会があるのかを選択式で尋ねた (Table2-2-13)。その結果、未満児担任 76% (67 名)、以上児担任 77% (132 名) が、「聴く機会がある」と答えた。未満児担任と以上児担任に差があるかどうかを確認するために χ^2 検定を行ったところ、統計的に有意な差は認められなかった。

Table2-2-13. ラジオや CD などの聴覚機器を活用して、子どもたちが音楽を聴く機会
(選択式)

	未満児(n=88)	以上児 (n=172)	Pearson の χ^2 値 (df=1)
聴く機会がある	76%(67 名)	77%(132 名)	n.s.

子どもたちが自由に操作して聴くことができる機器 (例として CD デッキ) が保育室にあるかどうかを尋ねたところ (Table2-2-14)、「ある」と回答したのは未満児担任 26% (22 名)、以上児担任 37% (61 名) であった。未満児担任と以上児担任に差があるかどうかを見るために χ^2 検定を行ったところ、統計的に有意な差は認められなかった。

Table2-2-14. 子どもが自由に操作できるラジオや CD の機器の有無

	未満児 (n=85)	以上児 (n=166)	Pearson の χ^2 値 (df=1)
自由に操作して聴く機器がある	26% (22 名)	37% (61 名)	n.s.

聴覚機器を用いて音楽をどれ位の頻度で聴くのかを「ほぼ毎日」、「週に 1～3 回程度」、「月に 1～3 回程度」の選択肢で尋ねたところ(Table2-2-15)、「ほぼ毎日」が未満児担任 62%(37 名)、以上児担任 41%(43 名)、「週に 1～3 回程度」は未満児担任 23%(14 名)、以上児担任 40%(42 名)、「月に 1～3 回程度」は未満児担任 15%(9 名)、以上児担任 19%(20 名)であった。未満児担任と以上児担任に差があるのかどうかを確認するために χ^2 検定を行ったところ、有意であることが確認された ($\chi^2(2)=6.86, p<0.05$)。

この結果に対して、調整済み残差を計算した結果を Table2-2-16 に示した。Table から、「ほぼ毎日」については未満児担任のほうが有意に高い。つまり、以上児に比べ、未満児担任のほうが「ほぼ毎日」聴くことが多いことが確認された。

Table2-2-15. 聴覚機器を用いて、子どもたちが音楽を聴く頻度

	未満児 (n= 60)	以上児 (n= 105)	Pearson の χ^2 値 (df=2)
ほぼ毎日	62% (37 名)	41% (43 名)	6.86*
週に 1～3 回程度	23% (14 名)	40% (42 名)	
月に 1～3 回程度	15% (9 名)	19% (20 名)	

*: $p<0.05$

Table2-2-16. Table2-2-15 に対する調整済み残差

	未満児	以上児
ほぼ毎日	2.6	-2.6
週に 1～3 回程度	-2.2	2.2
月に 1～3 回程度	-0.7	0.7

BGM を流しながら活動する機会

CD や生演奏などの BGM を流しながら子どもが活動をするかどうかを「よくある」、「時々ある」、「あまりない」、「全くない」のいずれにあてはまるかを尋ねた (Table2-2-17)。その結果、「よくある」、「時々ある」を合わせると、未満児担任 61% (52 名)、以上児担任 54% (90 名) で、5 割以上が、BGM を流すことが「よくある」、「時々ある」ことが示された。未満児担任と以上児担任に差があるのかどうかを確認するために χ^2 検定を行ったところ、有意な差は確認されなかった。

Table2-2-17. BGM を流しながら子どもが活動をする頻度

	未満児 (n=85)	以上児 (n= 169)	Pearson の χ^2 値 (df=3)
よくある	29% (25 名)	21% (35 名)	n.s.
時々ある	32% (27 名)	33% (55 名)	
あまりない	13% (11 名)	21% (36 名)	
全くない	26% (22 名)	25% (43 名)	

CD や生演奏などの BGM をいつ流すのかについて、あてはまる項目を選択式 (複数回答) で尋ねたところ (Table2-2-18)、「遊び中」が未満児担任 55% (48 名)、以上児担任 28% (49 名) と、答えた者が多かった。

未満児担任と以上児担任に差があるのかどうかを確認するために χ^2 検定を行ったところ、「遊び中」、「食事中」に有意差が認められ、未満児担任のほうが「遊び中」に、以上児担任のほうが「食事中」に BGM を流すことが多いことが確認された (前から $\chi^2(1) = 17.73, p < 0.01$ 、 $\chi^2(1) = 9.53, p < 0.05$)。

Table2-2-18. BGM を流す時 (選択式)

	未満児 (n=88)	以上児 (n=175)	Pearson の χ^2 値あるいは p 値 ※ (df=1)
遊び中	55% (48 名)	28% (49 名)	17.73**
食事中	13% (11 名)	30% (52 名)	9.53*
登園してきた時	14% (12 名)	7% (12 名)	n.s.
活動への移動時	3% (3 名)	10% (17 名)	n.s※.
降園準備	3% (3 名)	4% (7 名)	n.s※

*: $p<0.05$ 、**: $p<0.01$ ※:Fisher's Exact Test

(複数回答)

映像を通して視聴する機会

園内で、テレビや DVD などの視聴覚機器で、子どもたちが映像を通して音楽を視聴する機会があるのかを選択式で尋ねた (Table2-2-19)。その結果、未満児担任 39% (34 名)、以上児担任 34% (59 名) が、「映像を通して視聴する機会がある」と答えた。未満児担任と以上児担任に差があるのかどうかを確認するために χ^2 検定を行ったところ、統計的に有意な差は認められなかった。

Table2-2-19. 視聴覚機器で子どもが音楽を視聴する内容 (選択式)

	未満児(n=88)	以上児(n=175)	Pearson の χ^2 値 (df=1)
映像を通して視聴する機会がある	39% (34 名)	34% (59 名)	n.s.

子どもたちが視聴覚機器で視聴する頻度を尋ねたところ (Table2-2-20)、未満児担任と以上児担任との 81 名から回答があり、81 名のうち「週 4 回以上」は未満児 52% (16 名)、以上児 34% (17 名)、「週 1 回から 3 回程度」は未満児 36% (11 名)、以上児

32% (16名)、「月1回から3回程度」未満児13% (4名)、以上児34% (17名)であった。

未満児担任と以上児担任に差があるのかどうかを見るために χ^2 検定を行ったところ、統計的に有意な差は認められなかった。

これらの結果から、聴覚機器で音楽を聴く機会に比べて、テレビやDVDなどで音楽を視聴する機会が少ないことが示された。

Table2-2-20. 視聴覚機器で子どもたちが視聴する頻度

	未満児 (n=31)	以上児 (n=50)	Pearsonの χ^2 値(df=1)
週4回以上	52% (16名)	34% (17名)	n.s.
週1～3回程度	36% (11名)	32% (16名)	
月1～3回程度	13% (4名)	34% (17名)	

映像を通して視聴する番組

園内で、DVDやテレビ、ビデオなどの視聴覚機器の映像を通して、どのような歌の番組を子どもたちが聴くのかについて、あてはまる項目を選択式(複数回答)で尋ねた(Table2-2-21)。割合が高かった音楽は、未満児担任では「おかあさんと一緒」が27% (24名)、以上児担任では「一般アニメの挿入曲」、「ディズニーオープニング」がいずれも20% (35名)であった。未満児担任と以上児担任に差があるのかどうかを確認するために χ^2 検定を行ったところ、「おかあさんと一緒」が有意であることが認められ、未満児担任のほうが「おかあさんと一緒」を子どもたちに多く見せることが確認された($\chi^2(1)=4.69, p<0.05$)。

Table2-2-21. 映像を通して音楽を視聴する内容（選択式）

	未満児 (n=88)	以上児 (n=175)	Pearson の χ^2 値 (df=1)
一般アニメ挿入曲	23% (20 名)	20% (35 名)	n.s.
おかあさんと一緒	27% (24 名)	16% (28 名)	4.69*
ディズニーオープニング	14% (12 名)	20% (35 名)	n.s.
ディズニー挿入曲	14% (12 名)	18% (31 名)	n.s.
ディズニーエンディング	15% (13 名)	16% (28 名)	n.s.
みんなの歌	16% (14 名)	14% (25 名)	n.s.
E テレオープニング	16% (14 名)	11% (19 名)	n.s.
一般アニメオープニング	16% (14 名)	10% (17 名)	n.s.
E テレ挿入曲	16% (14 名)	9% (16 名)	n.s.
E テレエンディング	13% (11 名)	9% (15 名)	n.s.
一般アニメエンディング	15% (13 名)	7% (13 名)	n.s.
一般歌番組	3% (3 名)	4% (7 名)	n.s.※.

*: $p<0.05$ ※:Fisher's Exact Test

(複数回答)

絵本、紙芝居

園内で、歌を含む絵本あるいは紙芝居をみる機会があるのかどうかを尋ねたところ (Table2-2-22)、みる機会が「ある」と答えたのは、未満児担任 96% (84 名)、以上児担任 71% (122 名) であった。未満児担任と以上児担任に差があるのかどうかを見るために χ^2 検定を行ったところ、有意であった ($\chi^2(1)=20.75, p<0.01$)。

Table2-2-22. 歌を含む絵本あるいは紙芝居を観る機会

	未満児(n=88)	以上児(n=171)	Pearson の χ^2 値 (df=1)
歌を含む絵本あるいは紙芝居を みる機会がある	96% (84 名)	71% (122 名)	20.75**

**: $p<0.01$

歌を含む絵本あるいは紙芝居を観る頻度 (Table2-2-23) については、「月に 2 回程度」が、未満児担任 12% (9 名)、以上児担任 47% (42 名) で最も割合が高く、「ほぼ毎日」、「週に 2~3 回」、「週に 1 回程度」、「月に 3 回程度」は 1~2 割程度であった。未満児担任と以上児担任に差があるのかどうかを見るために χ^2 検定を行ったところ、有意であった ($\chi^2(4)=48.16, p<0.01$)。

この結果に対して、調整済み残差を計算した結果を Table2-2-24 に示した。Table から、「ほぼ毎日」、「週に 2~3 回程度」、については、未満児担任のほうが有意に高い。くわえて、「月 2 回程度」については以上児担任のほうが有意に高い。したがって、以上児担任に比べ、未満児担任のほうが「ほぼ毎日」「週に 2~3 回」歌を含む絵本あるいは紙芝居を観ることが多いことが確認された。

Table2-2-23. 歌を含む絵本あるいは紙芝居を観る頻度

	未満児 (n=75)	以上児 (n= 90)	Pearson の χ^2 値 (df=4)
ほぼ毎日	24% (18 名)	3% (3 名)	48.16**
週に 2~3 回	29% (22 名)	4% (4 名)	
週に 1 回程度	23% (17 名)	23% (21 名)	
月に 3 回程度	12% (9 名)	22% (20 名)	
月に 2 回程度	12% (9 名)	47% (42 名)	

**: $p<0.01$

Table2-2-24. Table. 2-2-23 に対する調整済み残差

	未満児	以上児
ほぼ毎日	4	-4
週に2~3回	4.4	-4.4
週に1回程度	-0.1	0.1
月に3回程度	-1.7	1.7
月に2回程度	-4.8	4.8

パネルシアター

保育活動の中で、歌を含むパネルシアターあるいは人形劇をみる機会があるのかどうかを尋ねたところ (Table2-2-25)、観る機会が「ある」と答えた者は未満児担任 69% (61 名)、以上児担任 66% (112 名) であった。未満児担任と以上児担任に差があるのかどうかを見るために χ^2 検定を行ったところ、統計的に有意な差は認められなかった。

観る頻度 (Table2-2-26) は「月に2回程度」が、未満児 67% (16 名)、以上児 82% (23 名) で最も割合が高く、「ほぼ毎日」、「週に2~3回」、「週に1回程度」、「月に3回程度」は、1割程度であった。未満児担任と以上児担任に差があるのかどうかを見るために χ^2 検定を行ったところ、統計的に有意な差は認められなかった。

Table2-2-25. 歌を含むパネルシアターあるいは人形劇を観る機会

	未満児(n=88)	以上児(n=172)	Pearson の χ^2 値 (df=1)
園内で、パネルシアターや人形劇を みる機会がある	69% (61 名)	66% (112 名)	n.s.

Table2-2-26. 歌を含むパネルシアターや人形劇をみる頻度

	未満児 (n=24)	以上児 (n= 28)	Pearson の χ^2 値 (df=4)
ほぼ毎日	4% (1 名)	0	n.s.
週に 2~3 回	4% (1 名)	0	
週に 1 回程度	17% (4 名)	14% (4 名)	
月に 3 回程度	8% (2 名)	4% (1 名)	
月に 2 回程度	67%(16 名)	82%(23 名)	

園外でコンサートなどを観に行く機会

園外で幼児向けの歌の挿入がある、コンサート、ミュージカル、人形劇を観に行く機会があるのかどうかを尋ねた (Table2-2-27) ところ、「観に行く」と答えた担任は、未満児担任 21% (18 名)、以上児担任 43% (75 名) であった。未満児担任と以上児担任に差があるのかどうかを見るために χ^2 検定を行ったところ、有意であった ($\chi^2(1)=13.33, p<0.01$)。

観に行く頻度 (Table2-2-28) については、「1 年に 1 回程度」が、未満児担任 83% (15 名)、以上児担任 87% (65 名) で最も割合が高かった。「1 年に 2 回程度」は未満児担任で 11% (2 名)、以上児担任で 8% (6 名)、「1 年に 3 回程度」は未満児担任で 6% (1 名)、以上児で 5% (5 名) であった。未満児担任と以上児担任に差があるのかどうかを見るために χ^2 検定を行ったところ、統計的に有意な差は認められなかった。

Table2-2-27. コン서트、ミュージカル、人形劇を観に行く機会

	未満児(n=88)	以上児(n=173)	Pearson の χ^2 値 (df=1)
園外でコンサート、ミュージカル、人形劇を 観に行く機会	21%(18 名)	43%(75 名)	13.33**

**: $p<0.01$

Table2-2-28. コンサート、ミュージカル、人形劇を観に行く頻度(N=52)

	未満児(n=18)	以上児(n=75)	Pearsonの χ^2 値(df=2)
1年に1回程度	83%(15名)	87%(65名)	n.s.
1年に2回程度	11%(2名)	8%(6名)	
1年に3回程度	6%(1名)	5%(5名)	

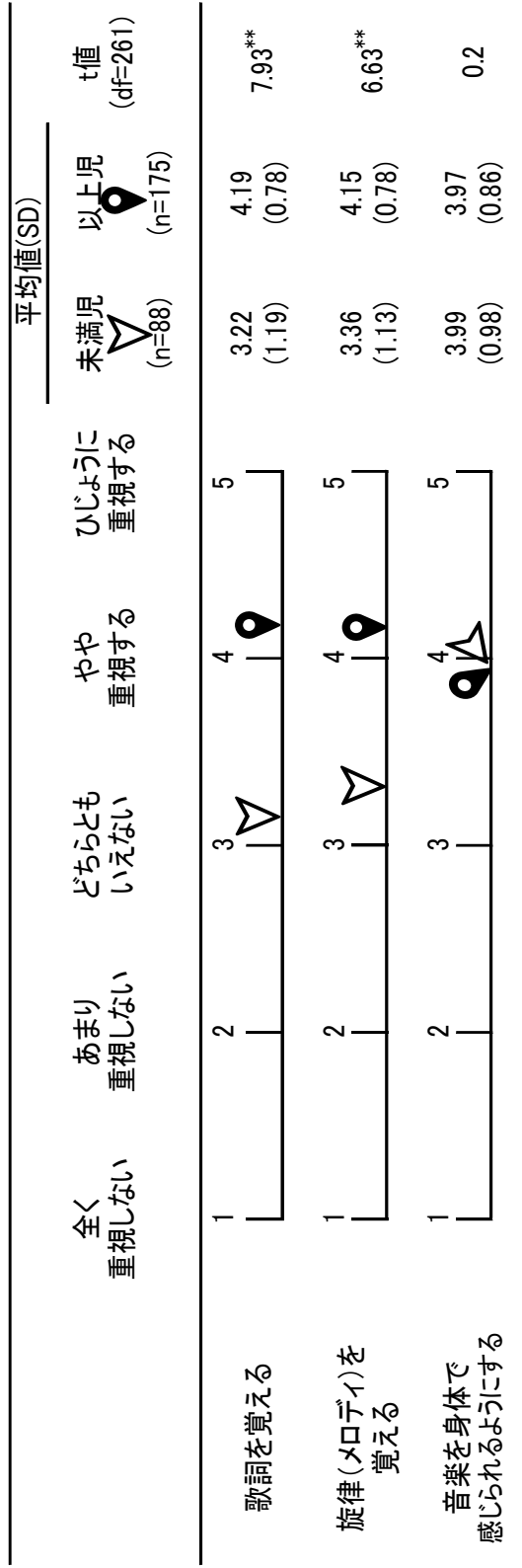
(6) 担任が歌唱指導において重視すること

子どもたちが歌を歌う際に、「歌詞を覚える」、「旋律（メロディ）を覚える」、「音楽を身体で感じられるようにする」ことについて、担任がどの程度それらを重視するのかを、5段階のリッカート尺度を用いて尋ねた（Figure2-2-1）。Figureには各項目の平均値と標準偏差を示した。平均の値が大きいほど重視していることを表している。各項目の平均値と標準偏差は、「歌詞を覚える」が未満児担任 3.22（SD=1.19）、以上児担任 4.19

（SD=0.78）、「旋律（メロディ）を覚える」が未満児担任 3.36（SD=1.13）、以上児担任 4.15（SD=0.78）、「音楽を身体で感じられるようにする」が未満児担任 3.99

（SD=0.98）、以上児担任 3.97（SD=0.86）であった。これらから、以上児担任が最も重視していた項目は「歌詞を覚える」であり、未満児担任が最も重視していた項目は「音楽を身体で感じられるようにする」であった。

未満児担任と以上児担任に差があるのかどうかを確認するためにt検定を行ったところ「音楽を身体で感じられるようにする」は、有意な差は認められなかった。しかし、「歌詞を覚える」、「旋律（メロディ）を覚える」は有意差が認められ、以上児担任のほうが、どちらの項目においても多いことが確認された（前から、 $t(261)=7.9$, $p<0.01$ 、 $t(261)=6.6$, $p<0.01$ ）。



**: $p < 0.01$

Figure 2-2-1. 歌遊びでの重視度

⑥保育中の歌唱行為に関する担任の認識

保育中の歌唱活動に関する担任の認識について、「よくある」、「時々ある」、「ほとんどない」、「まったくない」の4件法で尋ねた。その結果を Table2-2-29 に示した。

「よくある」と「時々ある」を合わせて9割程度であった項目には、「歌いながら子どもたちと一緒に、踊ったり、身体を動かしたりする」が未満児担任95%（83名）、以上児担任88%（152名）、「保育で使う歌のレパートリーを増やす努力をしている」が未満児担任91%（80名）、以上児担任89%（152名）であった。続いて、「よくある」と「時々ある」を合わせて8割程度であった項目には、「その場にあわせた歌を、子どもたちに歌う」が未満児担任89%（78名）、以上児担任80%（139名）であった。「くり返しが3番以上ある歌は、1番のみ、あるいは、1,2番のみだけを歌う」は、「よくある」と「時々ある」を合わせると、未満児担任88%（77人）、以上児担任68%（117人）、「他のクラスの担任の歌の指導について気になる」については、「よくある」と「時々ある」を合わせると、以上児担任81%（138名）で8割であり、未満児担任は70%（62名）に留まった。

未満児担任と以上児担任に差があるのかどうかを確認するために χ^2 検定を行ったところ、「歌いながら子どもたちと一緒に、踊ったり、身体を動かしたりする」、「その場にあわせた歌を、子どもたちに歌う」、「くり返しが3番以上ある歌は、1番のみ、あるいは、1,2番のみだけを歌う」、「自分が担当しているクラスと他のクラスの歌の完成度を比較する」、「歌の指導を苦痛に感じることもある」が有意であることが確認できた（前から、 $\chi^2(3)=10.04, p<0.05$ 、 $\chi^2(3)=13.35, p<0.05$ 、 $\chi^2(3)=23.45, p<0.05$ 、 $\chi^2(3)=23.35, p<0.01$ 、 $\chi^2(3)=8.04, p<0.05$ ）。

この結果に対して調整済み残差を計算した結果を Table2-2-30 に示した。Table から、「歌いながら子どもたちと一緒に、踊ったり、身体を動かしたりする」、「その場にあわせた歌を、子どもたちに歌う」、「くり返しが3番以上ある歌は、1番のみ、あるいは、1,2番のみだけを歌う」ことが「よくある」については、未満児担任のほうが有意に多い。つまり、以上児担任に比べ、未満児担任のほうが「歌いながら子どもたちと一緒に、踊ったり身体を動かしたりする」、「その場にあわせた歌を、子どもたちに歌う」、「くり返しが3番以上ある歌は、1番のみ、あるいは、1,2番のみだけを歌う」ことが「よくある」が有

意に多いことがわかった。「自分が担当しているクラスと他のクラスの歌の完成度を比較する」、「歌の指導を苦痛に感じることもある」ことが「よくある」については、以上児担任のほうが有意に多い。つまり、未満児担任に比べ、以上児担任のほうが「自分が担当しているクラスと他のクラスの歌の完成度を比較する」、「歌の指導を苦痛に感じることもある」が有意に多いことがわかった。

Table2-2-29. 保育中の歌唱行為に関する担任の認識

	3歳未満児			3歳以上児			Pearsonの χ^2 値 あるいはp値※ (df=3)
	n	よくある 時々ある ほとんど ない	全くない	n	よくある 時々ある ほとんど ない	全くない	
歌いながら子どもたちと一緒に、踊ったり、 身体を動かしたりする	88	65% (57名) 30% (26名) 5% (4名) 1% (1名)	1% (1名)	171	44% (76名) 44% (76名) 10% (17名) 1% (2名)	10.04*	
その場にあわせた歌を、子どもたちに歌う	88	47% (41名) 42% (37名) 9% (8名) 2% (2名)	2% (2名)	174	25% (43名) 55% (96名) 17% (29名) 3% (6名)	13.35*	
保育で使う歌のレパートリーを増やす努力をしている	88	41% (36名) 50% (44名) 9% (8名) 0	0	172	36% (61名) 53% (91名) 12% (20名) 0	—	
くり返しが3番以上ある歌は、1番のみ、 あるいは、1,2番のみだけを歌う	88	39% (34名) 49% (43名) 11% (10名) 1% (1名)	1% (1名)	173	16% (27名) 52% (90名) 23% (40名) 9% (16名)	23.45**	
他のクラスの担任の歌の指導について気になる	88	28% (25名) 42% (37名) 22% (19名) 8% (7名)	8% (7名)	172	29% (49名) 52% (89名) 17% (30名) 3% (4名)	n.s.	
替え歌をつくって子どもたちに歌う	88	14% (12名) 33% (29名) 41% (36名) 13% (11名)	13% (11名)	174	10% (18名) 41% (71名) 32% (55名) 17% (30名)	n.s.	
先輩保育者から回答者への、 「子どもの歌指導についての助言」を気にする	84	8% (7名) 30% (25名) 43% (36名) 19% (16名)	19% (16名)	170	12% (21名) 39% (66名) 37% (63名) 12% (20名)	n.s.	
その場にあわせた歌を即興でつくって、子どもに歌う	88	7% (6名) 27% (24名) 35% (31名) 31% (27名)	31% (27名)	174	5% (9名) 26% (46名) 40% (70名) 28% (49名)	n.s.	
自分が担当しているクラスと他のクラスの歌の完成度を 比較する	88	6% (5名) 25% (22名) 38% (33名) 32% (28名)	32% (28名)	174	16% (27名) 41% (71名) 33% (57名) 11% (19名)	23.35**※	
歌の指導を苦痛に感じることもある	87	1% (1名) 26% (23名) 46% (40名) 26% (23名)	26% (23名)	171	8% (14名) 26% (44名) 50% (85名) 16% (28名)	8.04*※	
1名で歌うのが苦痛に感じることがある	74	0 23% (17名) 39% (29名) 37% (28名)	37% (28名)	151	1% (2名) 19% (29名) 40% (60名) 40% (60名)	—	

*: $p < 0.05$, **: $p < 0.01$ ※: Fisher's Exact Test

Table2-2-30. Table2-2-29 に対する調整済み残差

	未満児				以上児			
	よくある	時々ある	ほとんどない	全くない	よくある	時々ある	ほとんどない	全くない
歌いながら子どもたちと一緒に、踊ったり、身体を動かしたりする	3.1	-2.3	-1.5	0	-3.1	2.3	1.5	0
その場にあわせた歌を、子どもたちに歌う	3.6	-2	-1.7	-0.5	-3.6	2	1.7	0.5
くり返しが3番以上ある歌は、1番のみ、あるいは、1,2番のみだけを歌う	4.2	-0.5	-2.3	-2.5	-4.2	0.5	2.3	2.5
自分が担当しているクラスと他のクラスの歌の完成度を比較する	-2.3	-2.5	0.8	4.2	2.3	2.5	-0.8	-4.2
歌の指導を苦痛に感じることもある	-2.3	0.1	-0.6	1.9	2.3	-0.1	0.6	-1.9

(5) . 考察

子どもが歌う際に担任として何を重視するかを尋ねた結果 (Figure2-2-1)、子どもが「音楽を身体で感じられるようにする」が未満児担任、以上児担任それぞれの平均値が 5 点満点のうち 3.99、3.97 であった。しかし、「歌詞を覚える」、「旋律 (メロディ) を覚える」については、未満児担任は、前から 3.22、3.36 で、「音楽を身体で感じられるようにする」より点数が低くなっている。一方、以上児担任は、前から 4.19、4.15 で、「音楽を身体で感じられるようにする」よりも高い点数であり、未満児担任と以上児担任で重視する項目が異なる傾向があることが示された。

この結果と、未満児担任と以上児担任に有意差が認められた項目に着目して、考察を述べる。

未満児担任と以上児担任で有意差が認められた項目の中で、以上児担任よりも未満児担任の割合が高い項目には、「1 週間に歌を歌う頻度」が挙げられる。未満児担任の 89% が「毎日」と回答したのに対し、以上児担任は 75% であった。また、「手遊びや身体遊びを含んだ曲」を選曲するとした者が未満児担任 81%、以上児担任 35% であり、「歌いながら子どもたちと一緒に踊ったり身体を動かしたりする」ことが「よくある」と回答した未満児担任が 65%、以上児担任が 44%、「その場にあわせた歌を子どもたちに歌う」と回答した未満児担任が 47%、以上児担任が 25% であった。

これらから、未満児の約 9 割が歌活動を毎日体験し、その歌活動については、担任が「手遊びや身体遊びを含んだ曲」を選曲し、「歌いながら子どもたちと一緒に踊ったり身体を動かしたり」する活動を行っていることが示されている。つまり、担任が「音楽を身体で感じることを」重視しているといえる。

次に、以上児担任については、「歌詞を覚える」、「旋律 (メロディ) を覚える」を重視する平均値が 4 以上で、「音楽を身体で感じる」ことよりも高い数字を示した。しかも、未満児担任と以上児担任で有意差が認められた項目の中で、未満児担任よりも以上児担任の割合が高い項目には、保育室の壁面活用において、「保育室の壁面に歌詞や楽譜をいつも貼る/時々貼る」が未満児担任 6%、以上児担任 45% であり、初めての歌を子どもに紹介する時に工夫をしていることとして、「歌詞に関係する話題を子どもたちと話す」が未満児担任 51%、

以上児担任 66%、「言葉だけを使って歌詞について説明する」が未満児担任 26%、以上児担任 50%であった。「保育室の壁面に歌詞を貼る」、「歌詞に関する話題を子どもたちと話す」、「言葉だけを使って歌詞について説明する」ことを、以上児担任が未満児担任より高い割合で行っていたことが示された。加藤（2013）は、以上児担任は担任が歌を歌って聴かせた後、子どもたちと一緒に繰り返しながら歌っていくと述べている。これらから、以上児担任が「音楽を身体で感じる」ことよりも、「歌詞を重視」していることが示唆できる。

次に、未満児担任と以上児担任に有意差が認められた「自分が担当しているクラスと他のクラスの歌の完成度を比較する」と「歌の指導を苦痛に感じることもある」について述べる。

「自分が担当しているクラスと他のクラスの歌の完成度を比較する」ことが「よくある」、「時々ある」を合わせると、未満児担任は 3 割、以上児担任は 6 割近くで、未満児担任と以上児担任に有意差があることが示されている。続いて、「歌の指導を苦痛に感じることもある」について「よくある」と「時々ある」を合わせると、未満児担任は 27%、以上児担任は 34%であり、「よくある」だけを見ても、未満児担任 1%、以上児担任 8%で、両群の間には有意差があることが示されている。以上児担任の歌唱指導について、担任は、誰が聴いても判断しやすい音程や声の大きさなど「出来栄え」を求める（加藤, 2013）、歌声の質を求める指導になり、歌唱指導に難しさを感じている（加藤, 2014）ことや、見栄えを優先する（加藤, 2013）ことも報告されている。このことも鑑みて、未満児担任に比べ、以上児担任は、「他のクラスと歌の完成度を比較する」、「歌の指導が苦痛とを感じる」傾向があるのではないかと考えられる。

はじめての歌を子どもに紹介する時に工夫をしていることのうち、「楽器を使って歌詞と旋律（メロディ）を弾き歌う」（未満児担任 35%、以上児担任 54%）と、「楽器を使って旋律（メロディ）だけを弾き歌う」（未満児担任 9%、以上児担任 25%）に有意差が示された。クラス（学年）が上がるとともに伴奏をつけて子どもの歌が指導される比率が高い（多保田, 2005）ことが明らかにされている。また、本調査での担任に対する演奏技術での質問において、「弾き歌いが苦手」が 55%の結果を得ている。ピアノが不得手であると歌唱活動が苦手である（加藤, 2013）という研究からも、「弾き歌いが苦手」なことが「歌の指導を苦痛に感じる」ことの要因の 1 つになっているのではないかとと思われる。

最後に、選曲について、「季節にあわせる」と回答した保育者が、全体では95%（未満児担任96%、以上児担任95%）であるのに対し、「担当しているクラスの子どもたちの発達段階にあわせる」のは64%（未満児担任66%、以上児担任63%）であることが確認された。指導計画の作成には、子どもの発達過程を見通す、季節の変化を考慮する、環境を構成する、の3つのポイントが挙げられる（手良村, 2019）。本調査で示された、「担当しているクラスの子どもたちの発達段階にあわせる」が6割程度に留まっていることが、子どもの歌唱に影響を与えていると思われる。

第3節 子どもに表れる歌い方の違い

(1) . 目的

歌唱とは、声を使ってリズムや旋律を奏でることである。なお、既存歌を歌う場合に求められることは、楽譜に記された旋律と歌詞を正しい音高で歌う（白川・白川，2017）ことといわれている。

音高とは、音の高さのことである。音高は、英語では Pitch と訳し、各音にはヘルツ (Hz) が設定されている。Figure2-3-1 に示したように、ド4 は 261.626Hz、ミ4 は 329.628Hz、ソ4 は 391.995Hz であり、単位は「Hz」である。音程とは、二つの音高の間隔のことで、英語では Interval と訳す。例えば、Figure2-3-1 に示したように、ドとミの間隔は長3度、ミとソの間は短3度であり、接尾辞は「度」である。歌を歌う際に、譜面に書いてある音とは違う音を歌ってしまった場合、「音高（ピッチ）がずれた」ということになり、「音程がずれた」とならない。



Figure2-3-1. 音高と音程

子どもたちが歌う歌の音高や音程に関する研究は、4、5歳児の2、3人に1人の割合で調子外れになる（村尾, 1995）、5歳児（年長児）では4歳児（年中児）より正確な音高での歌唱が可能になる（伊藤・三村・金岡・林・松本・久原・湯川・池田・吉原・掛・君岡・中山・井上・坪田・山中・東・宮谷・川崎, 2011）、5歳児（年長児）は男子よりも女子のほうが、正確な音高で歌える数が有意に多い（水崎, 2007）ことが明らかになってきている。リズムについては、1歳3ヵ月以後からほぼ原曲のリズム通りに歌われる（伊藤, 1978）ことが報告されている。

しかし、歌詞についての研究は、十分に明らかにされていない（水崎, 2014）。歌は、リズムや旋律のほかに歌詞を伴うことが多い。そのうえ、保育活動中には、歌詞を伴って歌う場合がほとんどである。このため、子どもたちが歌を歌う際に、正確な音高にくわえて、歌詞をどのように歌っているのかを合わせて把握することが重要であると考えられる。そこで、本調査では、保育活動の中における子どもの歌唱の特性を歌詞および音高の二面から明ら

かにすることにした。

(2) . 方法

①. 調査対象者

東京都（1園）、京都府（1園）、兵庫県（3園）の5つの幼稚園に通っている園児268名を調査対象とした。内訳は、4歳（年中）男児57名、4歳（年中）女児54名、5歳（年長）男児76名、5歳（年長）女児81名であった。

②. 調査方法

調査の大まかな流れを Table2-3-1 に示した。

Table2-3- 1. 調査の流れ

1・ 調査場所の設営
2・ 子どもの入室
3・ 子どもへの説明
4・ ICレコーダの装着
5・ 歌う活動の調査
6・ ICレコーダの取り外し
7・ 子どもの退室
8・ 分析

調査設営

調査は、各幼稚園の保育室または遊戯室で、数名のグループに分けて調査を行った。グループごとに入室し歌を歌い、歌を歌い終えたらグループ全員が退室し、次のグループが入室するようにした。

機材は、子どもが調査中のビデオ撮影に意識が向かないように、調査のためのビデオ撮影をする部屋は子どもが入室する前に合計3台のビデオデッキを中央（全体撮影）、右側、左側に設置した。ただし、録画調査中に歩き回ったり後ろを向いたりする子どもがいる場合を

考慮し、3台のほかに、タブレットによる動画撮影をした。

子どもの声のデータを収集するために、子ども一人ひとりの胸に1台ずつICレコーダを装着した。

なお、子ども一人ひとりの歌声を録音して分析をするため、子ども一人ずつの声を明瞭に録音できる人数として、10人までを1グループとした。

使用曲

- ・「さんぽ」(中川季枝子作詞/久石譲作曲)1番のみ
- ・「手をたたきましょう」(小林純一改詞/中田喜直編曲)

本研究では、「さんぽ」を分析対象とした。子どもの緊張をほぐし、ICレコーダの装着した状態や調査の環境に慣れるために、調査の曲「さんぽ」を歌う前に「手をたたきましょう」を歌った。

選曲の基準は、①「子どもの声域範囲」の音 (Figure2-3-2) を概ね使用している (切替・沢島, 1968)、②季節や行事に関係しない、③子どもが日頃使う言葉を使用しており、3語文までとする (淵田, 2015)、④子どもたちにとって馴染みがある (多保田, 2005) の4項目に該当するものとした。



Figure2-3-2. 幼児の声域 (切替・沢島, 1968)

本調査では、保育者が普段から弾いている伴奏に合わせて子どもが歌うことにした。

調査準備

以下の準備を行った。

- ① ビデオを正面、左右、3箇所を設置する。
- ② 子どもが歌う際に立つ位置に、フラフープを置く。

- ③ 子どもの立つ位置（フラフープ）と IC レコーダの番号を一致させるために、立つ位置に 1 から 10 の番号を打つ。

調査中の流れ

子どもの動き

- ① 調査する部屋に入室する。
- ② 歌う場所に立つ。
- ③ 調査者から調査目的と調査方法の説明を聞く。
- ④ IC レコーダを保育者と調査者につけてもらう。
- ⑤ 名前を言う（IC レコーダに録音する）。
- ⑥ 歌う。
- ⑦ 胸につけた IC レコーダを、保育者と調査者に取り外してもらう。
- ⑧ 退室する。

調査者および保育者の動き

- ① 保育者は、子どもを調査する部屋に入室させる。
- ② 保育者は、子どもを歌う場所に誘導する。
- ③ 調査者は、子どもに調査目的と調査方法の説明をする。

「こんにちは。みんなの歌が素敵だと聞いたので、聴かせてもらいに来ました。聴かせてくれるかな？（子どもから同意を得る）

もう 1 つ、お願いがあります。みんなの歌う声がよく聴こえるように、みんなの胸の真ん中にマイク（IC レコーダ）をつけさせてください。いいかな？（子どもから同意を得る）」

- ④ 保育者と調査者は、子どもに IC レコーダを装着し電源を ON にする。
- ⑤ 保育者と調査者は、IC レコーダをつけた子どもに名前を聞きながら、各 IC レコーダに名前を録音する。
- ⑥ 調査者は、伴奏者の保育者に合図を出し、ビデオ録画をする。子どもたちは、前奏や担任の合図で歌唱をする（Figure2-3-3; 2-3-4）。
- ⑦ 歌を歌い終わったら、調査者は、子どもに調査終了であることと、子どもの胸につけた IC レコーダを保育者と調査者が外すことを伝える。
- ⑧ 保育者と調査者は、IC レコーダの電源を OFF にしてから外し、所定の箱の中に IC レ

コーダを置く。

⑨ 保育者は、子どもを調査した部屋から退室させる。



Figure2-3-3. 撮影風景



Figure2-3-4. ICレコーダを胸元につけている様子

(3) . 分析方法

分析は、ICレコーダに録音された子どもが歌った歌詞および音高の正当数を求めた。本調査での歌詞と音高の正当数は、Figure2-3-5、Figure2-3-6に示したように、歌詞数が65、音高の正当数を求める音符数は69とした。歌詞については、単語が聞き取れれば正当とし、本来の歌詞と異なる単語を歌っている場合は不正とし、音高については2分の1音以内（半音）までのずれは正当とし、ソフトウェア（WAVETONE261）も使用し、正当数を判断した。

ソフトウェア（WAVETONE261）を使用して正当数を判断した例を Figure2-3-7、Figure2-

3-8、Figure2-3-9 に示した。各 Figure の桃色で示した点が正当音、白色で示した点と黄色で示した線は子どもが歌った音高である。Figure に記した番号は、Figure2-3-6 に示した各音に対する音符番号である。

Figure2-3-7 は、ピアノを使って旋律を録音した一部分（音符番号 1～21）を示した図で、録音されたピアノ音と正当音は全音一致している。

Figure2-3-8 は、調査に参加した子ども A が歌った一部分（音符番号 1～21）を示した図である。音符番号 1、2、3、4、5、6、7、8、9、12、13、15、16、17、19、20、21 は正当音と一致している。音符番号 10、11、14、18 は、2 分の 1 音以内のずれであった。前述したように 2 分の 1 音以内のずれは正当とみなしたので、子ども A が歌った Figure2-3-8 に示した音高結果は全部正当である。

Figure2-3-9 は、子ども B が歌った一部分（音符番号 1～21）を示した図である。音符番号 1、7 は正当音と一致している。音符番号 8 は 2 分の 1 音までのずれなので正当である。音符番号 2、3、4、5、6、9、10、11、12、13、14、15、16、17、18、19、20、21 は 2 分の 1 音以上のずれであったので不正音となっている。

本調査での歌詞数 さんぽ

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
あ	る	こ	う	あ	る	こ	う	わ	た	し	は	げ	ん	き
16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
く	の	だ	い	す	き	ど	ん	ど	ん	い	こ	う	さ	か
31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45
ち	と	ん	ね	る	く	さ	っ	ぱ	ら	い	っ	ぽ	ん	ば
46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60
で	こ	ぼ	こ	じゃ	り	み	ち	く	も	の	す	く	ぐ	つ
61	62	63	64	65	歌詞数 65									
く	だ	り	み	ち										

本研究では、拗音・促音は0とする(例;「さっ」を1に数える)。あるこの「う」は捨て仮名とする(例;「こ」を1に数える)。

Figure2-3-5. 歌詞の数え方

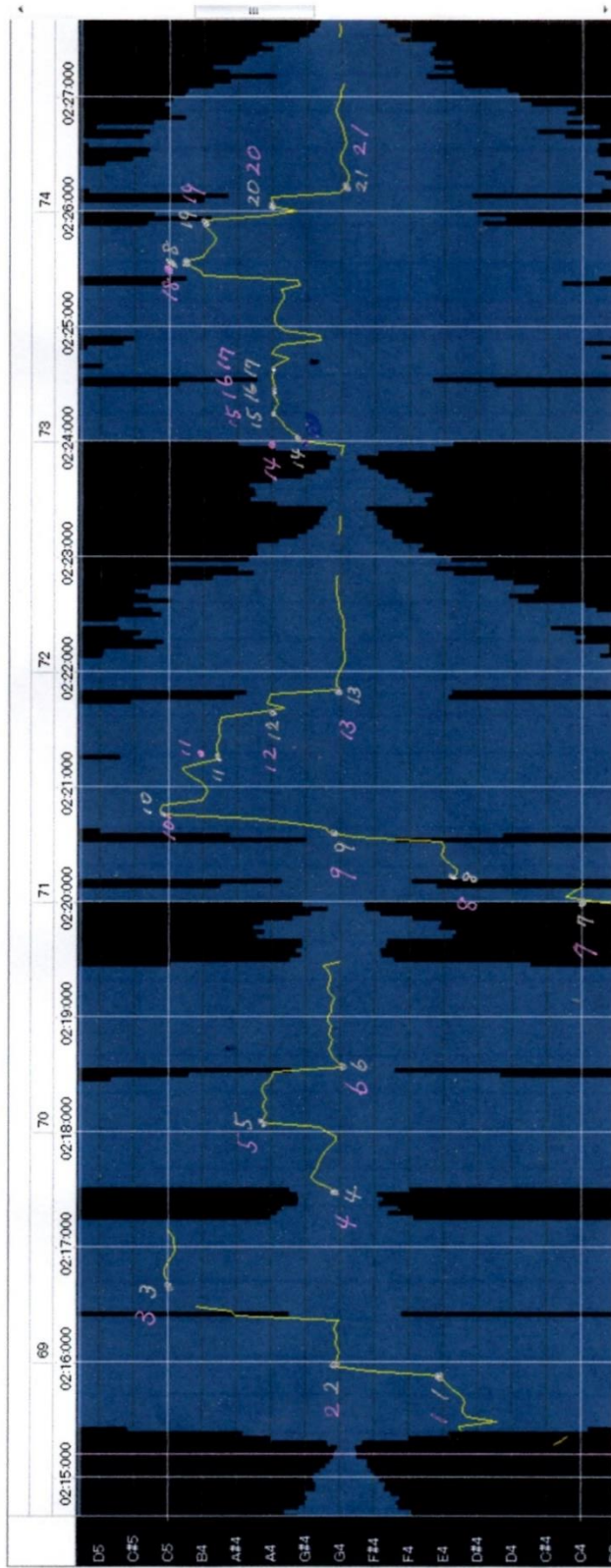
本調査での音符数
さんぽ

作曲 久石譲
作詞 中川季枝子

The image shows a musical score for the song 'さんぽ' (Sampo) by Joe Hisaishi, with lyrics by Akemi Nakagawa. The score is written in 4/4 time and consists of five staves of music. Each staff is numbered to indicate the position of each note, starting from 1 on the first staff and ending at 69 on the fifth staff. The notes are: 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 29, 30, 31, 32, 33, 34, 35, 36, 37, 38, 39, 40, 41, 42, 43, 44, 45, 46, 47, 48, 49, 50, 51, 52, 53, 54, 55, 56, 57, 58, 59, 60, 61, 62, 63, 64, 65, 66, 67, 68, 69.

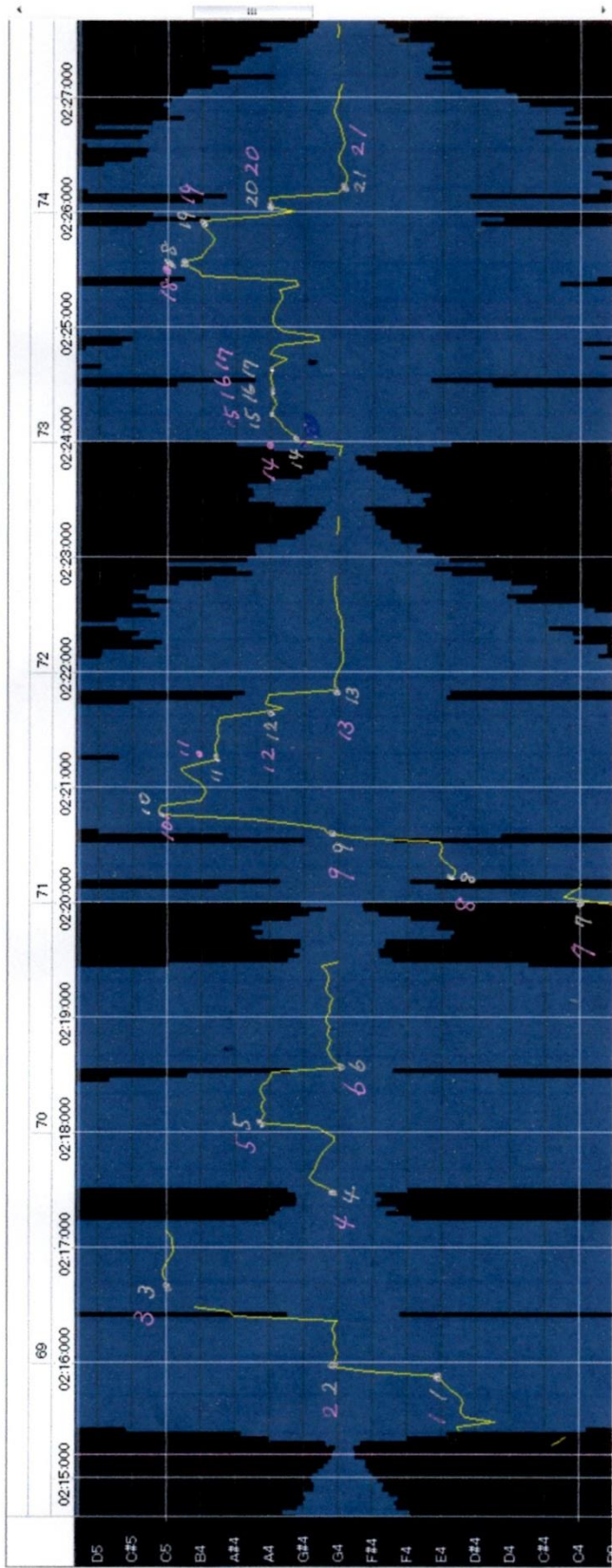
音符数 69 音符

Figure2-3-6. 音符の数え方



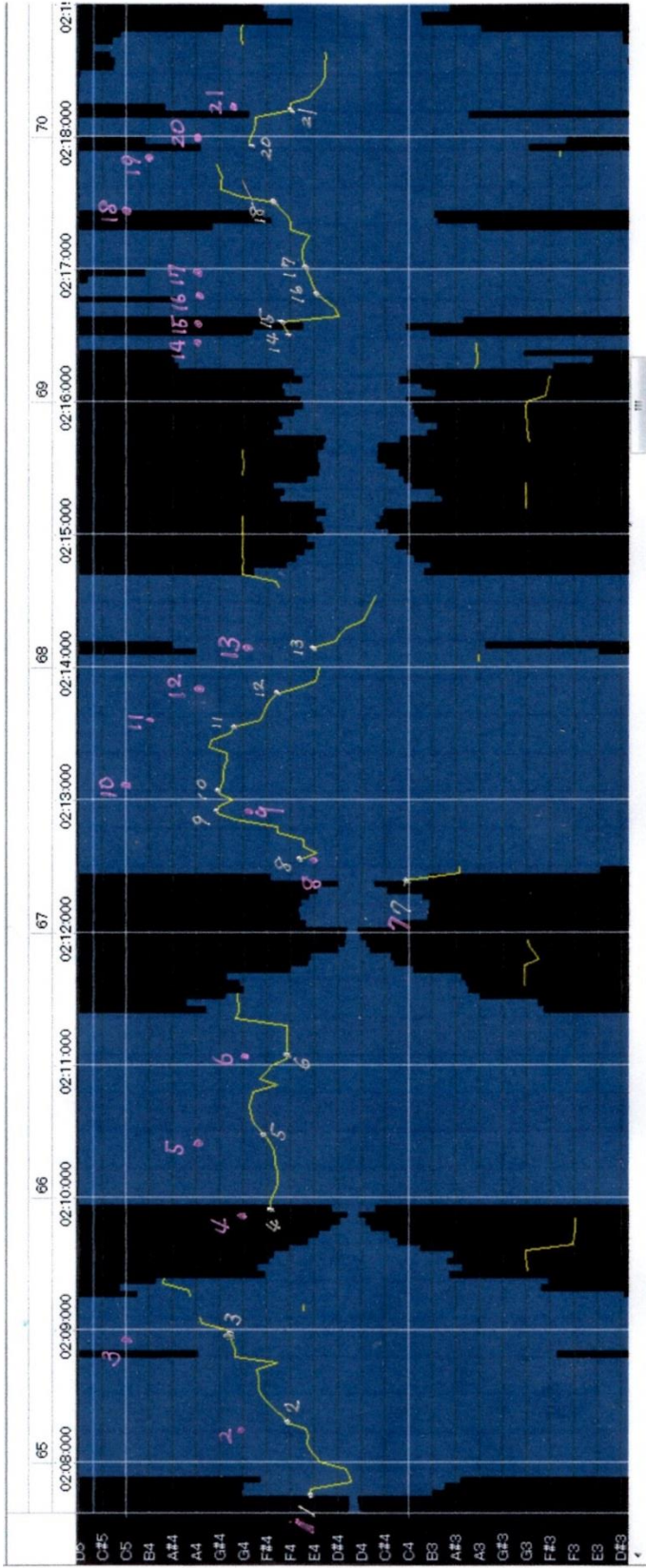
黄色線および白色点はICレコーダが採録した音、桃色点は正当音

Figure2-3-7. 曲「さんぼ」をピアノで演奏した結果



黄色線および白色点はICレコーダが採録した音、桃色点は正当音

Figure2-3-8. 曲「さんぼ」を子どもAが歌った結果



黄色線および白色点はICレコーダが採録した音、桃色点は正当音

Figure2-3-9. 曲「さんば」を子どもBが歌った結果

「倫理的配慮」

筑波大学医学医療系医の倫理委員会の承認を得て行った（承認番号 1245）。

(4) . 結果

歌詞と音高を、4歳児（年中児）と5歳児（年長児）の年齢および性別で比較した。

① 歌詞

平均歌詞正答割合は、4歳（年中）男児 69% ($SD=5.37$)、4歳（年中）女児 89% ($SD=2.41$)、5歳（年長）男児 86% ($SD=3.34$)、5歳（年長）女児 96% ($SD=1.11$) であった。Figure2-3-10 に示したように、4歳（年中）女児と5歳（年長）男児が歌詞全体の8割以上、5歳（年長）女児が9割以上の歌詞を歌えていた。

性別および所属クラスの違いによって歌詞正答数の平均得点に差があるかどうかを検証するために、独立変数を性別と所属クラス、従属変数を歌詞正答数の得点とする対応のない2要因分析を行った。その結果、性別要因の主効果 ($F(1,264)=22.79, p<.001$) および所属クラスの主効果 ($F(1,264)=11.25, p<.005$) はともに有意であったが、統計的に有意な交互作用は認められなかった ($F(1,264)=3.53, n.s.$)。

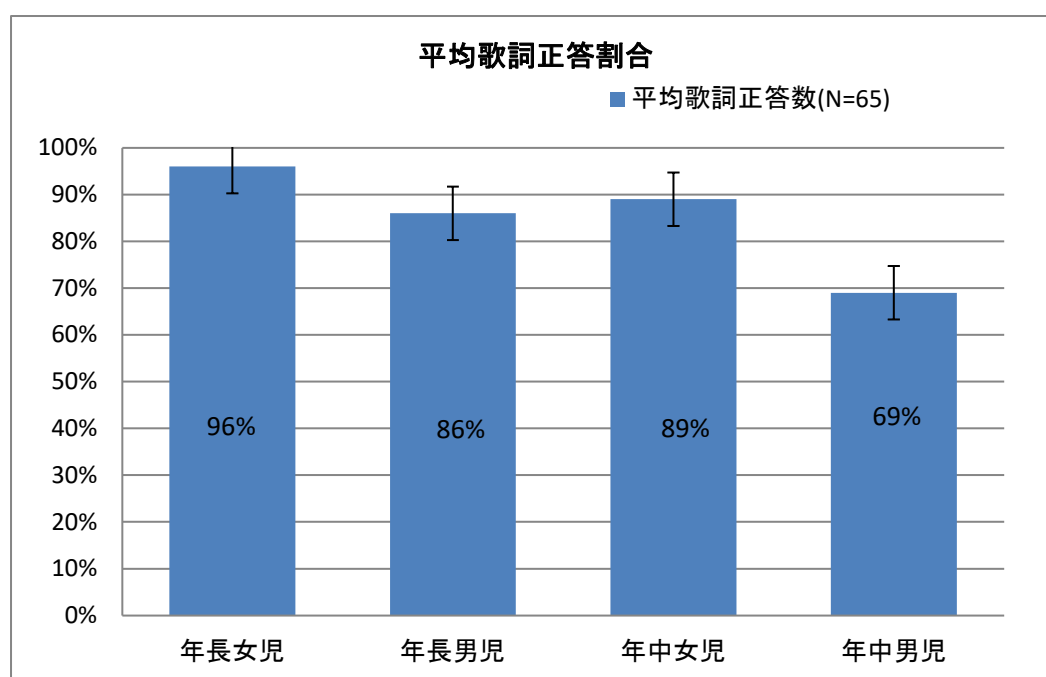


Figure2-3-10. 年齢および性別による平均歌詞正答割合

② 音高

平均音高正当割合は、4歳(年中)男児 22% ($SD=5.90$)、4歳(年中)女児 34% ($SD=3.4$)、5歳(年長)男児 33% ($SD=11.57$)、5歳(年長)女児 62% ($SD=9.00$)であった。Figure2-3-11に示したように、4歳(年中)男児、4歳(年中)女児、5歳(年長)男児は約3割の音高正当数を獲得し、5歳(年長)女児は約6割の音高正当数を獲得していた。また、5歳(年長)男児は、5歳(年長)女児に比べて音高を取ることに難しさや困難さ、歌いづらさを感じている男児が存在していると思われた。性別および所属クラスの違いによって音高正当数の平均得点に差があるかどうかを検証するために、独立変数を性別と所属クラス、従属変数を音高正当数の得点とする対応のない2要因分析を行った。単純主効果の検定の結果、4歳児(年中児)クラスと5歳児(年長児)クラスの両方において性別に有意な差が認められた(前から順に $F(1,264)=5.59, p<.05$; $F(1,264)=38.05, p<.001$)。つまり、4歳児(年中児)クラス、5歳児(年長児)クラスの両方においても、女児のほうが男児よりも平均得点が高いことが明らかになった。一方、男児および女児における所属クラスの単純主効果は、女児における所属クラスの単純主効果が有意で($F(1,264)=23.23, p<.001$)、5歳児(年長児)クラスのほうが、4歳児(年中児)クラスよりも平均得点が高かったが、男児における所属クラスの単純主効果は有意であるとはいえなかった。($F(1,264)=3.38, n.s.$)。

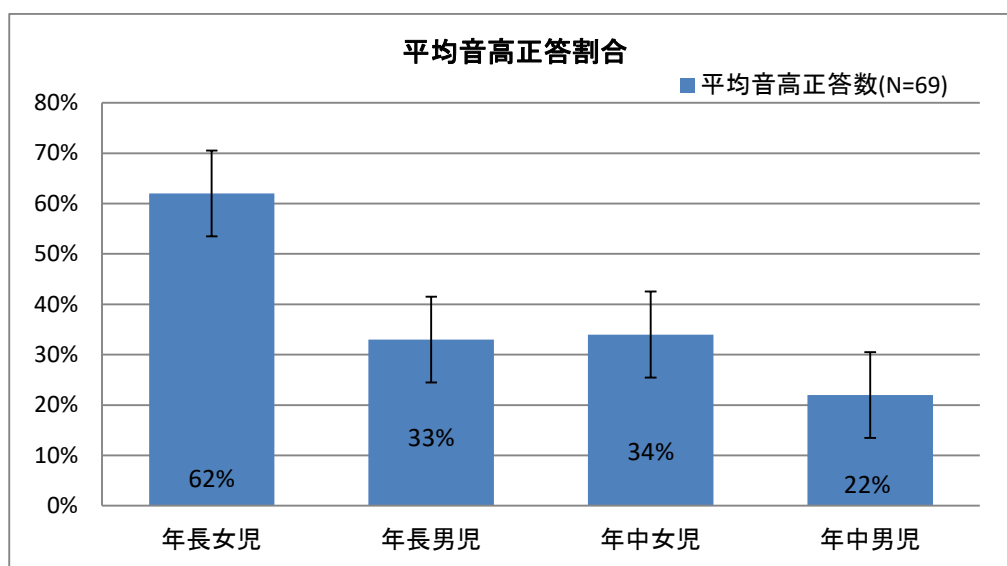


Figure2-3-11. 年齢性別平均音高正当割合

③ 音高と歌詞

音高と歌詞との相関係数は、 $rr=0.358$ ($p<0.01$) であり、低い相関関係しか認められなかった。

本調査での歌詞と音高の正当数は、双方共、高い順から 5 歳（年長） 女児、4 歳（年中） 女児、5 歳（年長） 男児、4 歳（年中） 男児の順位で、5 歳（年中） 児クラス、4 歳（年長） 児クラス共に、男児より、女児の正当数のほうが高かった。くわえて、歌詞と音高双方共、5 歳（年長） 男児より 4 歳（年中） 女児の正当数が高かった。

さらに、本調査から、歌詞を正確に歌える子どもが多いこと、歌詞は歌えていても音高が取れていない子どもや、歌詞が歌えず音高も取れない子どももいることが明らかになった。しかし、歌詞と音高の相関は低い結果であった。

年齢および性別に歌詞正当割合と音高正当割合を、散布図に示した (Figure2-3-12)。図が示すように、男女、性別共に歌詞の正当率に比べて音高の正当率が低いといえる。

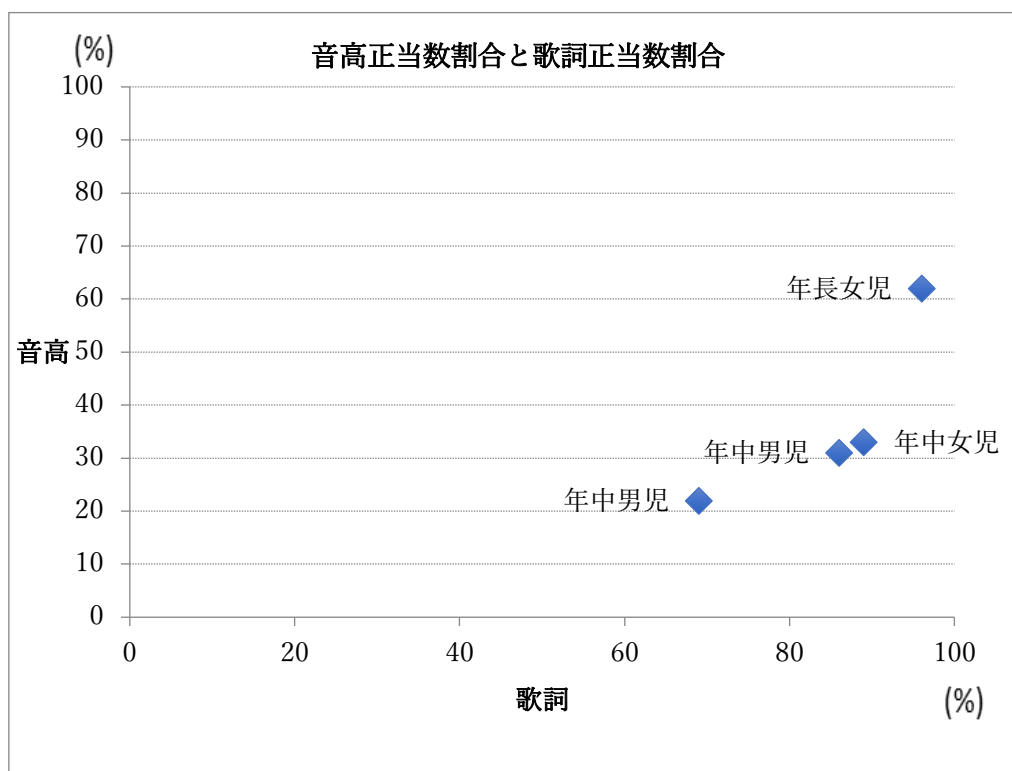


Figure2-3-22. 歌詞正当割合と音高正当割合

(5) . 考察

調査の結果から、歌詞の正当率は、4歳（年中）女兒と5歳（年長）男児が歌詞全体の8割以上、5歳（年長）女兒が9割以上の歌詞正当数を獲得していた。しかし、平均音高正当割合は、4歳（年中）男児、4歳（年中）女兒、5歳（年長）男児は約3割しか音高正当数を獲得していなかった。相関関係は、低い相関しか認められなかった。

歌詞と旋律の研究には、子どもの注意が歌詞に偏り、旋律に気付かなかつたり、歌詞に集中すると旋律を知覚しにくかつたりする子どもがいる（Welch, 2001）、幼児期の歌唱発達の研究に、保育者が歌う歌に対して口を大きくあけて明瞭な発音で歌詞を覚える、口を小さくあけて曖昧な発声で旋律を覚えるとした2つの行動パターンが存在する（淵田, 2019）、歌詞と旋律が同程度に学習されていない場合がある（中田・阿部, 2007）ことが報告されている。つまり、子どもは、歌詞と旋律を別々に覚えていると思われる。さらに、乳児は言葉を発する発達段階として、発話のメロディ的側面に注目し、その特徴を手がかりに記憶し、次いで音素の組み合わせとして語彙の記憶へと移行していく。他方、メロディのパターンには注意を払わなくなる（正高, 2001）という言葉の発達研究がなされている。本調査の結果からも、正高（2001）と同様の結果が得られており、子どもが歌詞を覚えようとする意識が強くなり、それによって旋律に対する意識が弱くなったと考えられる。

第4節 子どもに表れる特性

(1) . 目的

子どもの家庭環境、保育環境、特性が、子どもの歌を歌う行為にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにするための資料として、ここでは子どもの特性や子どもが歌を歌う時の状態を明らかにしたいと考えた。

子どもの特性については、知能や行動を規定する要因として特性が役割を果たしている(柴田, 1988)ことや、幼児期の特性が運動能力に影響を与える(後藤, 2017)ことが示されていることから、特性が歌唱行為に影響を与える可能性が考えられる。

なお、子どもにみられる特性は、家庭内と保育の場では違う(高村, 2019)といわれることから、保育者および保護者に対して子どもの特性についての調査を行い、家庭生活で表れる子どもの特性、保育の場で表れる子どもの特性を明らかにした。

(2) . 調査方法

調査対象者

①保育者

東京都(1園)、京都府(1園)、兵庫県(3園)の計5園の幼稚園に勤務し、歌唱調査を行った子どもの担任をしている保育者19名である。そのうち、担任クラスの内訳は、年中男児57名(21%)、年中女児54名(20%)、年長男児76名(28%)、年長女児81名(30%)であった。

②保護者

東京都(1園)、京都府(1園)、兵庫県(3園)の計5園の幼稚園に子どもを通わせている保護者268名である。なお、子どもは歌唱調査を行った被験者である。また、子どもの内訳は、年中男児57名(21%)、年中女児54名(20%)、年長男児76名(28%)、年長女児81名(30%)であった。

調査時期

①保育者

2018年6月から10月に実施した。

②保護者

2018年6月から10月に実施した。

調査内容

① 保育者

質問紙は、1) 子ども一人ひとりの性格 20項目と、2) 子どもの話し声の大きさ 1項目、3) 保育活動における歌の参加状況 4項目の計 25項目で構成した。なお、子どもの性格に関する質問紙の質問は、TS式幼児・児童性格診断検査を参考に作成した。

② 保護者

質問紙は、1) 子ども一人ひとりの性格 24項目と、2) 子どもの話し声の大きさ 1項目の計 25項目で構成した。なお、子どもの性格に関する質問紙の質問は、TS式幼児・児童性格診断検査を参考に作成した。

調査手続き

① 保育者

第2章3節で歌唱調査を行った子どもに関する自記式による質問紙は、各園の園長から対象者に一斉配布をし、記入後は、回答者が各園に設置した回収ボックスに提出した。

② 保護者

第2章3節で歌唱調査を行った子どもに関する自記式による質問紙は、子どもが通う幼稚園の担任から、連絡帳を用いて、対象者に一斉配布をした。記入後は、連絡帳を用いて回答者から担任に提出した。

倫理的配慮

① 保育者

調査に際し、実施する園の園長に調査内容を説明し、園長より実施の承諾を得た。

回答者には、質問紙と一緒に「調査へのご協力とお願い」を配布し、実施方法や倫理的配慮について説明を行った。

②保護者

調査に際し、実施する園に調査内容を説明し、園長より実施の承諾を得た。

回答者には、質問紙と一緒に「調査へのご協力とお願い」を配布し、実施方法や倫理的配慮について説明を行った。

保育者を対象に行った調査、保護者を対象に行った調査のいずれも、筑波大学医学医療系医の倫理委員会の承認を得て行った（承認番号 1245）。

(3) . 分析方法

選択式（複数回答）で尋ねた、保育者への質問紙および保護者への質問紙の性格に関しては、各回答に対する回答者の割合を算出した。リッカート式で尋ねた、子どもが話す声の大きさ、および、子どもが歌う時の状態は、各回答に対する平均値と標準偏差を算出した。

(4) . 結果

① 子どもの性格

保育者に、担任をしている子ども一人ひとりの性格について、選択式（複数回答）で尋ねた結果を Table2-4-1 に示した。

3 割以上の子どもが、「人の前に出ると緊張している」（42%）、「人の前に出るとひどくはずかしがる」（31%）といった他者を意識しやすいことが示された。また、「静かに座って行う遊びより、身体を動かす遊びを好む」（40%）といった回答を得た。

保護者に、子どもの性格について、選択式（複数回答）で尋ねた結果を Table2-4-2 に示した。

家庭生活に表れる子どもの性格として、5 割以上の子どもが、「甘えることが多い」、「負けず嫌い」であり、3 割以上の子どもが、「静かに座って行う遊びより、身体を動かす遊びを好む」、「人の前に出ると緊張している」、「人の前に出るとひどくはずかしがる」、「わがままである」、「内弁慶で家では元気がいいが、外ではひっこみじあん」、「自分の思い通りにならないと癪癪をおこす」性格であることを示した。

Table2-4-1. 保育の場で表れる子どもの性格

N=268(複数回答)

人の前に出ると緊張している	42%	(113名)
静かに座って行う遊びより、身体を動かす遊びを好む	40%	(108名)
人の前に出るとひどくはずかしがる	31%	(84名)
負けず嫌いである	30%	(80名)
初めて人に会ったり、経験したりすることに不安を示す	23%	(61名)
大人の顔をうかがうようなところがある	23%	(61名)
甘えることが多い	20%	(53名)
自分が中心になりたがる	16%	(42名)
気が散りやすく、一つのことに長続きしない	14%	(37名)
ものごとをひどく気にする	13%	(34名)
何ごとにもあまり熱中するところがない	11%	(30名)
幼稚園・保育園での活動が本人に難しすぎると思われることが、たびたびある	11%	(29名)
失敗をおそれて行動しない	10%	(27名)
自分一人のできることで周りに人にとよりたがる	9%	(24名)
難しいことは、すぐに投げ出す	9%	(24名)
先生などに、なかなかなじまない	8%	(22名)
わがままである	8%	(21名)
変わったことや目立つことをやりたがる	7%	(19名)
自分の思い通りにならないと癪癪をおこす	6%	(15名)
怒るとなかなかきげんがなおらない	5%	(12名)

Table2-4-2. 家庭生活での子どもの性格

	(N=267) (複数回答)	
甘えることが多い	55%	(147名)
負けず嫌いである	52%	(140名)
静かに座って行う遊びより、 身体を動かす遊びを好む	38%	(101名)
人の前に出ると緊張している	37%	(100名)
人の前に出るとひどくはずかしがる	33%	(88名)
わがままである	31%	(84名)
内弁慶で家では元気がいいが、 外ではひっこみじあんだ	30%	(80名)
自分の思い通りにならないと癪癪をおこす	30%	(79名)
難しいことは、すぐに投げ出す	26%	(69名)
大人の顔色をうかがうようなところがある	24%	(65名)
初めて人に会ったり、経験したりすることに 不安を示す	24%	(64名)
自分一人でできることでも 周りの人にたよりたがる	24%	(63名)
気が散りやすく、一つのことに長続きしない	20%	(53名)
自分が中心になりたがる	20%	(53名)
幼稚園・保育園での出来事を、 話すことが少ない	17%	(46名)
幼稚園・保育園に行きたがらないことが 時々ある	17%	(46名)
失敗をおそれて行動しない	16%	(43名)
怒るとなかなかきげんがなおらない	11%	(30名)
変わったことや目立つことをやりたがる	10%	(28名)
ものごとをひどく気にする	10%	(28名)
幼稚園・保育園での活動が本人に難しすぎると 思われることがたびたびある	4%	(11名)
何ごとにもあまり熱中するところがない	3%	(9名)
先生などに、なかなかなじまない	3%	(9名)
幼稚園・保育園生活に、少しも興味が ないように見受ける		0

② おしゃべりをする時の声の大きさ

子ども一人ひとりのおしゃべりをする時の声の大きさを、家庭生活については保護者から、保育場面については保育者から、「非常に当てはまる」(7点)から、「まったく当てはまらない」、(1のリッカート尺度を用いて尋ねた (Figure2-4-1)。平均値と標準偏差は、家庭生活での「おしゃべりする時の声の大きさ」が 4.67(SD=0.98)、保育場面での「おしゃべりする時の声の大きさ」が 4.28(SD=1.37)であった。

③ 保育活動における子どもの歌への関心および参加状況

保育活動において、子どもが歌にどのように参加しているのかについて、リッカート尺度を用いて、保育者に尋ねた (Figure2-4-1)。

各項目の平均値と標準偏差は、「歌詞を覚えることが得意そう」が 4.51(SD=1.44)、「音楽の専門家が指導する音楽活動に積極的に参加する」が 4.39(SD=1.43)、「歌を歌う時に、身振り手振りをつけて歌っている」が 4.06(SD=1.52)の順に高かった。

対象となる子どもが保育活動において、歌を歌う際にどの程度楽しんでいるのかを、最も楽しい活動をしている時の状態を 10 として 10 段階で尋ねた (Figure2-4-2)。その結果、平均値と標準偏差は 6.42(SD=1.71)であった。

	まったく 当てはまらない	非常に 当てはまる	平均値 (SD)
家庭生活 おしゃべりする時の声の大きさ (N= 267)			4.67 (.98)
園生活 おしゃべりする時の大きさ (N= 268)			4.28 (1.37)
歌詞を覚えることが得意そう (N= 265) 音楽の専門家が指導する音楽活動に 積極的に参加する (N= 125) 歌を歌う時に、身振り手振りをつけて 歌っている (N= 267)			4.51 (1.43)
			4.39 (1.43)
			4.06 (1.51)

Figure2-4-1. 子どもの話声、および子どもが歌を歌う状況

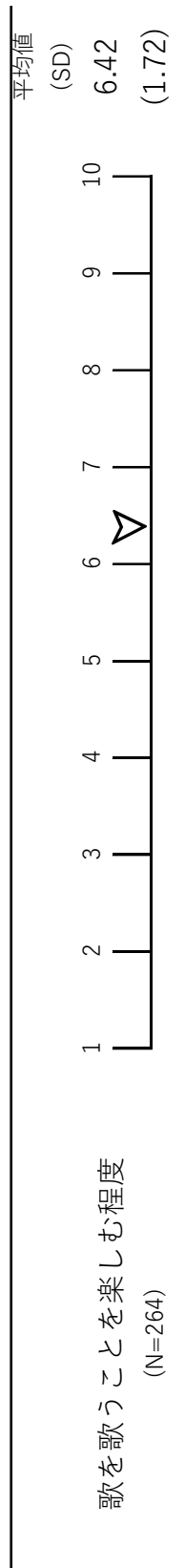


Figure2-4-2. 保育活動で、子どもが歌を歌うことを楽しむ程度

(5) . 考察

家庭での生活で、最も高い割合を示した項目は「甘えることが多い」が 55%で半数以上の保護者が答えていたが、保育の場で「甘えることが多い」は 20%であった。家庭での生活で、次に高い割合を示した項目は「負けず嫌いである」が 52%で、この項目も半数以上の保護者が答えていたことになる。しかし、保育の場では、この項目においても 30% (80 名) であった。このように、保護者が回答した子どもの性格と保育者が回答した子どもの性格の割合は 20%の違いが認められ、子どもに関わる保護者と保育者では、子どもの性格について認識が違っている項目があることが示された。

「人の前に出ると緊張している」は保護者の回答が 38%、保育者の回答が 42%、「静かに座って行う遊びより、身体を動かす遊びを好む」は保護者の回答が 38%、保育者の回答が 40%、「人の前に出るとはずかしがる」は保護者の回答が 33%、保育者の回答が 31%で、これらの項目は、保育の場で表れる子どもの性格と家庭生活に表れる子どもの性格のいずれにおいても 3 割以上の性格であることが明らかとなった。

保育者に 7 段階で尋ねた保育の場での子どもの歌う状態については、「歌詞を覚えることが得意そう」、「音楽の専門家が指導する音楽活動に積極的に参加する」、「歌を歌う時に、身振り手振りをつけて歌っている」の全ての項目に、平均値 4.0 以上を示し、なかでも、「歌詞を覚えることが得意そう」に関しては、平均値が 4.5 以上、SD が 1.43 以下で、保育者は、子どもたちが歌詞を覚えることが得意だと見受けているのではないかと思われる。

第5節. 子どもの歌い方に関する要因分析

(1) . 目的

本節での目的は、子どもの家庭環境、保育環境、特性が、子どもの歌を歌う行為にどのような影響を及ぼしているのかを総合的に明らかにすることである。

子どもの歌唱と家庭環境についての研究では、子どもの歌唱には養育者の存在が大きい (Papousek, 1996) ことや、保護者が子どもと音楽活動と関わる量によって、子どもの音楽関連 (歌う、演奏する、踊る) に対する反応が異なる (Valerio et al., 2011) ことが明らかにされている。

保育の場での音楽環境についての研究では、保育者への質問紙調査から、担任の行為が音楽環境の一部であり、担任の意識の持ち方によって、子どもの音楽への関わり方が異なること (岡林・丹羽・村田, 2010) を明らかにした研究がある。このように、家庭環境、保育の場での環境それぞれについての研究が行われてはいても、家庭環境、保育環境、子ども一人ひとりの特性、保育活動における子どもの歌への関心および参加状況を総合的に検討した研究はなされていない。そこで本章では、子どもの歌唱行為に家庭環境、保育環境、子ども一人ひとりの特性、保育の場での歌唱活動における子どもの歌への関心および参加状況がどのように影響を及ぼしているのかを明らかにしたいと考えた。

(2) . 分析方法

歌唱調査 (第2章3節) を行った子どもたちの音高正当数と歌詞正当数それぞれを目的変数とし、家庭環境の要因 (第2章1節)、保育環境の要因 (第2章2節)、子どもの音楽行為や特性 (第2章4節) を説明変数として単回帰分析を行った。次に、子どもたちの音高正当数と歌詞正当数それぞれを目的変数とし、単回帰分析において有意差が生じた項目を説明変数として重回帰分析を行った。重回帰分析では、全ての説明変数の影響度を大きくすることから、除去する標準偏回帰係数の検出を回避するために強制投入法とした。

(3) . 結果

① 音高

目的変数の寄与率は 0.73、残差の標準偏差は 13.20 であった。

説明変数の有意 ($*p<.05$, $**p<.01$, $***p<.001$) な標準偏回帰係数は、以下の通り (Table2-5-1) であった。Table2-5-1 には音高に関して有意差があった項目を示した。

音高正当数に与える影響の正の要因には、保育の場において「歌の活動時に、子どもたちに発声練習をする時間をもうけている」 ($\beta=2.79***$)、「保育の中で 1 日に 2、3 曲歌う」 ($\beta=1.32***$)、「その場に合わせた即興歌を作って、子どもに歌うことがある」 ($\beta=1.21***$)、「行事に合わせて選曲するようにしている」 ($\beta=-2.55***$)、「歌の指導が苦痛である」 ($\beta=-1.65***$)、「くり返しが 3 番以上ある歌の場合、1 番のみ、あるいは、1、2 番のみだけを歌うことがある」 ($\beta=-1.26***$)、家庭の場において「その場に合わせた歌を子どもに歌う」 ($\beta=0.15$)、子どもの特性において「年齢」 ($1.77***$)、「性別」 ($\beta=0.16*$)、「歌詞を覚えることが得意そう」 ($\beta=-0.19*$)、「子どもは怒るとなかなか機嫌がなおらない」 ($\beta=-0.18*$) が示された。

Table2-5-1. 音高正当数の重回帰分析結果 (N=268)

		β
保育の場	歌の活動時に、子どもたちに、発声練習をする時間をもうけている	2.79 ***
	保育の中で1日に2、3曲歌う	1.32 ***
	その場に合わせた即興歌を作って、子どもに歌うことがある	1.21 ***
	行事に合わせて選曲するようにしている	-2.55 ***
	歌の指導が苦痛である	-1.65 ***
	くり返しが3番以上ある歌の場合、1番のみ、あるいは、 1、2番のみだけを歌うことがある	-1.26 ***
家庭の場	その場に合わせた歌を子どもに歌う	0.15 *
子どもの 特性	年齢	1.77 ***
	性別	0.16 *
	歌詞を覚えることが得意そう	-0.19 *
	子どもは怒るとなかなか機嫌がなおらない	-0.18 *

$R^2 = 0.73$ ***

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

β : 標準回帰係数

N=268

有意な差が見られなかった項目

保護者の回答:きょうだいがいる。音楽教室に通っている、ピアノが家にある。鍵盤ハーモニカが家にある。ハンドベルが家にある。歌や音楽が流れていなくても自分から歌を歌う様子をみかける。指や手を動かす手遊びのある歌や音楽が流れると音楽に合わせて指や手を動かす。振り付けのない歌や音楽が流れた時に音楽に合わせて踊る。子どもと幼児向きのコンサートに行く。子どもとミュージカルを観に行く。訪問した家で楽器の演奏をしている人を見る。ストリートライブで楽器演奏をしている人を見る。自分の思い通りにならないとカンシャクをおこす。内弁慶で家では元気がいいが外ではひっこみじあんである。はじめて人にあったり経験したりすることに不安を示す。美術を好きになってほしい。運動を好きになってほしい。読書を好きになってほしい。科学関連分野を好きになってほしい。家庭で子どもと一緒に歌うあるいは歌いかける人がいる。バックグラウンドミュージックや生演奏を聴きながら活動をすることがある。聞こえてきた音をまねる。その場に合わせた即興歌を作って子どもに歌うことがある。

保育者の回答:負けず嫌いである。むずかしいことは、すぐに投げ出す。歌を歌う活動が好きそうに見える。保育の中で歌を歌う活動を週に2,3日、取り入れている。保育中、1日に2,3曲歌う、弾き歌いは苦手だ。歌の指導を苦痛に感じることもある。子どもは音楽の専門家が指導する。音楽活動に積極的に参加している。

② 歌詞

目的変数の寄与率は、0.22 残差の標準偏差は 14.71 であった。説明変数の有意 ($*p<.05, **p<.01, ***p<.001$) な標準偏回帰係数は、以下の通り (Table2-5-2) であった。Table2-5-2 には歌詞に関して、有意差があった項目を示した。

保育の場において「はじめての曲を子どもに紹介する時に、絵などの視覚物と言葉を使って歌詞について説明をする」($\beta=0.62$)、「保育者は歌の楽譜を見れば、初めて見る歌でもある程度、歌える」($\beta=0.56$)、子どもの特性において「歌詞を覚えることが得意そう」($\beta=0.04$)、「年齢」($\beta=-0.39$)、「人の前にでるとひどくはずかしがる」($\beta=-0.27$)、保護者の願いとして「我が子には、美術を好きになってほしい」($\beta=-0.21$) が示された。

Table 2-5-2. 歌詞正当数の重回帰分析結果 (N=268)

		β
保育の場	はじめての曲を子どもに紹介する時に、絵などの視覚物と言葉を使って 歌詞について説明をする	0.62 ***
	保育者は歌の楽譜を見れば、初めて見る歌でもある程度、歌える	0.56 *
子どもの特性	歌詞を覚えることが得意そう	0.04 *
	年齢	-0.39 **
	人の前にでるとひどくはずかしがる	-0.27 *
保護者の願い	我が子には、美術を好きになってほしい	-0.21 *

R²= 0.22 ***

*p<.05,**p<.01,***p<.001

β :標準回帰係数

N=268

有意な差が見られなかった項目

子どもの特性:性別。

保護者の回答(家庭での様子):子どもは振り付けのある歌や音楽が流れると、身体を動かたり、踊ったりする。家の中で、大人が楽器の演奏をしている。幼稚園・保育園にいきたがらないことが時々ある。幼稚園・保育園での活動が本人にむずかしすぎると思われることが、たびたびある。気が散りやすい。先生などに、なかなかなじまない。一般アニメのエンディング曲を視聴する。一般アニメ(ドラえもんやアンパンマンなど)の挿入曲を視聴する。

保育者の回答(子ども一人ひとりの園での様子):

歌を歌う時に身振り手振りをつけながら歌っている。子どもは、音楽の専門家が指導する音楽活動に積極的に参加している。人の前にでるとひどくはずかしがる。自分一人ですることでも周りの人にとよりたがる。負けず嫌いである。

気が散りやすく、一つのことに長続きしない。おしゃべりする時の声の大きさ。

保育者の回答(歌の指導に関すること):

担当しているクラスの子どもたちの発達段階に合わせて選曲する。保育中に、1日に2、3曲歌う、保育中に、1日に4、5曲歌う

(4) . 考察

本節では、子どもの音高および歌詞の正当数が、保育の場や家庭の場および子どもの特性にどのように関連をしているかについて考察を行う。

① 音高

保育の場に関する要因

歌の活動時に、子どもたちに、発声練習をする時間をもうけている

音高に、正の影響でもっとも高い標準偏回帰係数を示した項目は「歌の活動時に、子どもたちに、発声練習をする時間をもうけている」であった。野沢(2017)は、「かえるの合唱」を利用して、へ長調、ト長調、イ長調と調を替えて指導を行い、正しい音程で歌えるように指導していることを報告している。また、発声練習として子どもが音名を理解できるように「ドミソのうた」(作詞・作曲淡路和子)を歌う(千田, 2017)ことや、ハ長調の和音を聴

いたあとに聴こえた和音を分散和音で歌う（青山・小川・上野, 2017）活動を行っている報告が示されている。くわえて、後藤田（1998）は、ドイツやハンガリーの子どもが比較的正しい音程で歌っているのに対して、日本の子どもが外れた音程で歌う背景には、子どもに対してソルフェージュ指導がドイツやハンガリーでは導入されていることを指摘している。これらのことから、音階を意識した指導を受けた子どもの方が音高の得点が高い結果となったと考えられ、今後、子どもが音高を身につけるためには、ただ歌うだけではなく、音階を意識して歌うように指導することが必要であるといえる。

保育の中で1日に2、3曲歌う


保育の場において1日に歌う曲数については2、3曲が正の影響として示され、歌う曲数が多いと、子どもが各歌の旋律を覚えられない可能性があると考えられる。

澁田（2019）は、言語獲得期である1歳6カ月から3歳の子どもの歌唱発達を調査した結果、歌を歌う場合には、それぞれの歌によって旋律が異なり、例えば、「どんぐり」「ころころ」の歌詞を含んだ歌には Figure2-5-3 に示したような2曲が存在すると述べている。

つまり、歌の場合は、同じ歌詞や単語であっても旋律（メロディ）が異なり、歌ごとに旋律

（メロディ）を覚えなければいけないのである。しかも、幼児は、楽譜をみずに、保育者などからの伝唱によって旋律（メロディ）を覚えるため、歌の曲数が多ければ音高や旋律（メロディ）を覚えるのが困難になる可能性があると考えられる。

《譜例 1》どんぐりころころ（澁田陽子採譜）



《譜例 2》どんぐり（澁田陽子採譜）




Figure2-5-3. 譜例（澁田, 2019）

その場に合わせた即興歌を作 って、子どもに歌うことがある

保育の場では、保育者がその場に合わせた歌を歌ったり、よく知られた童謡の歌詞を替えて歌ったりすることは慣習として行われており（林, 2020）、例えば、天気について話しかけ♪あしたてんきになーれ♪とその場に合わせて歌う、季節や行事に合わせて歌詞を変えて歌う（穴澤, 2020）ということが日常の保育の場では生じている。また、仲野（2010）は

子どもに言葉では伝わりにくいことでも音楽を加えることによって伝わると説明をし、保育の場では言葉だけでは伝わらないことに音楽をくわえて、子どもに伝えることがある。その場に合わせて歌を保育者が歌うことによって、子どもは旋律に触れる機会が得られると思われる。

また、他者の行動を観察しながら、その行動を学んでいくことはモデリングといわれ、人間の重要な学びの方法として位置づけられている。岩立(2007)は、子どもは興味や関心をもつ対象に注意を向け、観察し、同じことをやってみようとするとして述べている。自由にその状況に合わせて歌う保育者を観ることによって子どもにモデリングする行為が起こり、子どもも状況に合わせて自由に歌で表現することにつながると考えられる。

子どもが状況に合わせて自由に歌で表現することについて、言葉が出始める時期(2歳位)から即興性をもった歌が生じる(梅澤,1986)、子どもが心に思っていることを口に出すときに旋律(メロディ)やリズムがつくと歌になる(古賀,武藤,伊集院,1998; 澁田,2014)ことが明らかになっている。保育者が子どもにその場に合わせた即興で歌うことは、旋律(メロディ)を歌詞につけるモデルを子どもたちに示すことになる。それによって、歌を歌うには旋律が大事であることを子どもたちが理解し、子ども自身が即興歌をつくる際に旋律に意識を傾けることになると考えられる。

行事に合わせて選曲するようにしている

行事に合わせた選曲については、保育者への質問紙調査から明らかになったように、保育者の85%が選曲の際に「行事に合わせる」ことを心がけている。行事のような、子どもが歌詞のイメージをもちやすい選曲であっても、子どもにとって歌いやすい音域や音の流れであるとは限らない。

選曲が子どもの声域にあっていない(久保田,2017)、幼児の声域の個人差が大きいことを理解して指導をする(鍛冶・小林・紫竹・宮野,2006)など、子どもの音域に合わせた選曲の必要性を論じる研究は多い。選曲においては、イメージがわかりやすい歌を選曲することも必要であるが、音高によって構成される旋律(メロディ)に対しての検討を含めた選曲することが肝要である。

歌の指導が苦痛である

歌の指導が苦痛な保育者は必要最低限の時間での歌遊び活動や、保育者自身が歌うこと

を楽しめないことが推察される。必要最低限の時間でしか歌遊びを行わないならば子どもが歌に親しむ時間が短くなる。くわえて、上記に示したように、保育者がその状況に合わせて楽しんで歌う様子を子どもが見て、子どもがまねることが重要になる。しかし、保育者が歌うことを楽しめていない状況であれば、子どもたちも楽しいと感じられず、歌う欲求も高まらない可能性がある。

くり返しが3番以上ある歌は、1番のみ、あるいは、1、2番のみだけを歌うことがある

「くり返しが3番以上ある歌は、1番のみ、あるいは、1、2番のみだけを歌うことがある」ことについては負の影響が示された。

歌唱指導の導入において武田（1979）が、歌が長いために子どもが覚えられなかった、保育者が歌を覚えていなかったため子どもが歌えなかったことを報告している。このように、歌詞を子どもが覚えられない、子どもの集中力が続かない、あるいは、保育者自身が歌詞を覚えられないなどの理由から1、2番のみを歌っていることがあることが推測できる。しかし、音高を構成する旋律の把握と記憶には、何度も同じ旋律に触れることに効果があり、3番以上がある歌は割愛せずに歌うほうが音高に関しては良いことが考えられる。子どもが集中力を欠かすことなく、楽しく歌い、かつ正確な音高を身につけることができるようにするためには、視覚的教材を利用するなどの工夫が必要である。

家庭に関する要因

保護者と子どもの関わり：その場に合わせた歌を歌う

家庭の音楽環境については、母親の歌声は、乳児の興奮を抑える（Trehub 2009； Trehub & Gudmundsdottir, 2019）ことや、読み聞かせや歌唱など家庭においての積極的な子育てが健康な子どもの発達を支える（Yamaoka, 2018； 田島, 2018）こと、保育者が保護者を支援する子育て支援においては、養育者と子どもの声や音でやりとりしたりリズムや動きをともに感じたりすることが、養育者と子どもの間の関わりを育むうえで有効である（石川・大沼, 2009）こと、母親に限らず、家族が音楽的な活動を聴いたり、関心をもったり、参加したりするような家庭で育つ子どもに音楽的な子どもがあら表れ（McDonald & Simons, 1989; Hargreaves, 1986）、家庭という場が音楽能力に重大な役割をもっている（林・森, 1984）ことが報告されている。また、家庭の音楽環境が子どもの音高の正確さに影響する

(Persellin, 2006) ことや、歌唱能力が高い子どもの母親は、子どもと一緒に歌う行為は良いことと捉えている (水崎, 2008) ことも研究で示されている。

これらからも、子どもの家庭生活において「その場に合わせた歌を歌う」保護者の存在は、子どもの音高を育む要因となっていることが示唆できる。

子どもの特性に関する要因

年齢

子どもの年齢においては正の要因を示した。子どもの年齢と音高の正確さに関する研究では、年少児、年中児、年長児と年齢が上がるにつれて正確に歌唱するようになる (山根, 2009)、子どもの声域は年少・年中・年長と加齢に伴って拡大する (武田・加藤, 2004) ことが明らかになっている。本調査においても年齢が上がるとともに正当数は高くなる結果を得た。子どもが音楽や歌唱に関する活動を経験する回数が影響していると思われ、選曲の際に子どもの年齢に応じた音域の配慮や歌唱に関する活動経験を増やすことが重要であると考えられる。

しかし、音高の正当数が下がる (Welch, Sergeant & White, 1998)、影響しない (Mang, 2006) ということも報告されており、年齢による音高の正当数の要因に関しては、さらなる調査が必要であると考えられる。

子どもの性別

子どもの性別については、音高および音程歌唱調査から、女兒に有利な性差が明らか (伊藤, 1977; Welch, Sergeant & White, 1996 ; 法岡 1992 ; Mang, 2006) であることや、音域に関して、武田・加藤 (2004) は男児と女児の比較では、女児の声域の方が、男児の音域より高音域に拡大している。

本研究の調査においても、単純主効果の検定の結果、4歳児 (年中児) クラスと5歳児 (年長児) クラスの両方において性別に有意な差が認められており、子どもの性別が音高に影響をしていることが示唆される。

歌詞を覚えることが得意そう

歌詞を覚えることが得意そうであると、音高正当に負の影響であることが示された。子どもたちが歌詞や文章を覚える行為や暗唱について、自分の住んでいる地名のわらべ歌『まるたけえびす』 (現:京都市内) や、早口言葉あるいは言葉遊びとして知られる古典的な囃『寿

限無』を、子どもたちが小気味よく覚えていうようになり、しかも楽しそうに覚えている（大森, 2013；小久保・小川・佐藤, 2018）と述べている。これらから、子どもは、歌詞や言葉を覚える行為や暗唱する行為を好む傾向があることがうかがわれる。

しかしながら、子どもは、歌詞の意味を理解していなくとも歌詞を歌える（Matsuzaki, 2014）ことや、音楽の要素である旋律に対する認識ができず、歌詞への認識に偏る（Welch, 2001）という歌詞に関する研究が報告されている。

一方、保育者による歌唱指導については、保育者が正確に覚えることを重視している（楠瀬, 1966；McDonald & Simons, 1989）ことが示されている。そのうえ、過去の研究には、保育者の「音程や歌詞があいまいで間違いを正すのに時間がかかった」、「正しく覚えてほしいが、言い過ぎると楽しさが失われる」、「1番を確実に覚えてから2番を覚える。覚えたことを沢山褒める」、「歌詞を覚えるために歌詞カード（文字）を利用する」という回答から、保育者が歌詞の正確さを優先させる現状がある（加藤, 2014）ことが明らかにされている。実際に、3歳以上児では、保育室の壁面に歌詞を貼る場合、歌詞のみを貼ることが本研究での質問紙結果から明らかになっている。くわえて、保育の場での状況には、子どもへの歌唱指導で、「てにをは」まで間違えないように歌詞をきちんと覚えることに一生懸命になっている保育者が存在し、子どもに歌詞を覚えさせよう、歌詞を正確に歌わせようとする意識を保育者がもつ傾向があることも否めない。

歌詞と旋律の研究には、子どもは歌詞に集中すると旋律への注意が向けられにくい（Welch, 2001）ことが示されており、歌詞を覚えようとする意欲が音高への意識を減退させていることに繋がっていると思われる。

性格：子どもは怒るとなかなか機嫌がなおらない

気持ちの切り替えがしにくい子どもは、自分の行動に自信がもてない、集団活動に参加しづらさをもつ（竹内・上野・前田・玉村・越野, 2009）報告があがっている。歌唱活動においても、歌う際の自信のなさや、集団活動に参加ができない状況が歌唱体験の機会を減らし、音高の育みの妨げになることが推察される。

② 歌詞

保育の場に関する要因

はじめての曲を子どもに紹介する時に、絵などの視覚物と言葉を使って歌詞について説明

をする

はじめての曲を子どもに紹介する時に、絵などの視覚物と言葉を使って歌詞について説明をする」項目は、歌詞において正の要因であった。音高の考察で述べたように、小学校以後は楽譜を使用しての歌唱指導であるが、未就学児は楽譜を使用せず保育者からの伝唱による歌唱指導が行われ、保育者からの伝唱での記憶が要求されている。保育の場では、聴覚による記憶のほかに視覚教材などを使用する視覚による記憶も必要であること（淵田, 2019）、曲のイメージを引き出すために視覚教材が必要（原・西出, 2019；畑中, 2017）であることが明らかになっていることから、絵などの視覚物を使って歌詞について説明をすることが、歌詞を歌える要因になるものと考えられる。

保育者の演奏技術：弾き歌いは得意だ

弾き歌いが得意については、武田（1979）はピアノの伴奏を正しくきれいに弾けば子どもたちが歌を歌えるようになると説明している。また、紙屋・後藤（2008）は歌う回数を重ねていくたびに、子どもは歌を歌う活動に飽きてしまい、遊びだしたりする傾向があるが、伴奏法を変えることで子どもが集中力を持続させることを示唆している。これらから保育者が弾き歌いを得意とすることが、子どもたちが歌唱活動に対して積極的に参加できる要因となることを推察する。

歌の楽譜を見れば初めて見る歌でもある程度、歌える

歌詞および音高それぞれで保育者の「歌の楽譜を見れば初めて見る歌でもある程度、歌える」ことが正の要因であることについては、楽譜を読める（読譜）ことは、音楽活動を推進し、例えば、知らない曲に遭遇した場合に、楽譜が読めればその曲を理解することができ（畑中, 2009）、自分が担当する子どもの状況に合わせた選曲につながり、子どもの歌詞などの歌唱能力を育む役目となると考えられる。

子どもの特性に関する要因

歌詞を覚えることが得意そう

歌詞を覚えることが得意であれば、歌詞の正当数が高くなることは当然の結果であると考えられる。

年齢

年齢が上がることで負の影響を示した。本歌唱調査での歌詞正当数 65 のうち、年長児の

平均値が 59.36 (SD=15.05)、年中児の平均値が 52.03 (SD=20.50) であった。これらのことから、年齢が上がるにつれて歌詞の正当数が下がるわけではないが、年中児であっても、正当数が高かったことがこのような結果につながったと思われる。

この他に、年長児クラスになると年中児クラスよりも、大抵の単語の理解ができているという理由から歌詞の説明頻度が減少している (武田, 1979) という報告が示されていることから、年中児クラスよりも歌詞に関する取扱いの仕方に手加減をしてしまうことが示唆できる。

人の前にでるとひどくはづかしがる

歌唱行動と性格の先行研究には、小学生に対する研究での相関分析から、低学年グループは自制力・情緒安定性・社会性に関連した変量と音楽能力との間で高度の有意な差が、高学年グループは自己顕示性・自制力・自主性など、個人の性格や家庭環境に関連した変量と音楽能力との間で高度の有意な相関が認められている (林・森, 1984) が、未就学児に対する歌唱行動と性格の研究は、示されていない。

本研究では、歌詞において「人の前にでるとはづかしがる」項目が負の影響として示された。保育者による子どもの歌唱行為の観察では、恥ずかしさや照れといったマイナスの感情が引き起こされる原因には、自分と他を比較して友達を意識して歌うこと (加藤, 2013) や、「より上手く」と思えば思うほど「歌う」ことによって消極的に、あるいは過剰に緊張してしまう (武田・加藤, 2004) ことが報告されている。

保育の場で、子ども一人ひとりの顔や表情まで明確にみえるような立ち位置を指示して歌を歌わせる状況が多くみられるが、その状況が子どもに、恥ずかしさや照れをもたらしている蓋然性が高く、このような性格の子どもに対する立ち位置などの環境を検討することが必要である。

家庭に関する要因

保護者の願い：我が子には、美術を好きになってほしい

美術関連の活動は、紙や物と向き合う活動で声を出す必要がない活動である。歌は声をコントロールする活動であり、声を出す活動経験が重要 (Fuchida, 2017) である。声を出す活動を要求しない美術活動を優先させれば、歌唱活動が劣後となることがあると考えられる。

第3章 総合考察

第1節 本研究のまとめ

本章では、第1節において、目的別に本調査の結果をまとめる。

(1) . 子どもの音楽に関わる家庭環境調査

子どもたちが家庭でどのような音楽環境のもとで生活しているのかを、保護者に対して質問紙調査を行い、明らかにした。

「音楽関連の習い事に通う」、「通った経験がある」子どもは35%程度、家庭生活の中で、「歌や音楽が聞こえても、聞こえなくても歌を歌う」子どもが9割、「手遊びや振り付けのある歌が流れれば指や手を動かしたり身体を動かしたり踊ったりする」、「聴こえてきた音や音楽を声で真似る」子どもが8割以上であった。また、家庭生活での音楽に関する環境について、「子どもに歌を歌って聴かせたり、子どもと一緒に歌ったり踊ったりする家族がいる」、「子どもがテレビやDVDで音楽を視聴する機会がある」が9割前後であった。

このように、家庭生活中で、歌を歌う子ども、子どもに音楽を介して関わる家族、テレビやDVDで音楽を視聴する子どもが9割程度で、子どもたちが音楽に親しめるように保護者が配慮している環境があることが確認された。

しかし、住居からの音漏れに関しては、3割程度の家庭が、「子どもが音楽に合わせて身体を動かす時や歌を歌う時に音漏れを気にする」。その中で1割の家庭は、「歌を歌う時や音楽に合わせて身体を動かす時に、夜遅くに音楽をかけない、歌を歌わない、窓を閉める、マットを敷く、朝早く歌を歌わない」などの対策をしていることが示され、近隣への音に対する迷惑を保護者が配慮し、子どもが音楽に合わせて身体を動かす時や歌を歌う時に、歌うことを制限している、もしくは対策をしていることが示された。

(2) . 子どもの音楽に関わる保育環境調査

保育者を対象として、保育活動において、歌唱指導が具体的にどのように行われているのか、保育者が歌唱指導についてどのように認識しているのか、どのような音楽環境を用意し

ているのかを、3歳未満児担任と3歳以上児担任とに分けて明らかにした。

子どもが歌を歌う際に、「歌詞を覚える」、「旋律（メロディ）を覚える」、「音楽を身体で感じる」について、担任がどの程度重視するのかを、5段階のリッカート尺度を用いて尋ねた結果、3歳未満児担任は、「音楽を身体で感じる」より、「歌詞を覚える」、「旋律を覚える」、を重視することについての点数が低く、一方、3歳以上児担任は、「音楽を身体で感じる」よりも「歌詞を覚える」「旋律（メロディ）を覚える」ことを重視する傾向があることを確認した。そして、「歌詞を覚える」、「旋律（メロディ）を覚える」項目においては、3歳未満児担任と3歳以上児担任に有意差が認められ、3歳以上児担任のほうが、どちらの項目においても多いことが確認された。

さらに、歌の指導において3歳未満児担任と3歳以上児担任とに有意差が認められた項目の中で、3歳未満児担任よりも3歳以上児担任の割合が高い項目には、「保育室の壁面に歌詞や楽譜を貼る」、「歌詞に関係する話題を子どもたちと話す」、「言葉だけを使って歌詞について説明する」であり、3歳以上児担任が、「音楽を身体で感じられるようにする」ことよりも、「歌詞を覚えること」を重視していることが示唆された。

(3) . 子どもに表れる歌い方調査

保育活動時に子ども一人ひとりの歌詞と音高の2面を調査した結果、4歳（年中）女兒と5歳（年長）男児が歌詞全体の8割以上、5歳（年長）女兒が9割以上の歌詞を歌っていた。一方、音高に関しては、平均音高正当割合が、4歳（年中）男児が約2割、4歳（年中）女兒と5歳（年長）男児が約3割であり、9割以上の歌詞を覚えていた5歳（年長）女兒ですら、音高においては、約6割の音高正当数の獲得に留まっていた。

本調査から、子どもは、歌詞と音高を正確に歌える子ども、歌詞を正確に歌えても音高をはずして歌う子ども、歌詞も音高も正確に歌わない、あるいは、歌えない子どもの存在を確認した。

(4) . 子どもの特性調査

自分の子どもの特性について保護者に質問紙調査を通して尋ねた結果と、その子どもの保育の場で表れる特性について、保育者に質問紙調査を通して尋ねた結果は、どちらも3割以上の子どもが、「人の前に出ると緊張している」、「人の前にでるとはずかしがる」特性で

あった。

家庭内と保育の場で表れる子どもの特性が違う（高村, 2019）ことが明らかになっているように、本調査においてもその傾向は認められ、例えば、家庭では「甘えることが多い」と答えた保護者が 5 割に対し、保育の場では 2 割の子どもであった。しかし、「人の前に出ると緊張している」、「人の前に出るとはずかしがる」という項目については、保護者と保育者との回答にほとんど差がなく、どのような場においても、「人の前に出ると緊張している」、「人の前に出るとはずかしがる」子どもが、3 割もいることが明らかになった。

(5) . 子どもの歌い方に関する要因分析

子どもの歌詞および音高の得点に、保育活動や家庭生活での歌唱に関わる状況、子どもの特性がどのように関連しているのかを明らかにした。

音高正当数に対する影響は、「歌の活動時に、子どもたちに発声練習をする時間をもうけている」、「保育の中で 1 日に 2、3 曲歌う」、「その場にあわせた即興歌を作って、子どもに歌うことがある」、「行事にあわせて選曲するようにしている」、「歌の指導が苦痛である」、「くり返しが 3 番以上ある歌の場合、1 番のみ、あるいは、1、2 番のみだけを歌うことがある」、家庭の場において「その場にあわせた歌を子どもに歌う」、子どもの特性において「年中児・年長児」、「性別」、「子どもは歌詞を覚えることが得意そう」、「子どもは怒るとなかなか機嫌がなおらない」が示された。

歌詞に対する影響は、「絵などの視覚物と言葉を使って歌詞について説明をする」、「(保育者は) 歌の楽譜を見れば、初めて見る歌でもある程度、歌える」、「(子どもは) 歌詞を覚えることが得意そう」、「子どもの年齢」、「人の前にでるとひどくはずかしがる」、「我が子には、美術を好きになってほしい」であった。

なお、音高と歌詞をそれぞれに行った重回帰分析において、音高と歌詞の両方に示された要因の項目として「歌詞を覚えることが得意そう」および「年齢」が挙げられた。「歌詞を覚えることが得意そう」に関しては、音高が ($\beta=-0.19$) 負の要因を示し、歌詞が ($\beta=0.04$) 正の要因を示した。また、「年齢」に関しては、音高が ($\beta=1.77$) 正の要因を示し、歌詞が ($\beta=-0.39$) 負の要因を示した (Table. 3-1)。

Table. 3-1. 音高と歌詞との要因の違い

	音高		歌詞	
	β		β	
保育の場	歌の活動時に、子どもたちに、 発声練習をする時間を もうけている	2.79 ***	はじめての曲を子どもに紹介 する時に、絵などの視覚物と 言葉を使って歌詞について説明を する	0.62 ***
	保育の中で1日に2、3曲歌う	1.32 ***	保育者は歌の楽譜を見れば、 初めて見る歌でもある程度、 歌える	0.56 *
	その場にあわせた即興歌を 作って、子どもに歌うことがある	1.21 ***		
	行事にあわせて選曲するように している	-2.55 ***		
	歌の指導が苦痛である	-1.65 ***		
	くり返しが3番以上ある歌の 場合、1番のみあるいは、1、2番 のみだけを歌うことがある	-1.26 ***		
家庭の場	その場にあわせた歌を子どもに歌う	0.15 *	〈保護者の願い〉 我が子には、美術を好きに なってほしい	-0.21 *
子どもの特性	年齢	1.77 ***	歌詞を覚えることが得意そう	0.04 *
	性別	0.16 *	年齢	-0.39 **
	歌詞を覚えることが得意そう	-0.19 *	人の前にでるとひどくはずかしがる	-0.27 *
	子どもは怒るとなかなか機嫌が なおらない	-0.18 *		

R²= 0.73 ***

*p<.05,**p<.01,***p<.001,

 β :標準回帰係数

N=268

R²= 0.22 ***

*p<.05,**p<.01,***p<.001,

 β :標準回帰係数

N=268

第2節 総合考察

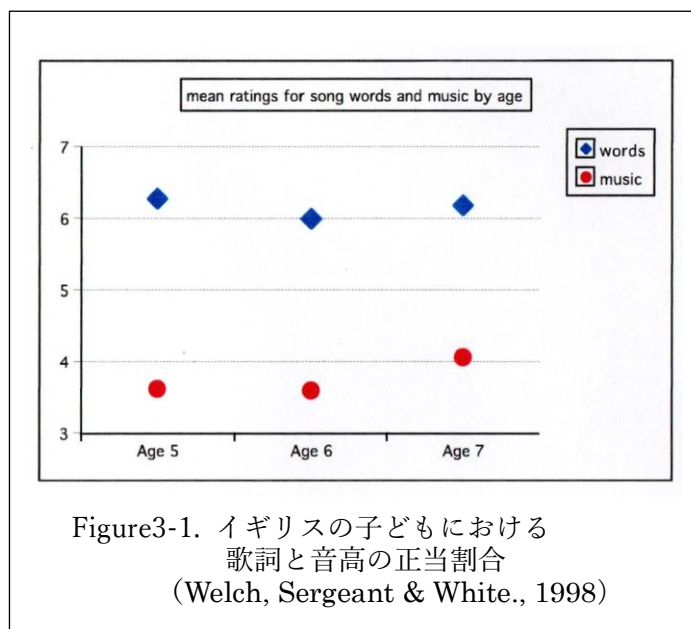
保育活動の中で、子どもが歌を歌う要因を明らかにするために、子どもが歌った歌詞と音高の正当数、調査をした子どもの特性、保護者に対して家庭での歌に関わる子どもの行為や、家庭の音楽環境、保育者に対して歌唱指導の方法について調査を行った。本章ではこれらの

調査結果から、子どもが友達と一斉に歌唱行為に関わる要因について考察する。

歌唱調査から、男女、性別共に歌詞の正当率に比べて音高の正当率が低く、音高と歌詞との相関係数は $rr=0.36(p<0.01)$ であり、低い相関関係しか認められなかった。Figure3-1

に示した図は、イギリスで Welch, Sergeant & White (1998) が 5 歳児から 7 歳児に対して歌唱調査を行い、歌詞と旋律について 1 点から 7 点満点で音楽の専門家が評価を行った結果である。

この調査の結果も、旋律よりも歌詞に偏っており、子どもは歌詞が歌えていても旋律を構成する音高の正当数は低い傾向があることが示唆できる。



本研究での子どもの歌唱に関して音高と歌詞にそれぞれに重回帰分析を行った結果、音高と歌詞の両方に影響を受けた項目として「歌詞を覚えることが得意そう」が示された。しかも、音高においては負の要因を示し ($\beta=-0.19$)、歌詞においては正の要因を示した ($\beta=0.04$) のである。

第 2 章で述べたように、子どもは歌詞に集中すると旋律への注意が向けられにくい (Welch, 2001) という報告からも、子ども自身が歌詞を覚えるのが得意であるほかに、覚えさせようとする指導によって、子どもの意識が歌詞に向きすぎるとともに、旋律や旋律を構成する音高への意識が向きにくくなり、結果、音高の正当数に負の影響を与えられられる。

歌は声を使って奏でる音楽であり、音楽の要素は旋律 (メロディ)、律動 (リズム)、和声 (ハーモニ) である。歌詞に意識が向き、旋律 (メロディ) を構成する音高をおざなりにしてしまえば、それは、音楽ではない。したがって、歌詞よりも音高や旋律に重きを置くことが音楽として大切なことである。

旋律を構成する子どもの音高を育むには、発声を通して子どもの意識が音階に向くようにすることや、1曲に時間をかけて指導できるよう、1日の保育において子どもが歌う曲数を2、3曲にとどめることや、子どもが旋律を記憶できるように繰り返しが何度もある歌ならば、繰り返しを省略せずに歌うようにする。繰り返しがあると子どもが飽きてしまったり、保育者が歌詞を覚えられなかったりするならば、歌の絵本やパネルシアターなどの視覚的教材の利用は有効性があると考えられる。

また、歌詞がわからない箇所は、ラララやハミングで歌えばよいことを、子どもに知らせることも大切である。5歳児の子どもに歌詞をつけて歌う場合と、歌詞をつけずにハミングで歌う場合とを比較をしたところ、ハミングで歌う場合の方が旋律を正確に歌う(Levinowitz, 1989)ことが明らかになっており、歌詞をつけて歌うほかに、ハミングやラララで歌ったりして、旋律に子どもの意識が向き、旋律を歌えることが重要であることに気付けるようにする。

選曲については、昨今、行事や季節を取り上げる傾向が高いが、子どもの音域に適しているのかの確認をし、音域に適していない曲を使用する場合には子どもの音域に適するように移調をすることは必須である。

後藤田(1998)は、歌うだけの歌唱活動の繰り返しはどなり声を生む可能性があり、身体遊びや手遊びを伴った、子どもの音域に適した遊び歌の導入を提唱している。遊び歌には、例えば、ロンドン橋がおちる(イギリス民謡)、なべなべそこぬけ(わらべうた)のように短い曲であるがいくらかでも子どもが楽しめる遊び歌などがあり、保育者の歌唱に対する苦痛を和らげることもできると推察できる。このような、曲の長さが短くて繰り返し歌える歌や保育者が歌の指導が苦痛にならない、子どもたちが何度でもやりたいと思える歌遊びを伴った活動が音高を育むための課題と思われる。また、この遊び歌が、音階を体得する発声練習にもなると思われる。

さらに、家庭生活と保育の場どちらにおいても、子どもと関わる大人が、子どもにその場にあわせた歌を歌い、子どもの周りで歌が流れることが子どもの音高を育む環境であると考えられる。

第3節 研究の限界と今後の課題

(1) . 研究の限界

本研究の結果から、子どもに表れる歌い方と子どもの歌唱に影響を及ぼす要因を明らかにすることができた。本節では、研究において指摘されるべき問題点について述べる。

第一の限界は、第2章で行った調査の質問紙回答者と歌唱調査対象者は、東京都、京都府、兵庫県の5つの幼稚園に通っている268名の子どもと保護者であり、調査対象者の地域と幼稚園が限られているため、一般化するうえでは解釈を慎重にする必要がある。

第二の限界は、第2章での子どもの音楽に関わる家庭環境調査、子どもに表れる歌い方調査（音高と歌詞の正当数調査）、子どもの特性調査の調査は記名式の調査としたため、保護者の承諾を得なければならなかった。歌を苦手や不得手とする子どもをもつ保護者から、調査の協力を得ることが難しかった。保護者から調査に承諾を得た子どもの多くは、歌を歌うことが不得手ではない子どもであり、歌を不得手とする子どもが除外されていることが予測される。このことから、今回の調査結果を一般化するには慎重であるべきである。

第三の限界は、子どもに表れる歌い方調査（音高と歌詞の正当数調査）の調査は、日常の保育の活動での一斉歌唱の様子録画と録音調査を試みたものの、調査を行う部屋に撮影用ビデオ機材の設置し、子ども一人ひとりの胸元にICレコーダを装着し、立ち位置の指示を行ったため、子どもたちが平常心を保てず、歌い方が日頃とは異なる、例えば、興奮していつも以上に音高がはずれたり、歌詞を忘れた子どもがいたことが予測されることである。

第四の限界は、子どもに表れる歌い方調査（音高と歌詞の正当数調査）の調査の選曲についてである。「子どもの声域に合っている」、「子どもたちにとって馴染みがある」などを考慮したうえで、「さんぽ（中川季枝子作詞/久石譲作曲）」を選曲にしたものの、「さんぽ」の歌を好みとしない子どもが歌えなかったあるいは歌わなかった可能性を否定できないことである。

(2) . 今後の課題

今後の課題を三つ挙げる。一つは、本研究では、パフォーマンスを図る客観的指標を見出すことができず、それらを除外をしたことである。

子どもに表れる歌い方調査（音高と歌詞の正当数調査）で行ったように、子どもたちの歌

った結果を記した用紙（Figure3-2.）を担任に配布したところ、その用紙を見た担任から、「〇〇ちゃんは上手に歌えていると思っていたら、こんなに歌えていなかった」「〇〇ちゃんは歌っていないと思っていたら、ちゃんと歌えている」との声が多数挙がった。担任が子どもたちの歌う際のパフォーマンスから予想する歌詞や音高の正当数と、実際に子どもが歌った歌詞や音高の正当数に齟齬が生じているからだという。



Figure3-2. 担任への歌唱調査結果配布用紙

このようなことから、子どもが歌を歌う際のパフォーマンスは、子どもが歌を歌う要因を検討する重要なものであることは否めない。今後、客観的な指標で測定する方法を検討し、調査と分析を行い、保育者の子どもの歌唱に対する評価に関して考察をしていきたい。

第二の課題は、歌唱指導方法の開発である。本研究から、歌詞を正確に歌えても音高をはずして歌う子ども、歌詞も音高も正確に歌わない子どもの存在が認められた。子どもは、歌詞と旋律を別々に覚える傾向があることはすでに明らかにされているにも関わらず、本研究から、3歳以上児担任は、子どもが歌詞を覚えられるように、保育室の壁面に歌詞のみを

貼るといった、歌詞に関する指導に傾いていることが示された。くわえて、3歳未満児担任に比べ、3歳以上児担任は、「歌の指導が苦痛と感じる」傾向があることが示唆され、今後、旋律に関する指導方法や子どもが緊張を要しない歌唱活動、担任が苦痛をもたない歌唱指導方法を考えていきたい。

最後に、本研究では、保育活動の中で子どもが歌を歌う要因を明らかにしてきたが、幼児期の歌唱指導の開発には、幼児期、学童期、青年期、成人期、高齢期という長い期間での歌を歌う要因や歌唱行動を概観することも必要と考えられる。今後、幼児期の歌唱行動が小学校以降にどう変化するのかを縦断的に調査をしていきたい。

引用文献

- 秋山治子 (2012) . 今, 都内の幼稚園・保育園 (所) でどのような歌が歌われているか-アンケートの集計と考察-, 白梅学園・短期大学教育・福祉研究センター研究年報, 17, 40-46.
- 穴澤彩佳 (2020) . 保育現場における子どもの歌の選曲基準に関する-考察子どもの声域に着目して-, 國學院大學北海道短期大学部紀要, 37, 83-100.
- 青山雅哉・小川純子・上野稲子 (2012) . 幼児の音楽的な発達をうながす音楽活動プログラムの開発 I - 奈良文化女子短期大学付属幼稚園での音楽活動をとおして-, 奈良文化女子短期大学紀要, 43, 1-10.
- 荒金英里子・川出富貴子 (2009) . 音を聴くこと、歌を歌うことによるリラクセーション作用, 川崎医療福祉学会誌, 19 (1) , 105-111.
- 荒木紫乃 (1991) . 園生活と音楽, 大畑祥子編著, 保育内容音楽表現, 建帛社, 13-18.
- Bergeson, T. R., & Trehub, S. E. (1999) . Mothers' Singing to Infants and Preschool Children, *Infant Behavior & Development*, 22 (1) , 51-64.
- Dean, B. (2015) . A hidden world of song: Exploring the everyday singing lives of three and four year-old children at home, *The XXth National Conference of the Australian Society of Music Education*, 30th September-2 October 2015 in Adelaide, Australia.
- 湊田陽子 (2009) . 保育園生活での言語獲得期における乳児の音楽的発達, 神戸大学大学院人間発達環境学研究科修士論文 (未公刊) , 25.
- 湊田陽子 (2014) . 保育園生活をおくる T 児の歌唱発達 - 歌詞のついた歌を歌い始める時期に焦点をあてて-, 大阪キリスト教短期大学紀要, 54, 197-207.
- 湊田陽子 (2015) . 歌唱教材研究・乳幼児にとって歌いやすい歌-乳幼児の歌唱発達を考慮した歌-, 姫路日ノ本短期大学紀要, 37, 7-18.
- 湊田陽子 (2015) . 2 歳児がつぶやき歌を歌う時 -言葉と歌の関係に焦点をあてて-, 大阪キリスト教短期大学紀要, 55, 96-106.
- 湊田陽子 (2016) . 2 歳児が集団で歌を歌う時の歌唱特徴-毎食前に歌う歌「食前のお祈り」からの考察-, 姫路日ノ本短期大学紀要, 38, 1-6.

- Fuchida, Y. (2017) . Singing Development of One Infant during Time Spend at a Nursery School -The Research on How an Infant Starts Uttering before Learning to Sing-, *The Asian Journal of Child Care*, 8, 73-84.
- 淵田陽子 (2019) . 保育園生活をおくる A 児の音楽表現発達-1 歳 6 ヶ月から 2 歳 6 ヶ月の歌唱発達に焦点をあてて-, 姫路日ノ本短期大学紀要, 41, 1-11.
- 藤田桂子 (2013) . 保育者養成のための歌唱指導-歌唱に関する学生アンケートの結果と考察-, 名古屋女子大学紀要, 59, 227-239.
- 後藤千穂・春日晃章 (2017) . 幼児期における体力・運動能力と非認知機能特性の関連性格特性主要 5 要因との複合的な関連, 日本体育学会大会予稿集, 68, 168.
- 後藤田純生 (1998) . 幼児対象の歌唱指導法と歌唱教材選択の再検討美しい声と正確な音程の獲得を目指しての研究その 1, 日本保育学会大会研究論文集, 51, 42-43.
- Gudmundsdottir, H. G. (2020) . Revisiting singing proficiency in three-year-olds, *Psychology of Music*, 48, 1-14.
- 羽根田真弓 (2003) . 質問紙調査の分析に見る子どもの歌唱行動, 鳥取短期大学研究紀要, 48, 59-65.
- 原友美・西出悦子 (2019) . 保育者養成校における歌唱教材の内容とその指導方法-幼稚園今日いう実習からみた音楽系授業の必要性-, 瀬木学園紀要, 14, 45-54.
- Hargreaves, D. J. (1986) . Musical development in the schoolchild, *The Developmental psychology of music*, Cambridge University Press, 83-104.
- 畑中浩美 (2009) . 読譜指導は必要か, 音楽教育実践ジャーナル, 7 (1) , 33-41.
- 畑中雅英 (2017) . 幼児の歌唱指導に関する-考察 II-, 和歌山信愛女子短期大学信愛紀要, 57,41-45.
- 林智草 (2021) . 子どもの歌と音階の関わり 6 月の歌を中心として, www.kantogakuen.ac.jp/junir/.../bulletin_572541.pdf, 25-41. (2021.03.15)
- 林祐次・森和 (1984) . 音楽教育への多元的アプローチ (第一報) -音楽能力と児童生徒の性格特性・家庭環境要因との相関について-, 筑波大学学校教育部紀要, 6, 135-153.
- Heiner, G. (2006) . The Development of Musical Abilities, In Colwell. R (ed.) , MENC

Handbook of Musical Cognition and Development, Oxford University Press, 124-164.

久石 譲 (2011) . さんぽ, ポケットいっぱいのうた, 鈴木恵津子・富田英也編著, 教育芸術社, 86-87.

保育所保育指針解説 (2018) . 保育の計画及び評価, 厚生労働省編, フレーベル館, 38-59.

細田淳子 (1988) . 音楽表現の原点としてのつぶやき歌, 保育学研究, 36 (1) , 12-19.

細田淳子 (2001) . ことばの獲得初期における音楽的表現-子どもがうたい始めるとき- 東京家政大学研究紀要, 41(1), 107-113.

細田淳子 (2002) . ことばの獲得期における音楽的表現-身体で感じるリズム-, 東京家政大学研究紀要, 42, 133-139.

細田淳子 (2003) . 乳幼児は歌をどのように歌いはじめるか-音楽的刺激に対する身体反応-, 東京家政大学研究紀要, 43, 79-84.

石川眞佐江・大沼寛子 (2009) . 乳児期における表現の育ちを支える音楽教育-保育及び子育て支援における試みの検討-, 日本音楽教育学会編, 音楽教育学の未来, 音楽之友社, 168-179.

伊藤勝志 (1977) . 幼児の声域に関する研究, 北海道教育大学紀要第一部C教育科学編, 27 (2) , 43-52.

伊藤勝志 (1978) . 幼児初期の歌唱行動について, 北海道教育大学紀要, 28 (2) , 157-170.

伊藤勝志・小林恵理子・木村かおり (2002) . 幼稚園児に対する歌唱指導の試みII, 北海道教育大学教育実践総合センター紀要, 3, 17-25.

伊藤真・三村真弓・金岡美幸・林よし恵・松本信吾・久原有貴・湯川慶子・池田明子・吉原智恵美・掛志穂・君岡智央・中山美充子・井上由子・坪田志保・山中覚美・東加奈子・宮谷智子・川崎智浦 (2011) . 幼児の音楽的能力の育成に関する基礎的研究(1)-斉歌唱活動時における幼児の歌声に着目して-, 広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要, 39, 105-110.

岩立京子 (2007) . まねる, 事例で学ぶ保育内容<領域>表現, 武藤隆監修, 萌文書林, 111-115.

加藤明代 (2013) . 保育における歌唱表現を考える-保育者の記述から見えてくるもの, 常葉

- 大学短期大学部紀要, 44, 95-103.
- 加藤明代 (2014) . 保育における歌唱表現を考える(2)-歌唱活動における問題、その改善を目指して-, 常葉大学短期大学部紀要, 45, 151-158.
- 加藤明代・古川哲也・角藤智津子 (2015) . 歌唱活動で育まれるもの、保育者の願い, 常葉大学短期大学部紀要, 46, 119-128.
- 加藤明代・武田道子 (2007) . 乳・幼児の歌唱能力に関する考察一考察III-音程の分析を通して(2)-, 常葉学園短期大学紀要, 38, 81-91.
- 鍛冶礼子・小林直実・紫竹英恵・宮野モモ子 (2006) . 幼児への歌唱指導についての一考察-自分から歌う時の声域-, 千葉大学教育学部紀要, 54, 63-68.
- 梶川祥世・正高信男 (2000) . 乳児における歌に含まれた語彙パターンの短期保持, 認知科学, 7, 131-138.
- 紙屋信義・後藤みゆき (2008) . ピアノによる子どもの歌伴奏の効果-アレンジによる伴奏法を考える-, 東京未来大学紀要, 1, 67-75.
- 桂近乎 (1953) . 音楽の三要素, 教養の音楽, 音楽之友社, 91-96.
- 切替一郎・沢島政行 (1969) . 声の発達, -ことばの誕生 言葉の誕生うぶ声から5歳まで-, 日本放送出版協会, 50-59.
- 古賀松香・武藤隆・伊集院理子 (1998) . 幼稚園児における自発的な'歌'とその出現場面との関連, 保育学研究, 36 (1) , 20-27.
- 小久保路子・小川かをり・佐藤隆子 (2018) . 「幼児教育におけるリズムの重要性についての一考察」-遊びにおけるリズムの役割から-, 東京家政大学教員養成教育推進室, 年報5 (1) , 197-206.
- 久保田和子 (2017) . 幼児の音楽活動に必要な指導者の能力-現場での歌唱活動についての聞き取り調査をもとに-, 新島学園短期大学子ども学研究集, 1, 37-49.
- 楠瀬敏則 (1966) . 階名模唱と暗唱を徹底的に, 教育音楽 21, (1) , 音楽之友社, 30-31.
- 栗原嘉名芽 (1952) . 音楽と音響, 音楽教育講座 (1) , 諸井三郎監修, 河出出版, 27.
- 黒瀬久子 (1993) . 幼児の音楽能力に関する統計的研究III-音楽能力に及ぼす家庭環境などの影響-, 下関女子短期大学紀要, 10-11, 87-129.

- Levinowitz, M. L. (1989) . An Investigation of Preschool Children's Comparative Capability to Sing Songs with and without Words, *Bulletin of the Council for Research in Music Education*, 100, 14-19.
- Mang, E. (2006) . The effects of age, gender and language on children's singing competency, *British Journal of Music Education*, 23 (2) , 161-174.
- 正高信男 (2001) . 記憶することのはじまり, 子どもはことばをからだで覚える, 中央公論新社, 33-62.
- McDonald, D. T., & Simons. G. M. (1989) . Musical Approaches and Methods for Young Children, *Musical Growth and Development*, Schirmer Books, 141-173.
- Matsuzaki, M. (2014) . Influence of language on song memory in preschool children, *人間文化創成科学論叢*, 17, 219-226.
- 三小田美稲子 (2014) . 幼児教育者養成校における声楽の授業の在り方に関する研究, *目白大学高等教育研究*, 20, 1-9.
- 南陽子・梅澤由紀子 (1991) . 言語習得期の音楽的表現, 日本音楽教育学会編集, *音楽教育学の展望II*, 音楽之友社, 166-175.
- Mithen. S. (2006) . More than Cheesecake? The Singing Neanderthals, Harvard University Press, 11-27.
- 水戸博道・岩口摂子・内山恵子 (2006) . 幼児の歌の記憶, *宮城教育大学紀要*, 41, 65-71.
- Mei-Ying, L. (2008) . The effects of gesture use on young children's pitch accuracy for singing tonal patterns, *International Journal of Music Education*, 26 (3) , 197-211.
- Mizuno, T. (2017) . The Recognition Level of Nursery Teachers for Children's Songs and Other Songs and How They Implement Them in Childcare Activities, *The Asian Journal of Child Care*, 8, 25-33.
- 水崎誠 (2007) . 幼稚園年長児の無伴奏歌唱の特質, *北海道教育大学紀要 (教育科学編)*, 58 (1) , 189-196.
- 水崎誠 (2008) . 家庭の音楽的環境と音楽の習い事-幼稚園児の歌唱能力との関連- *広島大学大学院教育学研究科音楽文化教育学研究紀要*, XX, 21-28.
- 水崎誠 (2014) . 幼児の歌唱行動研究の動向-音高の正確さに着目して-, *音楽教育学*, 44 (1) ,

26-31.

- 村尾忠廣 (1995) . 日本の児童の調子外れ-幼稚園から中学校までの実態を調査する, 「調子外れ」を治す, 音楽之友社, 42-56.
- 中川季枝子 (2011) . さんぽ, 鈴木恵津子・富田英也編著, ポケットいっぱいのうた, 教育芸術社, 86-87.
- 仲野悦子 (2010) . 子どもにとっての表現を考える-音楽表現を中心に-, 岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要, 42, 43-55.
- 中野研也・河野久寿 (2012) . 保育現場で必要とされる音楽能力と、幼児音楽教育との関連, 仁愛女子短期大学研究紀要, 44, 71-78.
- Nakata, T., & Trehub, S. E. (2004) . Infants' responsiveness to maternal speech and singing, *Infant Behavior & Development*, 27 (4) , 455-464.
- 中田智子・阿部純一 (2007) . 歌の記憶における詞と旋律との間の非対称な相互作用-リズムパターンとピッチパターンの寄与-, 基礎心理学研究, 26 (1) , 70-80.
- 法岡淑子 (1992) . 「音高はずれ」の歌唱をする子どもの実態と要因, 滋賀大学教育学部紀要人文化学・教育科学, 42, 179-193.
- 野秋未紗 (2017) . 幼児の発声と歌唱表現における音楽指導法-頭声発声とピアノの両輪-, 四条畷学園短期大学紀要, 50, 143-146.
- 小椋佐奈衣 (2018) . 家庭の音楽環境得点の影響, 幼児の歌唱能力を規定する要因の究明: 家庭における音楽環境と認知能力との関連性に着目して, 北海道大学大学院文学研究科, 59-64.
- 岡林典子 (1995) . 幼児の歌唱表現に関する考察-その実態と歌唱音程に影響を及ぼす要因について-, 聖和大学論集, 23, 303-323.
- 岡林典子・丹羽ひとみ・村田睦美 (2010) . 音楽的視点から捉える保育現場の環境構成-保育者への聞きとり調査をふまえて-, 京都女子大学発達教育学部紀要, 6, 13-26.
- 岡崎善治・近江秀崇 (2017) . 保育施設で歌われている四季の歌に関する研究, 中京学院大学中京短期大学部研究紀要, 47 (1) , 45-52.
- 大森隆子 (2013) . 伝承遊び研究考 (6) ことば遊び歌を中心に, 梶山女学園大学研究論集人文科学篇, 44, 1-9.

- Persellin, D. C. (2006) . The effects of vocal Modeling, Musical Aptitude, and Home Environment on Pitch Accuracy of Young Children, *Bulletin of the Council for Research in Music Education*, 169, 39-50.
- 斎藤一郎 (2015) . 歌って老化を食い止める, 日本音楽健康協会監修, 健康に長生きしたければ1日1曲歌いなさい, アスコム, 27-62.
- 坂田季穂 (2017) . 絵本に関する保育計画について-保育の場での絵本と役割と指導の要点-, 中国学園紀要, 16, 191-194.
- 属啓成 (1952) . 音楽の三要素音楽ノート (1) , 全音楽譜出版社, 104-111.
- 千田幸太郎 (2017) . 幼児の歌唱指導についての一考察-"大きい声の弊害"という観点から考える-, 四条畷学園短期大学紀要, 50, 57-65.
- 柴田るみ子 (1988) . 幼児の創造性に関する研究-知能、性格・行動特性との関係-, 日本教育心理学会総会発表論文集, 30, 890-891.
- 白川千春・白川浩 (2017) . 4年制大学の保育士・幼稚園教諭養成課程におけるピアノ演奏技能の教育内容とその展望 (II), 人間と文化, 1, 63-67.
- 白川浩・白川千春 (2017) . 4年制大学の保育士・幼稚園教諭養成課程におけるピアノ演奏技能の教育内容とその展望 (I), 人間と文化, (1), 57-61.
- 志村洋子 (1991) . 一歳児の歌 歌唱様発声の音響分析的研究, 日本音楽教育学会編, 音楽教育学の展望II, 音楽之友社, 152-165.
- 曾我部司 (1987) . 乳幼児の生活環境と音楽に関する研究(第4報), 中国短期大学紀要, 18, 63-67.
- 曾我部司・土谷由美子 (1985) . 乳幼児の生活環境と音楽に関する研究(第1報), 中国短期大学紀要, 16, 79-87.
- Shuter, R. (1968) . The Earliest Years, The Psychology of Musical Ability, Methuen, 61-76.
- 多保田治江 (2005) . 保育者養成における子どものうたの取り扱いについて(4)-アンケート調査に基づく分析-, 北陸学院短期大学紀要, 36, 13-27.
- 高木俊一郎・坂本龍生・園山繁樹・門田光司・谷川浩治・伊東眞里 (2013) . TS 式幼児・児童性格診断検査, 金子書房.
- 高橋正道 (1987) . 幼児の音楽教育と幼児教育者の関わり-子どもの歌をめぐる-, 清泉女

学院短期大学研究紀要, 5, 57-72.

高村由佳 (2019) . 外で“いい子”は、家では品切れ!? 家と外で性格が違う子を心配すべきか

【パパママの本音調査】 , 318, ウーマンエキサイト,

https://woman.excite.co.jp/article/child/rid_E1548139535245/, (May 31, 2020).

武田道子 (1979) . 幼児の歌唱指導-導入時におけるつまずきとその治療-, 静岡大学教育学部研究報告教科教育学篇, 11, 119-130.

武田道子・加藤明代 (2004) . 幼児の歌唱能力の発達に関わる考察 I -声域調査の分析を通して-静岡大学教育学部研究報告(教科教育学篇), 35, 247-258.

武田道子・加藤明代 (2005) . 乳・幼児の歌唱能力の発達に関する-考察II-発声調査の分析を通して(1), 静岡大学教育学部研究報告(教科教育学篇), 36, 225-236.

武田道子・加藤明代 (2007) . 乳・幼児の歌唱能力に関する考察-考察III-音程の分析を通して(1), 常葉学園短期大学紀要, (38), 81-91.

滝口圭子・迫田里沙 (2012) . 幼稚園年中児クラスにおける歌唱指導：導入部に見受けられる保育者と子どもとのやり取りから, 教育実践研究, 38, 45-57.

立本千寿子 (2008) . 保育現場における音楽実践と新傾向の現状, 学校音楽教育研究, 12, 128-129.

田島信元 (2018) . 「歌いかけ・読み聞かせ」活動は発達の根幹をつくる, 田島信元・佐々木丈夫・宮下孝広・秋田喜代美編著, 歌と絵本が育む子どもの豊かな心, ミネルヴァ書房, 27-54.

手良村昭子 (2019) . 保育内容領域「表現」の指導計画と評価, 石上浩美編著, 新・保育と表現, 嵯峨野書院, 59-67.

Trehub, S. E. (2009). Musical Predispositions in Infancy: An Update, In Peretz, I., & Zatorre, R. (ed.) The Cognitive Neuroscience of Music, Oxford University Press, 3-20.

Trehub, S. E. & Gudmundsdottir, H. (2019). Mothers as Singing Mentors for Infants, Welch, G. F., Howard, M. D. & Nix, J. (ed) , The Oxford Handbook of Singing, Oxford University Press, 455-469.

兎東淑美 (2000) . 園生活における「子どものうた」について-アンケート調査より-, 児童文化研究所所報, 22, 56-102.

- 梅澤由紀子 (1986) . 幼児の音楽性の現れ-2 歳後期の一幼児のつくりうたの分析から-,
愛知教育大学研究報告, 35, 13-28.
- 渡辺優子 (2001) . 家庭における幼児の歌唱についての一考察 附属幼稚園保護者へのアンケート調査より, 新潟青陵女子短期大学研究報告, 31, 79-87.
- Valerio, W. H., Reynolds, M. A., Grego, R. J., Yap, C. C., & McNair, A. (2011) . Parents' Documentation of Their Children's Music-Related Behaviors, Burton, S. L., & Taggart C. T. (ed) , Learning from Young Children-Research in Early Childhood Music, 161-180.
- Welch, G. F., Desmond, C. S. & Peta, J. W. (1996) . Age, sex and vocal task as factor in singing 'in-tune' during the first years of schooling, *Bulletin of the Council for Research in Music Education*, 133, 155-160.
- Welch, G. F., Desmond, C. S. & Peta, J. W. (1998) . The Role of Linguistic Dominance in the Acquisition of Song, *Publishea in Research Studies in Music Education*, 10, 67-74.
- Welch, G. F. (2001). The importance of singing, *Five to Seven*, 1 (6), 35-37.
- 山根銀二 (1950) . 音楽美入門, 岩波書店, 23.
- 山根直人 (2009) . 幼児の歌唱における音高、音程の正確さについての一考察－音声分析から見た発達の様相－, 学校教育学研究論集東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科編, (19), 1-13.
- Yamaoka, Y., & Bard, E. D. (2018). Positive Parenting Matters in the Face of Early Adversity, *American Journal of Preventive Medicine*, 1-10.
- 吉松隆 (2015) . 吉松隆の図解クラシック音楽大辞典, Gakken, 143-176.

謝 辞

本論文は、筆者が筑波大学大学院人間総合科学研究科ヒューマン・ケア科学専攻に在籍中の研究成果をまとめたものです。

私にとって博士論文の作成は、裏山に登った経験しかない者が、エベレストの頂を目指すようなもので、山の麓から論文完成という頂まで5年近くかかりました。その間、数えきれないほど多くの方々からのご指導、ご助言、ご支援、お励ましを頂戴しました。

指導教員の水野智美先生には、山登りの基本から（足の踏み出し方から）懇切丁寧に的確な指導をしていただきました。時に転げ落ちる私を止め、時に谷間から私を引っ張りあげ、あまたのお骨折をいただき、多大なご苦勞をおかけしました。ただただ感謝の念に堪えません。深くお礼を申し上げます。

副査の同専攻教授、徳田克己先生からは、所々の重要拠点で常に重要なご助言を頂戴しました。さらに、予備審査会や本審査会において、徳田克己先生をはじめ、同専攻教授、田宮菜奈子先生、東京未来大学こども心理学部教授、藤後悦子先生には副査として、核心をつくご教示をいただき、真理への道筋を示していただきました。深謝申し上げます。

歌唱調査実施にご協力をいただいた、京都三ノ宮幼稚園、聖ミカエル広畑幼稚園、高羽美加多台幼稚園、東京ゆりかご幼稚園、姫路日ノ本短期大学付属幼稚園の園児、保護者の皆様、ご尽力くださった先生方、質問紙調査実施にご協力をいただいた、愛恩幼稚園、あおば保育園、石岡市立園部保育所、石岡市立第1・第2保育所、大野ひかり保育園、大野めぐみ幼稚園、勝田あすなろ幼稚園、北浦こども園、クオリスキッズあべの橋保育園、くみや幼稚園、グレース幼稚園、コアキューピット福祉会、下館幼稚園、夙川学院短期大学付属幼稚園、頌栄保育園、聖愛幼稚園、西鈴蘭台頌栄保育園、のはら幼稚園、東岩槻幼稚園、みくに保育園、八尾ソレイユ認定こども園、友愛幼児園の先生方、調査、分析、校閲にご協力いただいた、内野彰裕先生、岡澤哲子先生、川上ミドリ先生、木原裕先生、高濱百合香先生、田川智先生、林幹士先生、細田淳子先生、堀井桂子先生、村上郁子先生、本山美和先生、山岡伊公子先生、山本淳子先生、渡邊順子先生、大越和美様、小川眞貴子様、斎藤和子様、白川洋子様、宮北昌子様には、厚くお礼を申し上げます。

雨の日も風の日も終始、手を差し伸べ、背中を押し、声をかけ、私の論文作成に協力して
くださった研究室の先輩、島田由紀子先生、坪見利香先生、西舘有沙先生、西村実穂先生、
研究室の中島怜子さん、水野裕子さん、和田美香さん、本当にありがとうございました。
頂に到着することができました。景色は最高です。

2021年8月

資 料

資料 1 : 【保護者への質問紙】

2週間以内に回答を担任の先生にお渡しください。

下記のチェックボックスのあてはまる箇所に○印をお入れください。

質問紙に同意します。

質問紙に同意しません。

ビデオ調査に同意します。

ビデオ調査に同意しません。

ご署名： _____

幼稚園、保育所、子ども園に通っているお子様1人につき1部ずつ、ご記入ください。

問1. 回答してくださる方やお子様について教えてください。

- ① 回答者は（ 母親 父親 その他 _____ ）
- ② 回答者の年齢は（ 20歳代 30歳代 40歳代 50歳以上 ）
- ③ お子様の年齢は（ _____ ）歳 ・（ _____ ）月生まれ
- ④ お子様は（ 幼稚園 保育園 こども園 その他 _____ ）
の
（ 0～2歳児のクラス 年少（3歳児）クラス 年中（4歳児）クラス 年長（5歳児）クラス ）
- ⑤ きょうだいはいますか（いない _____人 いる）
いると答えられたかた⇒小学生以上のきょうだいはいますか。
（ いない _____人 いる ）

問2. お子様が音楽とどれ位ふれあっているのかについてお尋ねします。

- ① お子様は音楽教室（ピアノ、エレクトーンなど）に通っておられますか。
（ 現在、通っている 以前は通っていたが現在は通っていない 通ったことがない
その他 _____ ）

② お子様が家庭の中でふれる楽器すべてに○をつけてください(本格的に音楽を奏でなくても、遊びでさわっているだけの場合も含まれます)。

(ピアノ たいこ 木琴 鉄琴 オルガン 電子オルガン 笛
鍵盤ハーモニカ 鈴 ハンドベル その他 _____)

③ -a お子様が楽器にふれている時に、隣人、近所への音漏れなどが気になりますか。

(とても気になる やや気になる どちらともいえない あまり気にならない
全く気にならない)

③-b 対策をしていますか。あてはまるものすべてに○をつけてください。

- () 特に対策は行っていない。
() 早朝に楽器音を出さないようにしている。
⇒何時まで、楽器音を出さないようにしていますか。(_____ 時まで)
() 夜遅くに楽器音を出さないようにしている。
⇒何時以降は、楽器音を出さないようにしていますか。(_____ 時以降)
() 楽器音がもれないように、楽器音を出す時には窓を閉めている。
() 室内では大きな楽器音を出さないように、お子様に声をかけている。

() 室内では、楽器音を出さないように禁止している。
() 防音部屋を設置している。
() その他(_____)

④ -a お子様が、歌を歌っている時に、隣人、近所への音漏れなどが気になりますか。

(とても気になる やや気になる どちらともいえない あまり気にならない
全く気にならない)

④-b 対策をしていますか。あてはまるものすべてに○をつけてください。

- () 特に対策は行っていない。
() 早朝には、歌を歌わないようにしている。
⇒何時までは、歌わないようにしていますか。(_____ 時まで)
() 夜遅くに、歌を歌わないようにしている。
⇒何時以降は、歌を歌わないようにしていますか。(_____ 時以降)
() 歌声がもれないように、歌を歌う時には窓をしめている。
() 大きな声で歌わないように、お子様に声をかけている。
() 防音部屋を設置している。

() その他(_____)

- ⑤ -a. お子様が音楽にあわせて身体を動かす時に、隣人、階下、近所への音漏れや騒音などが気になりますか。
 (とても気になる やや気になる どちらともいえない あまり気にならない 全く気にならない)
- ⑥ -b. 対策をしていますか。あてはまるものすべてに○をつけてください。
 () 特に対策は行っていない。
 () 早朝には音楽をかけないようにしている。
 ⇒何時までは、音楽をかけないようにしていますか。(_____ 時まで)
 () 早朝には、音量を下げています。
 ⇒何時までは、音量を下げていますか。(_____ 時まで)
 () 夜遅くに音楽をかけないようにしている。
 ⇒何時以降は、楽器音を出さないようにしていますか。(_____ 時以降)
 () 音がもれないように、音楽をかける時には窓を閉めている。
 () お子様がとびはねたりしても響かないように マットを敷いている。
 () 踊ったり、ジャンプしたりすることを禁止している。
 () 家の中で、静かに歩くように、お子様に声をかけている。
 () その他 (_____)
- ⑥お子様は、歌や音楽が流れていなくても、自分から歌を歌う様子を見かけますか。
 (よくみかける 時々みかける あまりみかけたことがない 全くみかけない)
- ⑦お子様は、歌や音楽が聞こえてくると、その歌や音楽に合わせて歌うことはありますか。
 (よく歌う 時々歌う あまり歌わない 全く歌わない)
- ⑧お子様は、♪恋ダンス、恋するフォーチュンクッキー♪のような振り付けのある歌や音楽が流れると、身体を動かしたり、踊ったりしますか。
 (よく踊る 時々踊る あまり踊らない 全く踊らない)
- ⑨お子様は、♪げんこつやまのたぬきさん、パンダ コアラ うさぎ♪のような、指や手を動かす手遊びのある歌や音楽が流れると、音楽にあわせて、指や手を動かしますか。
 (よくする 時々する あまりやらない 全くやらない)
- ⑩お子様は、振り付けのない歌や音楽が流れた時、音楽にあわせて踊りますか(音楽にあわせて身体を動かすことも含みます)。
 (よく踊る 時々踊る あまり踊らない 全く踊らない)
- ⑪-a. お子様と一緒にカラオケに行ったことがありますか。
 (ある ない)

⑪-b. お子様はカラオケでどんな歌を歌っていましたか。覚えている範囲で教えてください(誰かと一緒に歌っていた歌も含みます)。

()

⑫ お子様と幼児向きのコンサートに行ったことはありますか。

(ある ない)

あると答えた方⇒どれ位の頻度ですか。

(1年に____回 1年に1回 2年に1回位 その他 _____)

⑬ お子様とミュージカルを観に行ったことはありますか。

(ある ない)

あると答えた方⇒どれ位の頻度で行かれましたか。

(1年に____回 1年に1回 2年に1回位 その他 _____)

⑭ お子様、コンサート会場で音楽演奏を観る以外に、以下に記したような楽器演奏をしている人を見る機会がありますか。あてはまるものすべてに○をつけてください。

() 家の中で、きょうだい楽器の演奏をしている。

() 家の中で、大人(お子様の父親、母親、祖父母など)が楽器の演奏をしている。

() 訪問した家で、楽器の演奏をしている人を見る。

() きょうだい通っている音楽教室でみる。

() きょうだい通っている学校の行事でみる。

() ストリートライブで楽器演奏をしている人を見る。

() その他 (_____)

問3. お子様について教えてください。

お子様の特徴にあてはまると思うものすべてに○をつけてください。

- () 人の前にでるとひどくはずかしがる。
 - () 自分が中心になりたがる。
 - () 何ごとにもあまり熱中するところがない。
 - () 自分の思い通りにならないとカンシャクをおこす。
 - () 幼稚園・保育園での出来事を、話すことが少ない。
 - () 静かに座って行う遊びより、身体を動かす遊びを好む。
 - () 大人の顔色をうかがうようなところがある。
 - () ものごとをひどく気にする。
 - () 自分一人でできることでも周りの人にたよりたがる。
 - () 幼稚園・保育園にいきたがらないことが時々ある。
 - () 負けず嫌いである。
 - () 人の前に出ると緊張している。
 - () 内弁慶で家では元気がいいが、外ではひっこみじあんだ。
 - () わがままである。
 - () 甘えることが多い。
 - () 幼稚園・保育園での活動が本人にむずかしすぎると思われることが、たびたびある。
 - () はじめて人に会ったり、経験したりすることに不安を示す。
 - () 変わったことや目立つことをやりたがる。
 - () 失敗をおそれて行動しない。
 - () 気が散りやすく、一つのことに長続きしない。
 - () 怒るとなかなかきげんがなおらない。
 - () むずかしいことは、すぐに投げ出す。
 - () 先生などに、なかなかなじまない。
 - () 幼稚園・保育園生活に、少しも興味がないように見受ける。
- ① お子様には、どのように育ててほしいですか。 あてはまると思うものすべてに○をつけてください。
- () 音楽を好きになってほしい。
 - () 美術を好きになってほしい。
 - () 運動を好きになってほしい。
 - () 読書を好きになってほしい。
 - () 科学関連分野を好きになってほしい。
 - () 語学関連を好きになってほしい。
 - () その他 (_____)

問4. ここ半年位のことをお尋ねします。

- ① 日常生活の中で、お子様と歌を一緒に歌う、あるいは、お子様に歌いかけている方が、いますか。

(いる いない)

いると答えた方⇒それは、どなたですか。あてはまる方すべてに○をつけてください。

(祖父 祖母 父 母 きょうだい おじ おば いとこ 近所の人 その他_____)

- ② 音楽が流れていると、お子様と一緒に、踊ったり、身体を動かしたりする方が、いますか。

(いる いない)

いると答えた方⇒それは、どなたですか。あてはまる方すべてに○をつけてください。

(祖父 祖母 父 母 きょうだい おじ おば いとこ 近所の人 その他_____)

- ③ お子様がお寝るとき(昼寝を含む)、子守歌を歌っている方が、いますか。

(いる いない)

いると答えた方⇒それは、どなたですか。あてはまる方すべてに○をつけてください。

(祖父 祖母 父 母 きょうだい おじ おば いとこ 近所の人 その他_____)

いると答えた方⇒どれ位の頻度ですか

(毎日 ほぼ毎日 週に3～4回 週に1～2回 その他_____)

- ④ お子様は、家庭で、テレビやDVDなど、以下のものをみる機会がありますか。あてはまるものすべてに○をつけてください。

() ディズニーアニメのオープニング曲

() ディズニーアニメのエンディング曲

() ディズニーアニメの挿入曲

() Eテレ アニメのオープニング曲

() Eテレ アニメのエンディング曲

() Eテレ アニメの挿入曲

() 一般アニメのオープニング曲

() 一般アニメのエンディング曲

() 一般アニメ(ドラえもんやアンパンマンなど)の挿入曲

() みんなの歌

() NHK おかあさんと一緒

() 一般歌番組⇒番組名をお教えてください

(_____)

みていると答えた方 ⇒○をつけた項目合わせて、どれ位の頻度でみていますか。

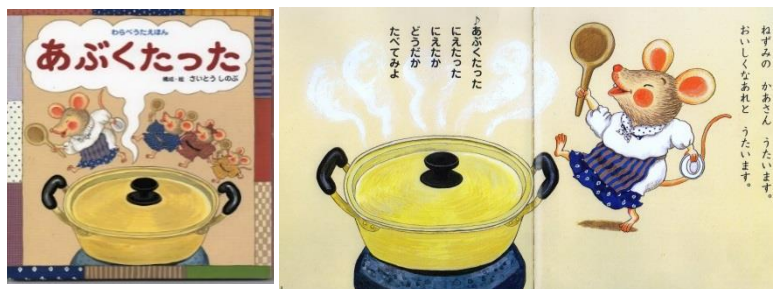
(毎日 週に4～5回 週に2～3回 週に1回位 月に2～3回 月に1回位 その他
_____)

⑤ ご家庭に、歌が載っているお子様むけの本がありますか？

(ある ない)

あると答えた方⇒ 何冊位ありますか。

(1冊～5冊位 6冊～10冊位
10冊～30冊位 30冊以上)



⑥ 図書館などで、歌が載っているお子様向けの本や紙芝居を借りることはありますか。

(ある ない)

あると答えた方⇒借りる頻度はどれ位ですか。

(週に _____回 月に _____回位 1年に _____回位)

⑦ 歌が載っているお子様むけの本をお子様と一緒に見ながら歌うことはありますか。あるいは、お子様に見せながら歌ってあげることはありますか。

(ある ない)

あると答えた方⇒歌う頻度はどれ位ですか。

(週に _____回 月に _____回位 1年に _____回位)

⑧ 歌が載っていない本でも、文章にメロディをつけて子どもに、歌ってあげることができますか。

(よくある 時々ある あまりない 全くない)

⑨ お子様が、CD、ラジオなどで、音楽を聴くことはありますか。(テレビ、DVDはのぞきます)

(ある ない)

あると答えた方⇒どれ位の頻度ですか。

(ほぼ毎日 週に2～3回 週に1度位 月に3度位 月に2度位 月に1度位
その他 _____)

どのような曲を聴きますか。

(_____)

⑩ お子様が、CD、バックグラウンドミュージック、生演奏を聴きながら活動をするものはありますか。(例：食事中にBGMを流す)

(よくある 時々ある あまりない 全くない)

よくある 時々ある あまりないと答えた方⇒それは、いつですか。あてはまるものすべてに○をつけてください。

() 起きた時

() 食事中

() 遊び中

() 入浴中

() その他

(_____)

問5. ここ半年のお子様の声や歌の発達についてお尋ねします。

- ① お子様は、ご家族とのおしゃべりの時には、どの程度の声の大きさでお話ししますか。7段階のレベルにした場合、どのレベルですか。

非常に大きな声で話す

非常に小さな声で話す

7・・・6・・・5・・・4・・・3・・・2・・・1

- ② お子様は、聞こえてきた音や音楽を声でまねることはありますか。

(例：パトカーのサイレンを聴いて、「ピーポーピーポーとまねる」

(よくある 時々ある ほとんどない まったくない)

非常によくある、よくある、時々ある ほとんどないと答えた方⇒ どのような時に、まねをしていますか。

(_____)

- ③ 家庭の中で**お子様が一人で歌った歌**を覚えている範囲で書いて下さい (アニメソング、歌謡曲、幼稚園・保育園で習った歌などすべてを含みます)。

(_____)

- ④ お子様は、「歌を歌って」と求めてくることはありますか。

(よくある 時々ある ほとんどない まったくない)

- ⑤ お子様は、即興で歌をつくって歌を歌うことはありますか (もともとあった歌詞を違う歌詞に替えている替え歌は含みません)。

(よくある 時々ある ほとんどない まったくない)

- ⑥ お子様は替え歌(もともとあった歌詞を違う歌詞に替えている)を歌うことはありますか。

(よくある 時々ある ほとんどない まったくない)

非常によくある よくある 時々ある ほとんどない と答えた方⇒あてはまると思うものすべてに○をつけてください。

- () 歌っている替え歌は、幼稚園や保育所などではやっている替え歌。
- () 歌っている替え歌は、実際の歌詞がわからずに、おもいつきで歌っている替え歌。
- () 歌っている替え歌は、お子様が考えたり、発想したりしてできた替え歌。

問6. 回答してくださっている方自身についてお尋ねします。

あてはまると思うものすべてに○をつけてください。

- () 歌を歌うことが好きだ。
- () 音楽を聴くことが好きだ。
- () 歌コンテスト のどじまん カラオケコンテストなど歌に関係あるショーやコンクールに出演したことがある。
- () 歌の楽譜を見れば、初めて見る歌でもある程度、歌える。
- () 自分のお子様が歌をうたっているときに「その歌を教えて」と頼むことがある。

問7. 回答してくださっている方とお子様との音楽を通しての触れ合いについてお尋ねします。

① 回答してくださっている方は、お子様と一緒に歌を歌うことはありますか。

(ある ない)

あると答えた方⇒どれ位の頻度ですか。

(ほぼ毎日 週に2~3回 週に1回位 月に2~3回 月に1回位

その他 _____)

あると答えられたかた⇒どのような時に歌いますか。あてはまるものすべてに○をつけてください。

- () 食事用意中
- () 入浴中
- () 園への送迎時
- () 買い物時
- ()
- その他

(_____)

② その場にあわせた歌を、お子様に歌うことはありますか。(例えば、雨が降ってきたから♪雨降りの歌♪を歌う)

(よくある 時々ある ほとんどない まったくない)

- ③ その場にあわせた即興歌を作って、お子様に歌うことはありますか。

(よくある 時々ある ほとんどない まったくない)

- ④ 歌いながらお子様と一緒に、踊ったり、身体を動かしたりすることはありますか。

(よくある 時々ある ほとんどない まったくない)

- ⑤ 最近、家庭の中でお子様と一緒に歌った歌を覚えている範囲で書いて下さい (アニメソング、歌謡曲、幼稚園、保育園で習った歌などすべてを含みます)。

(_____)

回答後は、1 ページ目(本ページ)を切り離してお手元に残し、2 ページ目以後をご提出ください。

ご回答 ありがとうございます。

資 料

資料 2 :【保育者への質問項目】

1 週間以内にご提出ください。

回答してくださる方についてお尋ねします。

問1. 回答者は（ 女性 ・ 男性 ）

① 回答者の年齢は（ 20 歳代 30 歳代 40 歳代 50 歳以上 ）

② 回答者の保育歴は（ 約 年目 ）

③ 回答者は（ 幼稚園 保育園 こども園 その他_____ ）の
（ 0～2 歳児のクラス 年少（3 歳児）クラス 年中（4 歳児）クラス 年長（5 歳児）
クラス ）を担当

④ 回答者には、お子さんが（ 人いる ・ いない ）

⑥ ピアノやエレクトーンなどの鍵盤楽器歴は（ 約 年 ）

回答は、担当をしているクラスについて、お答えください。

問2. 保育の中での歌唱に関わることについてお尋ねします。

① 1 週間の保育の中で、どれ位の頻度で歌を歌う活動を取り入れていますか。過去 2 週間ぐら
いのことについてあてはまるもの 1 つに○をつけてください。

（ ①毎日 ②週に 4～5 日 ③週に 2～3 日 ④その他_____ ）

② 1 日の保育の中で、何曲位、歌いますか。過去 2 週間ぐらいのことについてあてはまるもの
1 つに○をつけてください。なお、1 日の活動全体を併せてお答えください。

（ ①おおよそ 1 曲 ②おおよそ 2～3 曲 ③おおよそ 4～5 曲 ④6 曲以上
その他_____ ）

③ ここ 2 カ月間で、集団活動として、どのような歌を、どれ位の期間、歌いましたか。あるい
は、

どれ位の期間歌う予定ですか。

例：曲名（ ぞうさん ） 期間（おおよそ 10 日）

曲名（ ） 期間（ おおよそ 日 ）

曲名（ ） 期間（ おおよそ 日 ）

曲名（ ） 期間（ おおよそ 日 ）

曲名（ ） 期間（ おおよそ 日 ）

曲名（ ） 期間（ おおよそ 日 ）

曲名（ ） 期間（ おおよそ 日 ）

曲名（ ） 期間（ おおよそ 日 ）

曲名（ ） 期間（ おおよそ 日 ）

曲名（ ） 期間（ おおよそ 日 ）

④ 保育で使用する「歌」の選曲についてお尋ねします。
あてはまる項目すべてに○をつけてください。

- () 歌詞が単純な歌を選曲するようにしている。
- () 旋律が単純な歌を選曲するようにしている。
- () 季節にあわせて選曲するようにしている。
- () 行事にあわせて選曲するようにしている。
- () 手遊びや体遊び(例：♪頭、かた、ひざ♪)を含んだ歌を選曲するようにしている。
- () 子どもが、リズムをとりやすそうな曲の選曲をするようにしている。
- () 担当しているクラスの子どもたちの発達段階にあわせて選曲するようにしている。
- () 右図鍵盤図 A 部分のような高音が多く含まれている曲は、
選曲しないようにしている。
- () 右図鍵盤図 B 部分のような低音が多く
含まれている曲は、選曲しないようにしている。
- () 短調の曲、あるいは、暗い曲調の歌は、
選曲しないようにしている。
- () 長調の曲、明るい曲調の歌を選曲するようにしている。
- () 曲の長さが長い曲は、選曲しないようにしている。
- () 曲の長さが短い曲は、選曲しないようにしている。
- () 繰り返が多い曲は、選曲しないようにしている。
- () 繰り返が少ない曲は、選曲しないようにしている。
- () 自分にとって伴奏の難易度が高い曲は、選曲しないようにしている。
- () 自分にとって伴奏の難易度が高い曲は、簡易伴奏に替え選曲している。
- () 保育では、歌わないようにしている歌がある。



○をつけられた方⇒曲名、ある或いは、ジャンルを教えてください。

()

選曲について気をつけていることがあれば、自由にお書きください。

()

⑤はじめての曲を子どもに紹介する時、どのような工夫をしていますか。

あてはまるものすべてに○をつけてください。

- () 絵などの視覚物と言葉を使って歌詞について、説明をする。
- () 言葉だけを使って歌詞について、説明をする。
- () 歌詞に関係する話題を子どもたちと話す。
- () 楽器を使って、歌詞とメロディ（旋律）を弾き歌う。
- () 楽器を使用せず、歌詞とメロディ（旋律）を歌う。
- () 楽器を使って、メロディ（旋律）だけを弾き歌う。
- () 楽器を使用せず、ハミングや♪ららら♪や♪るるる♪などで、メロディ（旋律）だけを歌う。
- () その他 _____

問3. 保育室内での歌詞や楽譜についておたずねします。

① 歌詞や楽譜を壁面に貼っていますか。あてはまるもの1つに○をつけてください。

- (①いつも貼る ②時々、貼る ③あまり貼らない ④全く貼らない)

② ⇒①いつも貼る ②時々、貼る ③あまり貼らないと答えた方にお尋ねします。

(④全く貼らないと答えた方は問4にお進みください)

歌詞や楽譜の貼り方として、あてはまるものすべてに○をつけてください。

- () 歌詞のみ貼る
- () メロディ（旋律）のみ貼る
- () 歌詞とメロディを貼る
- () その他 _____

問4. 歌の活動時に、子どもたちに、発声練習をする時間をもうけていますか。あてはまるものの

1つに○をつけてください。

- (①いつもする ②時々する ③ほとんどしない ④全くしない)

⇒①いつもする、②時々する、③ほとんどしないと答えた方にお尋ねします。

(④全くしないと答えた方は、問5にお進みください)

どのような発声練習をしていますか。具体的に教えてください。

例：♪ドミソミド、レファラファレ・・・などと音階を歌う

[]

問 5. 保育活動の中で歌あそびをする際、以下の項目を、どの程度重視しますか。あてはまる

ところに○をつけてください。

① 子どもが歌詞を覚える

重視	ひじょうに	いえない	どちらとも	重視しない	まったく
----	-------	------	-------	-------	------

5 4 3 2 1

② 子どもがメロディ（旋律）を覚える

重視	ひじょうに	いえない	どちらとも	重視しない	まったく
----	-------	------	-------	-------	------

5 4 3 2 1

③ 音楽を身体で感じられるようにする

重視	ひじょうに	いえない	どちらとも	重視しない	まったく
----	-------	------	-------	-------	------

5 4 3 2 1

問 6.歌を伴う活動についてお尋ねします。

① 担任の指導で、音楽（リズム）にあわせて歩く、走る、跳ぶなどの活動をすることはありますか。

[ある ・ ない]

あると答えた方⇒

(1) どれくらいの頻度で活動しますか。

(月に1度くらい 月に2度くらい 月に3度くらい 週に1度くらい
週に2、3回 ほぼ毎日 その他_____)

(2) どのような時に活動しますか。

あてはまるもの全てに○をつけてください。

(朝の会 帰りの会 昼食前 午前の集団活動 午後の集団活動
その他 _____)

(3) どのような内容の活動ですか。

(_____)

(4) どこで活動していますか。あてはまるもの全てに○をつけてください。

(保育室 遊戯室/体育館 園庭 その他 _____)

② 担任の指導で、音楽(旋律)にあわせて、ダンスをしたり、体操をしたり、身体を動かす活動をすることはありますか。

[ある ・ ない]

あると答えた方⇒

(1) どれくらいの頻度で活動しますか。

(月に1度くらい 月に2度くらい 月に3度くらい 週に1度くらい
週に2、3回 ほぼ毎日 その他 _____)

(2) どのような内容の活動ですか。

(ダンスをする 体操をする その他 _____)

(3) 曲名をお教えてください。

(_____)

(4) どこで活動していますか。あてはまるもの全てに○をつけてください。

(保育室 遊戯室/体育館 園庭 その他 _____)

(5) ①, ②は、どのような時に活動しますか。

あてはまるもの全てに○をつけてください。

(朝の会 帰りの会 昼食前 午前の集団活動 午後の集団活動
その他 _____)

③ 音楽の専門家が、子どもたちに音楽指導をする機会がありますか。

[ある ・ ない]

あると答えた方⇒

(1) (月に1度位 月に2度くらい 月に3度くらい 週に1度くらい
週に2、3回 ほぼ毎日)

(2) 1回の指導時間は、(約 _____ 分)

(3) どこで活動していますか。あてはまるもの全てに○をつけてください。

(保育室 遊戯室/体育館 園庭 その他 _____)

(4) どのような内容の活動をしていますか。

()

問7. 視聴覚機器および教材についてお尋ねします。

① 子どもたちが自由に操作して聴くことができる機器 (例 CD デッキ) が保育室に、ありますか。

(ある ・ ない)

② 園内で、ラジオや CD など聴覚機器で、子どもたちが音楽を聴く機会はありますか (テレビや DVD はのぞきます)。

(ある ・ ない)

あると答えた方⇒どれ位の頻度ですか。

(ほぼ毎日 週に 1~3 回程度 月に 1~3 回程度 その他 _____)

どのような曲を聴きますか。

(_____)

③ 園内でテレビや DVD など視聴覚機器で、以下のものを子どもたちが視聴する機会はありますか。

(ある ・ ない)

あてはまるものすべてに○をつけてください。

() ディズニーアニメのオープニング曲

() ディズニーアニメのエンディング曲

() ディズニーアニメの挿入曲

() Eテレ アニメのオープニング曲

() Eテレ アニメのエンディング曲

() Eテレ アニメの挿入曲

() 一般アニメのオープニング曲

() 一般アニメのエンディング曲

() 一般アニメ (ドラえもんやアンパンマンなど) の挿入曲

() みんなの歌

() NHK おかあさんと一緒

() 一般歌番組 ⇒ 番組名をお教えください

(_____)

() その他

視聴していると答えた方 ⇒○をつけた項目合わせて、どれ位の頻度でしょうか。

(週に 4 回以上 週に 1~3 回程度 月に 1~3 回程度 その他 _____)

④ BGM を流しながら、子どもが活動をすることはありますか。(例：食事中にBGMを流す)

(よくある 時々ある あまりない 全くない)

よくある 時々ある あまりないと答えた方 ⇒それは、いつですか。

あてはまるものすべてに○をつけてください。

- () 登園してきた時
- () 食事中
- () 遊び中
- () 降園準備
- () 活動から活動への移動
- () その他 (_____)

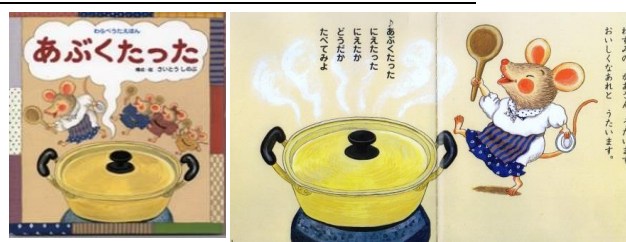
⑤ 園内で、歌を含んでいる、絵本、紙芝居を
観る機会がありますか。

[ある ・ ない]

⇒あると答えた方、

(1) 回数をお教えてください。

(ほぼ毎日 週に2,3回 週に1回程度、 月に3回程度 月に2回程度
その他 (_____))



⑥ 園内で、歌を含んでいる、パネルシアター、人形劇を観る機会がありますか。

[ある ・ ない]

⇒あると答えた方、

(1) 回数をお教えてください。

(ほぼ毎日 週に2,3回程度 週に1回程度 月に3回程度 月に2回程度 その他)

(2) 物語名、お教えてください。

(_____)

⑦ 園外で幼児向け歌の挿入があるコンサート、ミュージカル、人形劇を観に行く機会は
ありますか。

[ある ・ ない]

⇒あると答えた方、

(1) 1年に(約 _____ 回)

(2) 曲名、物語名をお教えてください。

(_____)

問8. あなた自身（回答者自身）の歌の指導に関してお尋ねします。

① その場にあわせた歌を、子どもたちに歌うことはありますか。（例えば、雨が降ってきたから♪雨降りの歌♪を歌う）

（ よくある 時々ある ほとんどない まったくない ）

② 替え歌を作って子どもたちに歌うことがありますか。

（ よくある 時々ある ほとんどない まったくない ）

③ その場にあわせた歌を即興で作って、子どもに歌うことはありますか。（例えば、空に浮かぶ雲をみて、♪くもさん、くもさん、何書いているの♪と歌詞とメロディーをあなた自身（回答者自身）が創って歌う）

（ よくある 時々ある ほとんどない まったくない ）

④ 歌いながら子どもたちと一緒に、踊ったり、身体を動かしたりすることがある。

（ よくある 時々ある ほとんどない まったくない ）

⑤ 保育で使う歌のレパートリーを増やす努力をしていますか。

（ 努力している 時々努力する ほとんど努力しない まったく努力しない ）

⑥ くり返しが3番以上ある歌は、1番のみ、あるいは、1,2番のみだけを歌うことがありますか。

（ よくある 時々ある ほとんどない まったくない ）

⑦ 歌の指導を苦痛に感じることはありますか。

（ よくある 時々ある ほとんどない まったくない ）

⑧ 子どもたちの前で、あなた（回答者）1人で歌うことはありますか。

[ある ・ ない]

あると答えた方⇒

1人で歌うのが苦痛に感じることはありますか。

（ よくある 時々ある ほとんどない まったくない ）

⑨ 他のクラスの担任が、どのように子どもたちに歌の指導をしているのか気になることがありますか。

（ よくある 時々ある ほとんどない まったくない ）

⑩ 自分が担当しているクラスと他のクラスの子どもたちの歌の完成度を比較することがあります。

（ よくある 時々ある ほとんどない まったくない ）

⑪ 園長先生、主任、など上司からあなた（回答者）への、「子どもの歌指導についての助言」を気にすることがあります。

（ よくある 時々ある ほとんどない まったくない ）

問9. あなた自身（回答者自身）の歌との関わりや鍵盤演奏について、お尋ねします。

あてはまると思うものすべてに○をつけてください。

- 歌を歌うことが好きだ。
- 音楽を聴くことが好きだ。
- 歌コンテスト のどじまん カラオケコンテストなど歌に関係あるショーやコンクールに出演したことがある。
- 歌の楽譜を見れば、初めて見る歌でもある程度、歌える。
- 歌の楽譜を見れば、人に教えてもらわなくても、歌えるようになる。
- 歌の楽譜を見ても、どのような歌か人に教えてもらえないとわからないし歌えない。
- 弾き歌いは得意だ。
- 弾き歌いは苦手だ。

ご回答 ありがとうございます。

資 料

資料 3：【保育者による子どもの特性調査】

(保育者用)

ビデオ録画を行った、子ども一人ひとりについて、お尋ねします。

子どもの名前 _____

(男児・女児)

(月生まれ)

① 歌を歌う時に、身振り手振りをつけながら歌っていますか。

まったく当てはまらない

ひじょうに当てはまる

1・・・2・・・3・・・4・・・5・・・6・・・7

② 歌詞を覚えることが得意そうですか。

まったく当てはまらない

ひじょうに当てはまる

1・・・2・・・3・・・4・・・5・・・6・・・7

③ アンケート①問3(9)の質問「音楽の専門家が、子どもたちの音楽指導をする機会がある」と答えた方にお尋ねします。子どもは、音楽の専門家が指導する音楽活動に積極的に参加していますか。

まったく当てはまらない

ひじょうに当てはまる

1・・・2・・・3・・・4・・・5・・・6・・・7

④ もっとも楽しい活動をしている時の状態を10とすると、歌を歌う時の状態はどの程度ですか。

1・・・2・・・3・・・4・・・5・・・6・・・7・・・8・・・9・・・10

⑦ あてはまると思うものすべてに○をつけてください。

- () 人の前にでるとひどくはずかしがる。
- () 自分が中心になりたがる。
- () 何ごとにもあまり熱中するところがない。
- () 自分の思い通りにならないとカンシャクをおこす。
- () 静かに座って行う遊びより、身体を動かす遊びを好む。
- () 大人の顔色をうかがうようなところがある。
- () ものごとをひどく気にする。
- () 自分一人でできることでも周りの人にたよりたがる。

- () 負けず嫌いである。
- () 人の前に出ると緊張している。
- () わがままである。
- () 甘えることが多い。
- () 幼稚園・保育園での活動が本人にむずかしすぎられることが、たびたびある。
- () はじめて人に会ったり、経験したりすることに不安を示す。
- () 変わったことや目立つことをやりたがる。
- () 失敗をおそれて行動しない。
- () 気が散りやすく、一つのことに長続きしない。
- () 怒るとなかなかきげんがなおらない。
- () むずかしいことは、すぐに投げ出す。
- () 先生などに、なかなかなじまない。

資 料

資料 4 : 【調査依頼】

- ① 幼稚園園長・認定こども園園長・保育所所長用
- ② 保育者用
- ③ 保護者用

(幼稚園園長・保育所所長・認定こども園園長用)

「就学前の子どもの‘歌う活動’に関連する要因の研究」にかかわる

調査へのご協力をお願い

子どもたちの歌とのふれあいについて研究をしています。いろいろな場所や状況で、子どもが歌を歌う機会が多くても、子どもたちがどのように歌と親しんでいるのかといった調査が行われていないため、子ども一人ひとりに対応した指導方法が、整っていません。

そこで、このたび、幼稚園、保育所、子ども園、および、家庭で、子どもたちがどのように歌に親しんでいるのかについて明らかにしたいと思い、「幼稚園・保育所・子ども園・家庭において子どもの‘歌に親しむ’環境についての分析の調査を企画しました。先生方からの貴重なご回答をもとに、「子どもたちに現れる歌い方の違い」の要因を明らかにして、子どもが歌を歌うための支援方法を提案していきたいと考えております。調査の概要等は以下に記すとおりです。

【調査内容】

- 1.質問紙調査
- 2.ビデオ録画調査

保護者と保育者への質問紙調査内容は添付いたしました質問紙の通りで、次の項目から構成されています。

・保護者への質問用紙：

保護者が子どもとの日常生活の中で、どの程度、どのように、音楽に関連する事柄（関わっている内容や時間の長さ）に関わっているのか、住居環境、および、子どもの特性について調査いたします。回答に約15分かかります。(全7ページ)

・保育者への質問用紙：

質問紙調査は、下記の2種類です。

- ①ビデオ録画前に、ご担当されているクラスの歌唱活動の様子（歌の選曲、歌の指導方法、クラスの音楽の取り組み状況）を伺う内容で、回答に約15分かかります。(全5ページ)
- ②ビデオ録画後に、ビデオ録画した子ども一人ひとりの歌を歌う時の様子、特性について伺う内容で、回答には、一人分に約5分かかります。(1人分全1ページ)

・ビデオ録画調査：

保護者からビデオ録画に同意をいただいた子どもたちを、5～6人ずつの小グループごとに歌を歌っている様子ビデオ録画（約10分ずつ）を行い、子ども、それぞれが、歌1曲をどのように歌うタイプなのかを調査いたします。(例：.最初から最後まで歌うタイプ、途中で歌うのを止めるが再び歌いだすタイプ、始終、歌わないタイプ、途中で歌うのを止めるタイプ等)

下記をご確認のうえ、ご賛同いただけましたら同意書に自筆署名あるいは記名押印をいただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

【ビデオ録画調査の実施方法】

貴園に訪問し、保育者及び保護者からビデオ録画の同意を得られたお子さんが歌を歌っている場面、約10分ずつ位を録画させていただきます。録画の際には、学生分担者（瀧田陽子）が、担任に調査内容や倫理的配慮について文書を用いて、説明します。

（保護者からビデオ撮影の同意を得られなかったお子さんには、ビデオ録画は行いません。）

【質問紙調査の実施方法】

- ・保育者：保育者（担任）の先生には調査内容や倫理的配慮を学生分担者（瀧田陽子）が、調査内容や倫理的配慮について文書を用いて、説明し、質問紙調査①を配布させていただきます。回答後の質問紙調査用紙と同意書は、学生分担者（瀧田陽子）が用意いたしました回収箱を施設内に設置していただき、その中に入れるようにご指示ください。ビデオ調査終了後に質問紙調査②を配布させていただきます。回答後の用紙は質問紙調査①同様に回収箱に入れるようにご指示ください。回収箱は、学生分担者が引き取りにうかがいます。
- ・保護者には、①調査へのご協力のお願ひ、倫理的配慮の説明文（添付資料7：「就学前の子どもの‘歌う活動’に関連する要因の研究」にかかわる調査へのご協力のお願ひ）、②質問紙、③同意書の3種類を入れた封筒の配布をお願ひもうしあげます。配布および回収方法は、保育者と保護者との間で、連絡に用いている連絡帳に封筒に入れた書類を挟み配布、回収を行うようにお願ひもうしあげます。回収後は、学生分担者（瀧田陽子）が受け取りにうかがいます。

【同意撤回】

調査を同意撤回される場合は、添付いたしました同意撤回書をご提出ください。質問紙回答を電子データした後は、撤回が出来ませんのでご了承ください。

【倫理的配慮】

ビデオ録画調査は、学生分担者（瀧田陽子）が貴園に訪問し録画撮影を行い、録画内容が第三者の目に触れないようにします。回答後の質問紙は、学生分担者（瀧田陽子）が直接受け取り、回答内容が第三者の目に触れないようにします。

本研究において、使用する質問紙に名前を書きいただき、ビデオ撮影した子どもの名前を教えてくださいますが、回答は全て電子データ化され、統計的に処理されます。匿名性を確保するために性別、年齢等は全て数値化されます。質問紙との連結可能匿名化ファイルとしてUSBメモリに保存します。USBメモリは筑波大学総合研究棟D727室内の、研究責任者（水野智美）と実施分担者（徳田克己）学生分担者（瀧田陽子）のみが施錠・解錠可能なファイルマスター内に保管します。電子データは、研究終了後にCD-ROMにデータを移し、研究成果公表後10年間、施錠できるファイルマスター内に厳重に保管した後、専用ソフトを用いてデータを消去、CD-ROMは粉碎破棄します。回答後の記録用紙は研究成果公表後10年間、施錠できるファイルマスター内に厳重に保管した後、シュ

レッダーにより粉碎破棄します。

録画撮影したビデオと回答後の質問紙は研究成果公表後 10 年間、施錠できるファイルマスター内に厳重に保管した後、シュレッダーにより粉碎破棄します。全ての調査から得られた研究結果の公表にあたっては匿名化したデータを使用し、個人が特定されないようにいたします。また、団体名も研究結果の公表にあたっては匿名とし、ビデオ録画したデータは一切、公表いたしません。

調査協力者である保護者と保育者に対しては、本研究の意義や目的、回答に正誤はないこと、協力は調査協力者の自由意思であり同意後も随時撤回が可能であること、ビデオ録画終了後に同意撤回が生じた場合、録画情報から削除することはできませんが、研究対象からはずし、解析は行わないこと、同意撤回有効期限は質問紙回答の電子データ化終了までであること、非協力による不利益が一切生じないこと、個人情報保護されることを説明書に明記します。

ビデオ撮影中、質問紙への回答中に、調査協力者が不快になったり拒否的な感情を抱いたりする場合には、随時協力を撤回できることを調査協力者に十分に説明します。調査に対する質問や意見を受け付けたり、万が一何らかの不都合等が生じたりした場合にすぐに連絡できるように、研究責任者、実施分担者、学生分担者の連絡先を記した説明書を配布し、調査終了後も調査協力者の手元に残るようにします。

この研究は筑波大学医学医療系医の倫理委員会の承認を得て、皆様に不利益がないよう万全の注意を払って行います。研究への協力に際してご意見ご質問などございましたら、気軽に研究責任者（水野智美）または実施分担者（徳田克己）学生分担者（瀧田陽子）にお尋ね下さい。

・研究責任者

氏名：水野智美

所属：筑波大学医学医療系・准教授

電話：029-853-6058

e-mail：mizunotomomi@nifty.com

・実施分担者

氏名：徳田克己

所属・職：筑波大学医学医療系・教授

電話：029-853-3446

e-mail：tokudakatsumi@nifty.com

・学生分担者

氏名：瀧田陽子

所属：筑波大学大学院 人間総合科学研究科

電話：029-853-6058

e-mail：s1730376@s.tsukuba.ac.jp

(保育者用 (担任用))

「就学前の子どもの‘歌う活動’に関連する要因の研究」にかかわる

調査へのご協力をお願い

子どもたちの歌とのふれあいについて研究をしています。いろいろな場所や状況で、子どもが歌を歌う機会が多くても、子どもたちがどのように歌と親しんでいるのかといった調査が行われてきていないため、子ども一人ひとりに対応した指導方法が、残念ながら整っておりません。

そこで、このたび、幼稚園および保育所・子ども園で、子どもたちがどのように歌に親しんでいるのかについての調査を企画しました。先生方からの貴重なご回答をもとに、「子どもたちに現れる歌い方の違い」の要因を明らかにして、子どもが歌を歌うための支援方法を提案していきたいと考えております。

調査内容は、保育中に5～6人ずつの小グループごとに歌を歌っている様子のビデオ録画(約10分ずつ)と質問紙調査です。

質問紙調査は、下記の2種類です。

- ①ビデオ録画前に、ご担当されているクラスの歌唱活動の様子(歌の選曲、歌の指導方法、クラスの音楽の取り組み状況)を伺う内容で、回答に約15分かかります。(全5ページ)
- ②ビデオ録画後に、ビデオ録画した子ども一人ひとりの歌を歌う時の様子、特性について伺う内容で、回答には、一人分に約5分かかります。(1人分全1ページ)

※質問紙調査②は、ビデオ録画終了後に配布させていただきます。

正しい答えや間違った答えというものはありません。思った通りに答えてください。答えたくない質問は空欄のまま構いません。途中で気分が悪くなった場合や、質問に回答したくない場合には、途中で回答をやめていただいてもかまいません。回答しないことで皆さんに不利益が生じることはありません。用紙に印刷不鮮明な箇所などありましたら申し出てください。

調査結果は本研究の目的以外には使用しません。回答は全て電子データ化され、統計的に処理されます。匿名性を確保するために性別、年齢等の属性はすべて数値化されます。質問紙との連結可能匿名化ファイルとしてUSBメモリに保存し、研究責任者(水野智美)と実施分担者(徳田克己)学生分担者(淵田陽子)のみが施錠・解錠可能なファイルマスター内に保管します。電子データは、研究終了後にCD-ROMにデータを移し、研究成果公表後10年間、施錠できるファイルマスター内に厳重に保管した後、専用ソフトを用いてデータを消去、CD-ROMは粉碎破棄します。録画撮影したビデオと回答後の質問紙は研究成果公表後10年間、施錠できるファイルマスター内に厳重に保管した後、シュレッダーにより粉碎破棄します。全ての調査から得られた研究結果の公表にあたっては匿名化したデータを使用し、個人が特定されない

ようにいたします。また、団体名も研究結果の公表にあたっては匿名とし、ビデオ録画したデータは一切、公表いたしません。全ての調査から得られた研究結果の公表にあたっては匿名化したデータを使用し、個人が特定されないようにいたします。また、団体名も研究結果の公表にあたっては匿名とし、ビデオ録画したデータは一切、公表いたしません。

以上をご了承いただいた上で、ビデオ録画および質問紙調査にご協力いただける場合は、添付しました同意書にご記入いただき、質問調査紙①回答後の質問紙と共に、回収箱にご提出ください。なお、ビデオ録画調査にご協力いただけない場合は、質問紙調査への回答は不要です。ビデオ録画終了後に同意撤回が生じた場合、録画情報から削除することはできませんが、研究対象からはずし、解析は行いません。調査を同意撤回される場合は、添付いたしました同意撤回書を、施設責任者にご提出ください。成果公表後は、撤回が出来ませんのでご了承ください。

この研究は筑波大学医学医療系医の倫理委員会の承認を得て、皆様に不利益がないよう万全の注意を払って行われています。研究への協力に際してご意見ご質問などございましたら、気軽に研究責任者（水野智美）または実施分担者（徳田克己）学生分担者（淵田陽子）にお尋ね下さい。

回答後は、

説明文書・・・1頁～2頁（お手元に残してください）

担任をしている子どもたち一人ひとりについての質問紙（見本）・・・3頁（お手元に残してください）

同意書・・・4頁（ご同意いただける場合は記入の上、設置した回収箱にご提出ください）

クラスの歌唱活動の様子についての質問紙・・・5頁～9頁（設置した回収箱にご提出ください）

同意撤回書・・・最終頁（同意撤回の申し出の際に、ご記入の上施設責任者にご提出ください）

・研究責任者

氏名：水野智美

所属：筑波大学医学医療系・准教授

電話：029-853-6058

e-mail：mizunotomomi@nifty.com

・実施分担者

氏名：徳田克己

所属・職：筑波大学医学医療系・教授

電話：029-853-3446

e-mail：tokudakatsumi@nifty.com

・学生分担者

氏名：瀧田陽子

所属：筑波大学大学院 人間総合科学研究科

電話：029-853-6058

e-mail：s1730376@s.tsukuba.ac.jp

(保護者用)

「就学前の子どもの‘歌う活動’に関連する要因の研究」にかかわる

調査へのご協力をお願い

子どもたちの歌とのふれあいについて研究をしています。いろいろな場所や状況で、子どもが歌を歌う機会が多くても、子どもたちがどのように歌と親しんでいるのかといった調査が行われてきていないため、子ども一人ひとりに対応した指導方法が、残念ながら整っていません。

そこで、このたび、お子様がどのような様子で、どのように音楽に親しまれているのかについて調査を企画いたしました。皆さまからの貴重なご回答をもとに、「子どもたちに現れる歌い方の違い」の要因を明らかにして、子どもが歌を歌うための支援方法を提案していきたいと考えております。

この調査は、

- ・お子様が家庭の中で、どのように音楽や歌に親しまれているのかを伺う、保護者の方への質問紙調査
- ・保育中に5～6人ずつの小グループでお子様が歌を歌っている様子のビデオ録画(約10分ずつ)を実施する調査
- ・お子様が園生活で、どのように音楽や歌に親しまれているのかを、保育者に問う質問紙調査(保育者への質問紙調査の内容は3ページ目に示しています)
- ・保育者が園生活で、どのような歌唱指導をしているのかを、保育者に問う質問紙調査の4つで構成しています。

保護者の方への質問紙は、全7ページです。回答におよそ15分かかります。

質問紙への回答は自由です。答えたくない質問は空欄のままで構いません。途中で気分が悪くなった場合や、質問に回答したくない場合には、途中で回答をやめていただいても構いません。回答しないことで皆さんに不利益が生じることはありません。用紙に印刷不鮮明な箇所などありましたら申し出てください。

【個人情報の取り扱い】

- ・ビデオ録画調査は、研究責任者(水野智美)、学生分担者(湊田陽子)が実施し、録画内容が研究責任者(水野智美)及び実施分担者(徳田克己)学生分担者(湊田陽子)以外の第三者の目に触れないように厳重に管理し分析を行います。
- ・質問紙調査の回答は、研究責任者(水野智美)学生分担者(湊田陽子)が開封し、回答内容が研究責任者(水野智美)及び実施分担者(徳田克己)学生分担者(湊田陽子)以外の第三者の目に触れないように厳重に管理し分析を行います。回答は全て電子データ化され、統計的に処理されます。匿名性を確保するために性別、年齢等の属性はすべて数値化されます。録画や

質問紙との連結可能匿名化ファイルとして USB メモリに保存し、研究責任者（水野智美）と実施分担者（徳田克己）学生分担者（瀧田陽子）のみが施錠・解錠可能なファイルマスター内に保管します。電子データは、研究終了後に CD-ROM にデータを移し、研究成果公表後 10 年間、施錠できるファイルマスター内に厳重に保管した後、専用ソフトを用いてデータを消去、CD-ROM は粉碎破棄します。録画撮影したビデオと回答後の記録用紙は研究成果公表後 10 年間、施錠できるファイルマスター内に厳重に保管した後、シュレッダーにより粉碎破棄します。全ての調査から得られた研究結果の公表にあたっては匿名化したデータを使用し、個人が特定されないようにいたします。また、団体名も研究結果の公表にあたっては匿名とし、ビデオ録画したデータは一切、公表いたしません。

調査結果は本研究の目的以外には使用しません。

以上をご了承いただいた上で、ビデオ録画調査、質問紙調査、お子様について保育者に問う質問紙調査にご協力いただける場合は、4 頁に添付しました同意書にご記入いただき、質問紙調査紙回答後の質問紙と共に、お渡しした封筒に入れて 1 週間以内に保育者と保護者との間で、連絡に用いている連絡帳に挟み、ご提出ください。なお、ビデオ録画調査やお子様について保育者に問う質問紙調査にご協力いただけない場合は、質問紙調査への回答は不要です。ビデオ録画調査にご協力いただけない場合には、お子様が一切、ビデオに入らないように撮影するとともに、分析の対象としません。また、保育者にもお子様の歌う様子の回答を求めません。ビデオ録画終了後に同意撤回が生じた場合、録画情報から削除することはできませんが、研究対象からはずし、解析は行いません。調査を同意撤回される場合は、添付いたしました同意撤回書を、施設責任者にご提出ください。成果公表後は、撤回が出来ませんのでご了承ください。

回答後は、
説明文書・・・1 頁～2 頁（お手元に残してください）
園生活でのお子様の様子を担任に質問する項目 見本・・・3 頁（お手元に残してください）
同意書・・・4 頁（ご同意いただける場合は記入の上、添付した封筒に入れてください）
質問紙・・・5 頁～11 頁（添付した封筒に入れてください）
同意撤回書・・・12 頁（同意撤回の申し出の際は、ご記入の上ご提出ください。）
書類をいれた封筒は連絡帳に挟み、 1 週間以内にご提出ください。

この研究は筑波大学医学医療系医の倫理委員会の承認を得て、皆様に不利益がないよう万全の注意を払って行われています。

研究への協力に際してご意見ご質問などございましたら、気軽に研究責任者（水野智美）ま

たは実施分担者（徳田克己）学生分担者（瀧田陽子）にお尋ね下さい。

・研究責任者

氏名：水野智美

所属：筑波大学医学医療系・准教授

電話：029-853-6058

e-mail：mizunotomomi@nifty.com

・実施分担者

氏名：徳田克己

所属・職：筑波大学医学医療系・教授

電話：029-853-3446

e-mail：tokudakatsumi@nifty.com

・学生分担者

氏名：瀧田陽子

所属：筑波大学大学院 人間総合科学研究科

電話：029-853-6058

e-mail：s1730376@s.tsukuba.ac.jp

資 料

資料 5 : 【調査同意書】

- ① 幼稚園園長・認定こども園園長・保育所所長用
- ③ 保育者用
- ④ 保護者用

(幼稚園園長・保育所所長・子ども園園長用)

同意書

筑波大学 医学医療系長 殿

私は、「就学前の子どもの‘歌う活動’に関連する要因の研究」にかかわる調査について、その目的と方法について十分な説明を受けました。また、ビデオ録画調査と質問紙調査に協力することに同意しなくても、私及び協力を依頼される対象者が何ら不利益を受けないことも確認した上で、対象者に対し依頼がなされることに同意します。

ただし、この同意は、あくまでも私自身の自由意思によるものであり、不利益を受けず随時撤回できるものであること、また、対象者においても、協力は各人の自由意思によるものであり、不利益を受けず随時撤回できるものであることを確認します。

平成 年 月 日

氏名

(自筆署名又は記名押印)

「就学前の子どもの‘歌う活動’に関連する要因の研究」にかかわる調査について、書面及び口頭により平成 年 月 日に説明を行い、上記のとおり同意を得ました。

説明者 所属

氏名

(自筆署名又は記名押印)

(保育者用)

同意書

筑波大学 医学医療系長 殿

私は、「就学前の子どもの‘歌う活動’に関連する要因の研究」にかかわる調査におけるビデオ録画調査と質問紙調査について、その目的と方法について十分な説明を受けました。また、私が本調査に協力することに同意しなくても、私が何ら不利益を受けないことも確認した上で同意します。

ただし、この同意は、あくまでも私自身の自由意思によるものであり、不利益を受けず随時撤回できるものであることを確認します。

平成 年 月 日

氏名

(自筆署名又は記名押印)

「就学前の子どもの‘歌う活動’に関連する要因の研究」にかかわる調査におけるビデオ録画調査と質問紙調査に、書面及び口頭により平成 年 月 日に説明を行い、上記のとおり同意を得ました。

説明者 所属 _____

氏名 _____

(自筆署名又は記名押印)

(保護者用)

同意書

筑波大学 医学医療系長 殿

私は、「就学前の子どもの‘歌う活動’に関連する要因の研究」にかかわる調査について、その目的、方法、個人情報の扱いに関する説明を読み、理解しました。また、ビデオ録画調査、質問紙調査と保育者が答える質問紙調査に協力することに同意しなくても、私及び協力を依頼される対象者が何ら不利益を受けないことも確認した上で同意します。

この同意は、あくまでも私自身の自由意思によるものであり、不利益を受けず随時撤回できるものであることを確認します。

平成 年 月 日

氏名 _____

(自筆署名又は記名押印)

お子様との続柄 _____

お子様の名前 _____

「就学前の子どもの‘歌う活動’に関連する要因の研究」にかかわる調査について、書面により説明を行い、上記のとおり同意を得ました。

説明者 所属 _____

氏名 _____

(自筆署名又は記名押印)

資 料

資料 6 : 【調査同意撤回書】

- ① 幼稚園園長・認定こども園園長・保育所所長用
- ③ 保育者用
- ④ 保護者用

(幼稚園園長・保育所所長・子ども園園長用)

同意撤回書

筑波大学 医学医療系長 殿

私は、「就学前の子どもの‘歌う活動’に関連する要因の研究」にかかわるビデオ調査、質問紙調査協力に同意し、同意書に署名しましたが、その同意を撤回します。

平成 年 月 日

氏名 _____

(自筆署名又は記名押印)

「就学前の子どもの‘歌う活動’に関連する要因の研究」にかかわる調査協力の同意撤回を確認いたしました。

平成 年 月 日

説明者 所属 _____

氏名 _____

(自筆署名又は記名押印)

(保育者用)

同意撤回書

筑波大学 医学医療系長 殿

私は、「就学前の子どもの‘歌う活動’に関連する要因の研究」にかかわるビデオ調査、質問紙調査協力を同意し、同意書に署名しましたが、その同意を撤回します。

平成 年 月 日

氏名 _____

(自筆署名又は記名押印)

「就学前の子どもの‘歌う活動’に関連する要因の研究」にかかわる調査協力について、調査協力の同意撤回を確認いたしました。

平成 年 月 日

説明者 所属 _____

氏名 _____

(自筆署名又は記名押印)

(保護者用)

同意撤回書

筑波大学 医学医療系長 殿

私は、「就学前の子どもの‘歌う活動’に関連する要因の研究」にかかわるビデオ調査、質問紙調査協力を同意し、同意書に署名しましたが、その同意を撤回します。

平成 年 月 日

氏名 _____

(自筆署名又は記名押印)

お子様との続柄 _____

お子様の名前 _____

「就学前の子どもの‘歌う活動’に関連する要因の研究」にかかわる調査協力の同意撤回を確認いたしました。

平成 年 月 日

説明者 所属 _____

氏名 _____

(自筆署名又は記名押印)